最高位魔法を使えない俺はハチになるエキストラユニークスキルで?生き抜く

チャンドラ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ムゲン＝アベイルは八歳の時に両親を亡くし、それ以来祖父と二人暮らしをしていた。

十六歳になったムゲンは街にある魔法学校に入学し、個性的なクラスメイトと共に切磋琢磨しながら学校生活を送ることになる。

東の国ジャポニからやってきた少女、ヤヨイ＝テンマ。

ある目的からＳ級冒険者を目指す少女、シャーリア＝アルフレッド。

魔法を使った犯罪者を取り締まる警察を目指す好青年、ウィル＝モニーク。

卒業試験の際にはＡ級のモンスターと遭遇したが、ムゲンは祖父から譲り受けたエキストラユニークスキルにより『ハチ』の姿に変貌した。

卒業試験終了後、互いの活躍を祈り、祖父の元に帰省するムゲンであったが、彼は慣れ親しんだ家で祖父の無残な姿を発見する。

祖父を殺害した犯人を見つけ出すべく元クラスメイト達に力を借りることになるが、徐々に驚愕の真実が明らかになる。

目次

入学試験 1
学園生活 11
魔法飴 17
アギ 22
鬼ごっこ 26
薬品作り 32
組手 37
特訓 41
魔法の種類 47
休日 52
妖刀と人魚 56
面談 64
オリモカ先の過去 68
結束 74
ハチ 78
卒業 84
手掛かり 89
友人との再開 94
シャイニングバッド 98
シャーリアの正体 102
覚悟 107
ヤヨイの正体 112
ムゲンとヤヨイ 118
赤きドラゴン 123

決着 130
新たなる力 135
協力依頼 142
真の能力 151
仲間の死 156
∞の力 160
第31話 164

入学試験

雑木林が延々と続く森の中、俺と祖父は目的地を目指して歩いていた。森は進んでいくに連れ、どんどん足場が悪くなっていく。
「ムゲンよ。お前ももう十六歳だ。モンスターの一匹くらい、一人で狩れるようにならんとな」
「うん。俺、頑張るよ」
祖父は白い髭をさすりながらズンズンと森の奥深くへと進んでいく。今日が初めての実戦の日である。
この俺、ムゲン＝アベイルは異世界転生者である――といっても死んだ直後から元の世界の記憶があった訳ではない。
八歳の頃、冒険者を生業としていた両親が亡くなった。その直後に俺は元の世界での記憶を取り戻した。
両親が亡くなってからは祖父のナハラ＝アベイルと共に山にある家で二人暮らしをしている。
「着いたぞ。ムゲン」
早足で歩いていた祖父が足を止める。俺の視界の先には手の平サイズほどのハチが巣を守るように飛び回っている。
「あれがハニービーと呼ばれるモンスターだ。さして凶暴なモンスターではないが、油断しないことだ」
「了解」
俺はゆっくりと大きな巣に近づいた。初めての実戦というだけあって中々緊張する。
すると、俺の姿に気づいたハチ達が『カチカチ』と音を立てながら近づけきた。
この音は蜂が敵に対して威嚇をしている音だ。
「いくぞ……ファイボール！」
基本魔法であるファイボールを一匹のハチに放つ。火の玉をモロに喰らったハチが黒焦げになる。
すると、巣の中から続々とハチが出てきた。迫り来る数々のハチをファイアボールで迎え撃つ。

「ファイアボール、ファイアボール、ファイアボール！」
倒しても倒しても湧き出てくるハチ達。流石に魔法を出し続けるのは厳しくなってきた。
「ムゲンよ！　一度距離を取って魔力を回復しろ！」
祖父の指示に従い、ハチの軍勢から距離をとった。懐からポーションを取り出し、飲んで魔力を回復する。
「ムゲン。中位魔法を使え」
中位魔法か……神経を研ぎ澄ませ、複数の敵を殲滅するのに適した魔法を繰り出すべく、手を前にかざす。
「エクスプロード」
呪文を唱えると前方に大きな爆発が起こる。爆音が鳴り響き、耳が『キーン』と響いた。
ボトボトとハチの死骸が次々と地面に落ちていった。
「これで完了……と」
煙が消えると、目の前に一匹のハチが俺の顔に迫ってきた。
「油断大敵だな」
祖父が俺の前に移動し、ハチを剣で真っ二つに切り裂いた。
「じいさんが手を出さなくても何とかなったさ」
ウソである。実を言うと心臓がバクバクと激しく振動していた。
一瞬、元の世界でのことがフラッシュバックした。
「そうか。ムゲンよ。巣を持ち帰るぞ。手伝ってくれ」
「分かった」
祖父と二人で巨大な巣を家まで運ぶ。巣の中にはたくさんのハチミツが入っているらしい。
一時間掛けてようやく家まで巣を運び切ることができた。
「ふー、疲れた」
額から流れる汗を手で拭う。モンスターを討伐した上に、大きな巣を家まで運ぶ。かなりの重労働と言ってもいいだろう。
「ムゲン。お前は家で休んでいろ。今夜はご馳走を作ってやろう」
「ありがとう、じいさん」
家の中に入り、シャワーを浴びてそのまま自分のベッドにダイブし

た。
「モンスターと戦うって……思ったより大変だな」
日頃から祖父には稽古を付けてもらっているが、命懸けの戦いとなると訳が違う。
今回の戦いで感じたが、俺は冒険者には向いていない。おそらく俺は両親や祖父のような立派な冒険者にはなれっこないだろう。
元の世界の記憶を取り戻した俺だからこそそう思える。
明日から街にある魔法学校に通うことになるが、卒業後は冒険者ではなく、魔道具開発者にでもなろうと考えている。
俺はしばらくの間、眠りに耽った。
「ムゲンよ。料理が出来たぞ」
部屋の扉越しから祖父が伝えてきた。祖父の声で目を覚ました俺は俺はリビングへと向かう。
リビングに入ると、テーブルに並べられているケーキ、ローストチキン、そして蜂の子といった料理が目に入った。
「どうだ？　中々豪華な料理だろう」
「そ、そうだね……」
豪華な料理には違いないが蜂の子――中々グロテスクな見た目である。そして、懐かしい。
テーブルの手前に置いてある椅子に座り、料理を食べることにした。料理はどれもこれも美味しい。勿論、蜂の子も。
ケーキはハチミツの味がする。
「すごく美味しいよ、じいさん」
「そうだろう。魔力を込めて作ったからな」
この世界において、料理は魔法で作ることができる。
しかし、それができるのはごく一部の人間だけだ。祖父はそのごく一部の人間に該当する。
「いよいよ明日だな」
「そうだね」
明日は魔法学校の入学試験である。今日の為に祖父から魔法について指導を受けた。

「ま、お前なら合格できるだろう。これから半年間しっかり頑張れよ」
「うん、頑張るよ」
食事を終えた後、自分の部屋に戻り明日の準備を進める。
魔法学校に入学するに当たって、寮で暮らすことになる為、たくさん物を持っていく必要がある。
試験結果は試験終了後、すぐに発表されるとのことで、合格した場合は明日にでも寮での暮らしが始まる。
簡単な荷造りを進めていると、扉から『コンコン』とノック音がした。
「ムゲンよ。入ってもいいか？」
「ああ、いいよ」
ジャージ姿の祖父が部屋に入ってきた。手には黒いローブを持っている。
「お前にこれをやる」
祖父がローブを渡してきた。かなり年季が入っている。
「これは？」
「昔、ワシが使っていたものだ。ワシからの餞別だ……そして」
祖父が俺の額に手をかざす。何やら不思議な感覚が起こる。体内の魔力が湧き出るような感覚。
頭の中には男性二人が大きなハチと対峙している記憶が浮かんできた。
祖父は振り返ると「それじゃ、おやすみ」と告げ、部屋から出て行こうとした。
何だ今の記憶は。何故だがとても悲しくなってきた。今すぐこの場で泣き出したいとすら思った。
「じいさん、今何をしたんだ？」
「お前にワシの魔法を授けてやった。今はまだ使えん……だが、来たるべき時が来たら使えるようになるだろう」
祖父はそう言い残すと部屋から出て行った。祖父の言葉が少し気になったが、明
日に備えて寝ることにした。

次の日の朝。朝食を食べた後、祖父の転移魔法で魔法学校のある街へと向かった。
「それじゃ、ムゲン。試験頑張れよ！」
「うん！」
祖父と別れ、魔法学校へと向かうことにした。街の中心部ではたくさんの人で賑わっているのを見かけた。
「街に来るのも久々だな」
魔法街『バキア』――この街ではありとあらゆる種族が集い、経済、軍事に魔法が普遍的に扱われている。
ふと見上げると、丘の上にそびえ立つ白く高いお城が目に入った。
その城は『バキア城』と呼ばれるお城で、そこでは凄腕の魔法使いや騎士が在中している。
冒険者として名を上げれば王国軍の一員として働けるらしいが、冒険者を目指さない俺には縁の無い話だ。
「ようやく着いた……」
俺は試験会場である『バキア魔法学校』の校門の前で立ち止まった。ゾロゾロと他の入学希望者が校門を通り抜けていく。
古めかしい木造建ての校舎はこじんまりとしているが、どこか伝統を感じさせるような威厳がある。
受付を済ませ、筆記試験会場である講義室へと入る。筆記試験では魔法に関する問題やこの街に関する問題が出題される。
「では、試験開始！」
試験監督が筆記試験の開始を告げる。俺は筆を持ち、問題を解き始める。出題される内容は基本的なものばかりでとても簡単であった。
筆記試験は合格にはそれほど関与せず、重要なのは次に行われる実技試験である。
スラスラと問題を解いていき、最後の設問を迎える。
Q.　魔法を使って叶えたい夢や目標はありますか？
随分と変わった問題だなと思った。何と記入すべきだろうか。
明確にやりたいことなんて特に決まっていない。しょうがない。
とりあえず、『この街の発展に貢献したい』とでも記入しとくか。

実技試験の会場であるグランドでは実技試験監督と思われる桃色の髪をした二十代前半くらいの女性が待っていた。
手には木の杖を持っており、黒を基調としたドレスを着用している。
女性の実技試験監督は「お前らー早くここに集合しろー」とハスキーな声で叫び、俺達を誘導した。
「よし、全員いるな。それじゃ、実技試験について説明する」
試験監督の手前には白線が引かれており、白線の二十メートル先には弓道で使われるような的が置かれている。
これは見て、実技試験がどんな内容なのかは大体察しが付いた。
「順番にこの線の前に立ち、基本魔法であるウォーターボールやファイアボールなどをあの的に向かって放て。射撃回数は三回までだ。どんな魔法を使うかは各自の判断に任せる。それじゃ、実技試験開始！」
入学希望者は次々と的を狙って基本魔法を放っていく。傾向として、三回とも同じ基本魔法を放つ者が多い。
そんな中、気になる者を目にした。
その者は長い赤毛をした少女で、他の者とは一線を画す研ぎ澄まされた魔力を感じる。
歳は俺と同じくらいだろうか。
少女は慣れた手つきで魔法を放つ。
「ファイアボール、エレキボール、アイスボール」
火、雷、氷の玉を連続で放った。杖から放たれた魔法は一寸の狂いもなく全て的の中心に命中した。
試験監督は感心したような少女を見つめる。
「ほう……お前、中々やるな。シャーリア＝アルフレッドだったか。お前は合格になるだろう。入学楽しみにしてるぞ」
「光栄です」
この時点でもう合格の知らせを告げるとは驚きだ。だが、あれくらいなら俺でもできる。
しばらくすると俺の番がやってきた。試験監督が俺に杖を差し出

す。
「すみません。杖を使わないで魔法を使ってもいいですか？」
「ああ、別に構わんぞ」
　基本的に杖を使う方が安定した魔法を繰り出せると言われているが、いつもは杖を使っていないためこの方がやりやすいと感じるのである。
「ファイアボール、ウォーターボール、ストーンボール」
　基本魔法を三連続で放つ。全て的の中心に命中させた。基本魔法を極めることが魔法上達の近道というのが祖父の教えである。
　こと基本魔法に関しては、俺は祖父からかなり鍛えられた。
「ほう……ムゲン＝アベイル。お前、中々見所があるな」
「それは買い被りすぎですよ」
　軽くお辞儀し、試験監督から離れた。
　そうだ。俺には両親や祖父ほどの才能はない。自分なりに努力はしてみたが、上位魔法を覚えることはできなかった。
　今の時点では他の入学希望者よりかは魔法が使えるだろうが、いずれ才能の限界を実感する時が来るだろう。
　まぁとにかく、これで合格は確実だろう。
「貴殿、かなりの手練れであると存じる」
　突然、横から蒼い髪をしたポニーテールの少女に話しかけられた。
「えっと、その……」
　なまじ祖父以外の人物と話す機会があまりない為、思わず言葉を詰まらせる。
「おっと、申し遅れた。小生の名前はヤヨイ＝テンマという。以後、お見知りおきを」
　少女は深々と頭を下げてきた。何なんだこの変わった話し方をする少女は……
「あ、あぁ……どうも」
　俺はヤヨイという少女に軽く会釈した。ヤヨイの服装は絹でできた白い和服のような着物であった。そして、彼女の腰には刀が携わられている。

「貴殿、名は確かムゲン＝アベイルであったか？　先ほどの魔法、実に見事であった。出来れば貴殿と少し話がしたく……」
「おい！　ヤヨイ＝テンマ。次はお前の番だぞ」
　試験監督がヤヨイの名前を呼んだ。ヤヨイは「南無三！」と叫び、慌てて白線の前に立つ。
「試験監督殿、一つお尋ねしたいことが」
「なんだ？」
「あの的に当てさえすれば、魔法の種類は問わないのだろうか？　その、基本魔法というものでなくてもよかろうか」
「ああ、魔法なら何でもＯＫだ。基本魔法で無くても構わん」
「御意。では……」
　ヤヨイが帯刀している刀を抜く。まさか刀を使った遠距離魔法でも使うのか？
「そんな魔法見たことないぞ……」
　思わずそんな独り言が口から出ていた。俺が知っているのは刀を強化させたり、刀に炎や雷などの属性を纏わせたりするものなどだ。
　俺だけではなく、他の入学希望者も彼女に注目している。
「ハァ！」
　ヤヨイの叫び声が耳に響く。的はなんと上下真っ二つに切り裂かれていた。
「す、すごい……」
　試験用に使われているあの的には防御魔法が掛けられており、生半可な魔法では傷つけることができるものではないはずである。
「試験監督殿。面目ない。あの的を斬ってしまった」
「こいつは驚いたな。まー、お前は合格になるだろうから終わりで良いぞ」
「承知いたした」
「お前ら、ここで待っててくれ。ちょっくら新しい的を持ってくる」
　試験監督はグランドから離れた。実技試験を済ませたヤヨイが再び俺の元に近づいてきた。
「ムゲン殿。どうやら小生、合格になるらしい」

「そうみたいだな。おめでとう。それにしても変わった魔法だね」
「さっきのは父上から教わった魔法剣術の一つ。しかし、ムゲン殿の魔法もあっぱれであった。ムゲン殿は誰かから指導を？」
「ああ。祖父から。元冒険者なんだ。うちの祖父は」
「そうであったか。小生も冒険者を志している。ムゲン殿もであろう？」
「いや、俺は……」
「なーに、二人で楽しそうに話しているの？」
　急に赤毛の少女が会話に割って入ってきた。この少女は……
「初めまして！　私はシャーリア＝アルフレッド。二人ともよろしくね！」
　さっき俺と同じく、的の中心に魔法を三回連続で当てた少女だ。
「こちらこそよろしく申す。小生はヤヨイ＝テンマ。東の国『ジャポニ』からやってきた」
　ジャポニか。祖父から少し話を聞いたことがある。
　ジャポニでは『侍』が国の警護に当たっており、魔法と剣術を緒りまぜた独自の剣術を扱うと言っていた。
　ジャポニは俺が元いた世界である日本と似ているが、文明レベルはおそらく江戸時代くらいだろう。
「そうなんだ！　私は生まれも育ちもこの街だよ。ムゲンくんは？」
「俺は小さい頃からオアバ山に住んでいた」
「へー、オアバ山に。あそこ、モンスター多いでしょ？」
　シャーリアの言う通り、オアバ山はたくさんのモンスターが生息している。
　このバキアの街から三十キロ以上離れているが、祖父の転移魔法によって瞬で到着する為、移動には不自由しない。
「まぁ。けど祖父と住んでいたからそんなに危ない目に遭ったことはないよ」
「そうなんだ。ムゲンくんのおじいさん、冒険者なの？」
「ああ。元だけどな」
「小生、是非ともムゲン殿の祖父と一度お手合わせしてみたいと存じ

る」
「いや……ヤヨイ。じいさ……祖父はもう冒険者を引退してるんだ。戦うのはよしてくれ」
「そうか。では、小生お二人と戦ってみたい」
こいつ……戦闘狂なのだろうか。
「ヤヨイちゃん。いい？　私達が戦うのは人じゃないわ。モンスターよ」
戦うのは人ではなくモンスターか。もっとも俺の場合は卒業試験以外でモンスターと戦うことはないだろう。
「ふむ……確かにシャーリアの言う通りであるな。だが小生は……」
すると、試験監督が『パン』と手を叩いた。俺達は試験監督の方に視線を移す。
「お前らー、早く次の試験場所へ映れ。次の試験会場は保健室だ」
試験監督が次の試験会場への移動を促す。
「二人とも行きましょうか」
「ああ」「うむ」

学園生活

次の試験会場である保健室に入ると、俺達は五列に別れて並ばされた。
複数の試験監督が前から順番に入学希望者を凝視し、用紙に何かを記入していった。
それが終わると次々に控え室に案内された。
俺も試験監督に凝視された後、控え室への移動を向かうよう告げられる。
控え室には試験を終えた入学希望者達がソワソワした様子で待っていた。
「ムゲン殿！　お疲れであった！」
「おお、お疲れ様……」
猛烈な勢いでヤヨイが駆け寄ってきた。テンマの後を追うようにシャーリアがゆっくりと近づいてくる。
「ムゲンくん、お疲れ様。なんかあっという間に終わったね。最後の試験、あれは何だったのかしら？」
「多分、魔力量を調べていたんだろ」
「魔力量……であるか？」
「この学校は魔法に適正の無いものは容赦無く落とされるからな。魔力量が低い場合は不合格の対象になってしまうと思う」
「そうか。では先ほど合格と言われた小生も決して楽観視できないという状況ということか」
「いやぁ……」
俺は「大丈夫じゃないか？」と言おうと思ったが止めた。絶対に大丈夫なんてことはない。
「それよりムゲン殿。一つ聞きたいことが」
「何だ？」
「貴殿、ジャポニに行ったことはあるのか？」
「いや、ないが……」
この世界に来てからはオアバ山とバキアの中心街以外に行ったこ

とがない。
「そうであったか。失礼した。ムゲン殿からジャポニ人のような雰囲気を感じてな」
　それは多分、俺が日本から転生したからであろう。
「ジャポニかぁ。私も一度行ってみたいな」
「ジャポニはとても良いところであるぞ。小生も目的を果たしたらジャポニに戻る予定である」
「目的？　何だそれは」
「悪いがそれは言えぬ」
「そ、そうか……」
「目的かぁ……私も早くS級冒険者になりないな」
「S級冒険者……ってことは王国軍に入りたいのか？」
　冒険者が王国軍に加入するにはS級と呼ばれるランクまで達する必要がある。
　S級冒険者になるには実績は積み上げていく必要があるが、手っ取り早くS級冒険者になる方法はS級モンスターという危険なモンスターを討伐することだと言われている。
　しかし、S級モンスターは最高位魔法を使える冒険者ではないと討伐するのが難しいと言われている。
「まぁ……そんな感じ……かな？」
「失礼するぞ」
　実技試験の時の試験監督が入ってきた。試験監督は俺達のことを一瞥した。
「試験終わったばかりで悪いがこれから合格者を発表する」
　もう合格者の発表か。試験終了後はすぐに発表されるとは聞いていたがここまで早いとは思っていなかった。
「ちなみに今回の合格者は三名だ」
　さ、三名だと……各試験に十名前後の合格者が出ると祖父から聞いていた。他の入学希望者もざわめき出した。
「それじゃ、早速発表するぞ。合格者はシャーリア＝アルフレッド、ヤヨイ＝テンマ。そして、ムゲン＝アベイル。以上だ」

合格者三名と聞いて何となく察しが付いていたが予想が的中した。
「一つ補足しておくといつもの試験であれば合格に達している者もいた。だが、今回合格した三人がずば抜けて魔法に対する適性が高い。今回の合格者を指導するのは私だ。この三人に付いてけるものはいまい。悪いが次の入学試験で頑張ってくれ」
不合格を告げられた者達が肩を落としながら控え室から出ていく。気のせいか、何名かの不合格達は俺達を睨んでいるように感じた。
「三人とも付いてこい。早速、オリエンテーションだ」
俺達三人が連れてこられたのは筆記試験で使った講義室であった。
椅子に腰を掛け、教卓に立つ先生と向かい合う。
「では、改めて三人とも合格おめでとう。これから半年間、君達の担任を務めるオリモカ＝シエンナだ。まずはこれを受け取ってくれ」
オリモカ先生は三枚の用紙を浮遊させ、それぞれ俺達の机の上に置いた。
表題には合格証明書と記載があり、内容を確認すると、学校でのルールがびっしりと書かれていた。
さらに一番下にはこう記載されている。
――ムゲン＝アベイル入学時の体内所有アギ　二千八百八十
「細かい校則とかは後で読んでくれ。まずは基本的なルールを説明する。入学者は全員寮に住むこと。知っているとは思うがな」
寮に入ることは入学を希望する者からしたら周知のルールである。
「ほう……そうであったか。知らなかった」
ヤヨイの呟きを聞いたオリモカ先生は目を丸くした。
「まさか知らないものがいたとはな……まぁ、いい。最低限必要なものは寮の中に備わっているから何も準備しなくても生活できるだろう。とにかく、入学する以上は寮に入るのは必須だ。分かったな？」
「御意」
「授業は八時から十六時まで。基本的には授業は私が教えることになるが、一部の授業は違う先生が担当することになる。後、お前達三人以外にもう一人生徒がいる。前の卒業試験で不合格になった生徒だ」
俺達以外の生徒か……一体、どんな人物なのだろうか。

「それと卒業までの大まかな流れだが、座学と実技の授業を行い、約半年後には卒業試験を行う。ここまでで何か質問はあるか？」
「あの……先生、学校外での外出は許可されているのでしょうか？」
シャーリアは軽く手を挙げ、先生に質問する。
「ああ。外出は許可されている。だが、門限は二十二時までだ。それを破るとペナルティが課せられるから気をつけるようにな」
「分かりました」
ずっと学校に籠もりきりというわけではないようだ。少し安心した。
「オリモカ殿。小生も質問よろしいだろうか」
「先生と呼べ。何だ？」
「卒業試験は一体何をやるのであろうか？」
「モンスター討伐だ。毎年恒例となっている」
バキアの生徒が卒業試験にモンスター討伐を行うのは冒険者の間でも知られている。
祖父が言うには冒険者達は決して生徒達に手を貸さずに見守るようギルドハウスの責任者から強く言われるらしい。
「なるほど。では、オリモカ先生。先生と剣を交えることはできるのだろうか？」
ある意味、宣戦布告とも取れる言葉をさらりと言ってのけるヤヨイ。
しかし、オリモカ先生は一切表情を崩すことはない。
「ああ。模擬戦くらいならできるが」
「左様か。是非ともお願いしたい」
「あー、分かった分かった。次の機会にな。他に質問は？」
俺も含め、他に質問しようとする者はいなかった。
「よし、それじゃこれから部屋の鍵と館内図を渡すから各自荷物を持って自分の部屋に向かうように。寮はこの学校の外にある鼠色の建物だ。後、授業は明日から始まるから八時前には席に着くようにな」
オリモカ先生から鍵を受け取り、部屋に向かう。寮は学校から百

メートルほど離れたところにあり、元の世界で見かけるアパートのような長方形の質素な建物であり、材質は煉瓦のようである。
部屋の中は八畳ほどの広さで、台所、トイレ、風呂といった生活に必要なものはきちんと備わっている。
鞄から荷物を取り出し、洗剤や服などを所定の場所に置いた。簡単に荷造りを終えた後、少し寮内を探索しようと思い、部屋から出た。
部屋から五十メートルほど歩いた先に食堂を見かけた。先ほど渡された用紙には朝、昼、夜と特定の時間帯に食堂を利用できると書かれていた。
「やぁ、もしかして新入生？」
ふと背後から話しかけられた。振り返ると、俺よりやや背が高く、金髪の青年が微笑を浮かべている。とても爽やかな好青年といった印象を受けた。
「は、はい……」
「そうか。僕はウィル＝モニーク。半年前に君と同じく、この魔法学校に入学したんだけど、留年しちゃってね」
この人がオリモカ先生の言っていたもう一人の生徒か。卒業試験は不合格になったらしいが、中々の魔力を秘めているのが分かる。
「俺はムゲン＝アベイルと言います。オアバ山に住んでいました」
たじろぎながらもウィルに挨拶する。
「アベイル……もしかして、あのナハラ＝アベイルのご家族？」
どうやらウィルは祖父のことを知っているようだ。
「そうです。ナハラ＝アベイルは俺の祖父です」
「そうなんだ！　まさかあのナハラ＝アベイルのお孫さんだったなんて感激だよ！」
「感激しているところ悪いですが……俺自身は大したことないですよ」
「またまたご謙遜を。ムゲン君は冒険者になるんでしょ？」
またそれか……俺は冒険者にはなりたくないんだ。
「いや、俺は……」
「ムゲン殿！」

ヤヨイの声が鼓膜に響く。シャーリアと共に食堂に入ってくるのが確認できた。
「そこのお方は？」
「さっき知り合ったんだ。ウィルさんって人で俺達と一緒に授業を受けることになるらしい」
「どうもウィル＝モニークです。歳は十七。卒業試験に落ちてしまって明日からみんなと授業を受けることになるけどよろしくね」
ウィルが二人に挨拶した。というか、十七歳だったのか。もっと年上だと思っていた。俺と一つしか変わらない。
「そうか。小生の名はヤヨイ＝テンマ。東の国ジャポニから参った。歳は十五であるぞ。よろしく頼む」
「シャーリア＝アルフレッドです。生まれも育ちもこの街で、歳は十六歳です。よろしくお願いします」
二人もウィルに対して自己紹介をした。そして、ここで二人の年齢が判明した。
「ヤヨイさん、シャーリアさん。これからよろしく頼むね」
「うむ。して、ムゲン殿。貴殿の歳はいくつであろうか？」
「俺は十六歳だ」
「ふむ、そうであったか。ということは小生が最年少ということか」
さすがは東の国からやってきただけあって上下関係を気にするようだ。
「まぁ、年齢なんて気にしなくてもいいじゃない！」
「そうだね。これから一緒に学ぶ同級生になるんだしもっとラフな感じで接してくれて構わないから」
「ふむ、そうであるか。ムゲン殿はどう思われる？」
「俺も気楽に接して良いと思うぞ。同期なんだしな」
「そうか。では、同じ立場ということで接しさせていただくとするか」
四人集まった俺たちは食堂で食事を楽しむことにした。

魔法飴

「ヤヨイさん。ジャポニってどんなところなの？」
　食事中、ウィルはヤヨイにジャポニについて尋ねる。俺も祖父からジャポニについて断片的に聞いてはいたがどんなところなのかとても気になっていた。
「ジャポニか……とても良いところぞ。料理も美味しく、人も義理堅し」
「そうなんだ！　いいね。観光名所とかある？」
「観光名所はやはりジャポニ塔であるぞ」
「ジャポニ……塔？」
　観光名所の名前を聞いたウィルが首を傾げた。
「うむ、ジャポニの首都、トウエドにある大きな塔である。他国からたくさんの人がそれを見にやってくるのであるぞ」
　ジャポニ塔……東京タワーみたいなものだろうか。
「へー！　見に行きたいな。あと、ジャポニには侍がいるんでしょ？」
「ああ、おるぞ。父上殿も侍であった」
「ヤヨイさんの父さんもなんだ！　どんな人なの？」
「家族の為に精一杯戦う素晴らしき人であった」
「あった？　ねえ、ムゲン。もしかして……」
「シャーリア殿の察するとおりぞ。小生の父上はもうこの世にはおらぬ」
　侍は冒険者と同じく危険が伴う職業である。職務中に亡くなってしまっても不思議ではないだろう。
「そっか……ごめんね、無神経なことを聞いて」
「シャーリア殿が気にすることではない。小生は卒業したら父のように立派に戦うつもりである」
　ヤヨイは意気揚々と意気込みを語った。
「僕は父さんが警察官でね。父のように魔法を使って悪さをする犯罪者を取り締まる警察官になりたいんだ」
「そうか。とても素晴らしき目標ぞ」

「ありがとう。シャーリアさんは卒業後の進路はもう考えてるの？」
「一応ね。私は冒険者になるつもりよ」
「そうか。ムゲン君もだよね？」
「いや……俺は冒険者になる気はないよ」
　しばらくの間、沈黙が続く。なんだか変な空気になってしまった。
「ムゲン殿、それはどうしてであるか？」
「俺は戦いじゃなくて別の分野でこの街に貢献したいと思う」
　それは詭弁であった。本当は戦いなどしたくないだけだ。だからこそ、こんな言い訳を使ってしまった。
「そうであったか。それは立派な志であるな」
　ヤヨイの言葉になんだか胸が痛くなる。違う、本当は――
「とにかく、これから無事に卒業できるよう、頑張りましょう！」
「うむ。小生も魔法剣術をもっと極めるつもりぞ」
「魔法剣術か。ヤヨイさんはどんな魔法剣術を使うの？」
「小生が得意としているのは『魔撃斬』と呼ばれる、遠くにある対象物を斬ることができる魔法である。先ほど、入学試験の際にも使用した」
　的を真っ二つに斬り裂いたあれか。あの魔法剣術、少なくとも中位魔法クラスの威力がありそうだ。
「そうなんだ。僕も見てみたかったな」
「実技の授業で目にすると思うぞ。ウィル殿は一体、どんな魔法を使うのだ？」
「基本魔法は大体使えるけど……得意なのは雷魔法かな」
「そうなんだ。雷魔法ね……私、ウィル君から雷魔法を教えてもらおうかな」
　シャーリアは随分と魔法の習得に貪欲なようである。
「いやぁ……そんなに誇れるものでもないよ。これから大変なこともあるだろうけどみんなで頑張っていこう！」
　他の三人と雑談をしながら食事を楽しんだ後、寮に戻りシャワーを浴びた。
「明日から授業か。頑張らないとな」

家から持ってきた本を取り出し、ページを捲る。
やはり、魔法に関する本は読んでいて飽きない。元の世界での俺はオカルトの類が好きであった為、すんなりと魔法にのめり込むことになったのかもしれない。
本を一冊読み終えた後、布団に潜り就寝することにした。

次の日の朝、窓から差し込む朝日を浴び、気持ち良く目覚めた俺は寝間着から祖父に貰ったローブに着替え、食堂に向かった。
食堂にはまだ誰もきていない。他のみんなはまだ寝ているのだろうか。
「ムゲン殿！」
振り返るとヤヨイとシャーリアの姿が確認できた。しかし、本当によく通る声である。
「貴殿、今日はなかなかイカした格好であるな」
「そ、そうか……ありがとう」
「それ、もしかしておじいさんのローブ？」
「ああ。そうだよ」
入学前、父から譲り受けたローブである。ローブは防御服にもなるらしいが、一体どれくらいの効果があるものか。
「やぁ、みんな。おはよう」
二人に遅れてくる形でウィルが到着した。四人揃った俺達は一緒に朝食を食べた後、必要な物を持って教室へと移動した。
席で先生が来るのを待っていると、『ガラガラガラ』と扉が開く音が耳に響く。
オカモト先生がコツコツと歩き、教卓に立つ。
「あー、では早速本日から授業を始める。最初の授業は魔法学についてだ。その名の通り、魔法の基礎的な内容を学ぶものだ。ウィルは一度受けているだろうが復習だと思って受けておけ」
「はい、分かりました」
「では、まずはこれを受け取れ」
先生はチュパチャップスのような飴を宙に浮かせ、俺達に渡してき

た。
「こいつは『魔力飴』っていう代物だ。普通のお店では売られていない。いいか？　魔力には属性がある。この飴を舐めることによって色が変化し、自分がどの属性に適しているか分かるんだ」
　そんな飴があるのか。今まで色んな本を読んできたが、魔力飴なんて初めて知った。
「それじゃ早速舐めてみろ。後、この魔力飴は一般人には極秘にされている。理由は魔法に適正のない者が舐めれば副作用を引き起こす危険な代物でもあるからだ」
　まじか……だがまぁ、俺なら大丈夫だろう。
　包装を外した。舐める前の飴玉の色は白である。
　早速飴を舐めてみると、普通に美味しいかった。
　飴を口から出し、色を確認すると黒色になっていた。
「お前ら、色を確認したか？　赤が火、青が水、紫が氷、黄色が雷、緑が風、茶色が土に適正があるってことになる」
　オリモカ先生が板書した……ってか黒は？
「オリモカ先生！　小生、青であるぞ！」
「あー、じゃヤヨイは水属性の魔法に適正があるってことになるな」
「私は赤……火属性みたいね」
　シャーリアは火属性か。隣に座っているウィルが持っている飴玉は黄色に変色していた。
「僕は雷……知っていたけどね」
　そういえば昨日、ウィルは雷魔法が得意だと言っていたな。
　ウィルはこの飴で自身の適性が判明してから、雷魔法を重点的に鍛えたのかもしれない。
「適正のある属性魔法は鍛え方次第で最高位魔法を身に付けることができる。それ以外の属性でも上位魔法までなら身につけることが可能だ……といっても正直、才能の有無が大きいんだがな」
　上位魔法か。俺の才能で果たして一つでも身につけることができるのだろうか。
「先生。黒は何に適正があるんでしょうか？」

「黒色!? はー、お前随分と珍しいの引き当てたなぁ」
やはり黒色は珍しいのか。板書されないくらいだしな。
「黒色は簡単に言えば『無属性』だ」
「無属性ですか？」
「そうだ。例えば、対象を回復させる『ヒール』、自分の身体能力を向上させる『ブースト』などがこれらに該当する」
無属性魔法か。あまり、戦闘向きな属性ではなさそうだ。
適正のある属性を確認した後、魔法学についてオリモカ先生が説明を始める。

アギ

「魔法は全ての人が扱える……と言っても実際に扱えるかどうかは才能の有無が大きいがな。そして、魔法を使う為の源を『アギ』と呼ぶ」

アギ？　どこかで見たような気が……

「昨日、渡した合格証明書を持っているか？　持っていたら机の上に出してくれ」

ウィルを除く俺達三人が机に上に置いた。

「合格証明書の一番下に数値が書いてある。それが入学時のお前らのアギの量だ」

アギの量……すなわち魔力の量か。俺のアギの量は二千八百八十ということか。

「一般的な冒険者は三千前後のアギを有していると言われている。普通の入学生は全員大体千五百から良くて二千アギなのに対して、お前ら三人は全員二千五百アギを超えていた。ここ何年かで最も高かった数値だ」

「オリモカ先生、ウィル殿のアギはいくつであるか？」

「今は不明だが……最後に測定した時は四千十三だったか？」

「はい、そうです」

四千十三か。既に一般的な冒険者を上回るほどのアギを有しているということになる。

「だがいいか？　アギの量が単純に強さと直結するわけではない。このことは頭に入れておけ。アギを使いこなす為の技術もアギの量と同じくらい重要だ」

祖父も同じことを言っていたな。

高い魔力を持った冒険者ほど自分の力を過信し、あっさりと命を落とす傾向が強いらしい。

「オリモカ先生。アギの量を増やすにはどうしたらよいのであろうか？」

「まぁ、訓練するしかないな。一般的には瞑想や滝行、イメージトレーニングなどが効果的であると言われている」

「左様か。しかし、どれもやっておるぞ」
「なら効果は出ていると言っていいだろう。今期合格者三人の中でもヤヨイ。お前が一番アギの量が多い」
「ヤヨイ、いくつなの？」
　シャーリアがヤヨイのアギの量を尋ねる。俺も気になる。
「三千四百二十二である」
「三千百四百二十二!?　す、すごいじゃない！」
　シャーリアはヤヨイのアギの量にえらく感心した。俺も純粋にすごいと思った。
「シャーリア殿はいくつであるか？」
「三千百十五だよ」
　シャーリアもものすごい量だな……というかアギが三千以下なのは俺だけか。
「左様か。ムゲン殿はいくつであるか？」
「……俺は二千八百八十だ」
「まぁ、今時点でのアギの量は大して重要じゃない。これから授業や個人での修行を通じて、上がっていくことだろう。ウィルだって入学時は二千ちょっとだったが、倍近く伸びた。もう、お前らは既に一般的な冒険者より多いんだ。これからもっと磨き上げるつもりでいけ」
　まだ上がる余地が残っているだろうか……いや、冒険者といった戦闘職に就くつもりがない俺はそもそも上げる必要などないか。
　魔法学の授業はその名の通り、魔法について本質的なことを学ぶようであった。さらに本では知ることができない内容も含まれていて中々興味深い内容である。
「体内のアギは使い切ると魔法が使えなくなる。再び使えるようにするにはどうすればいい？　答えてみろ、シャーリア」
　シャーリアが指名され、立ち上がった。
「速やかにアギを回復するべきです。仲間にヒールを掛けてもらうか、ポーションを飲むなどの対策を取ります」
「まぁ、そうだな。だが、覚えておけ。ポーションには一日に使用制限がある」

「使用制限……ですか？」
　この様子だとシャーリアは知らないようだ。もっとも冒険者以外には割と知られていないことではある。
「普通のポーションだと一日に三回飲んでしまうとそれ以上飲んでも効果はなくなる。ハイポーションで五回、グレートポーションで十回ってとこだな。だから、アギの管理はしっかり行わなければならない。闇雲に魔法を撃てばあっという間にアギが空っぽになる」
　魔法が使えないと危険な状況に陥るのは明白だ。弱いモンスターならともかく、強いモンスターに会った場合は命を落とす危険性もある。
「もしもモンスターとの戦闘中にアギがゼロになりそうな場合はどうすべきだと思う？　ムゲン」
　今度は俺が指名された。席から立ち上がり、質問に答えることにした。
「所持している逃亡用のアイテムを使ってモンスターから逃げます」
「まぁ、妥当なところだな。アギが文字通りゼロになると倦怠感が襲ってきて、ただ走るのすら辛くなる。だから、その前に逃亡すべきだな」
　クエストに繰り出す際は煙玉や野生のモンスターが好む固形食料を用意しておくのが基本だ。
「モンスターから逃げる……それが本当に正しい選択肢であるか？」
　俺の答えに対し、ヤヨイが疑問を唱えた。
「ならば、ヤヨイ。お前ならどうどうするきだ？」
　オリモカ先生がヤヨイにアギが無くなった時の対処法について尋ねる。
「小生なら戦い続ける。魔法が使えなくても己の肉体で、そして刀で」
「……まぁ、それも正しい答えではあるな。魔法が使えなくなった時でも戦いが避けられない事態というのも当然ありうる。だからこそ、冒険者は魔法だけでなく自分の肉体も鍛えておかなければならない。そこんところは実技でビシバシ鍛えてやるからな。安心して良いぞ」
　逆に不安しかない。魔法学の授業が終わると次は実技の授業であ

り、オリモカ先生からグラウンドに集合するように言われた。

鬼ごっこ

「よし、お前ら集合したな。二時間目の実技は基礎トレーニングだ。まずは……『チェンジ』」

オリモカ先生が呪文を唱えると、着ている服が体操着のような服に変わった。他のみんなも同様である。

「い、いつの間に服が」

「なんかちょっと大きいんだけど……」

シャーリアの体育着はサイズがあっていないようである。何がとは言わないが。

「なかなか動きやすい服装であるな！」

一方でヤヨイはぴったりなようであった。

「きびきびと動けるような服に替えてやった。授業後には元の服装に戻すが、後でお前らの寮に届けておくから明日からの実技の時にはそれを持ってくるようにな。それじゃ、まずはグラウンドを十周してこい」

オリモカ先生に指示され、グラウンドを走り始める。先頭を切ったのはヤヨイであった。

「早いね、ヤヨイさん」

「だな」

俺の隣にウィルが並んできた。適度なペースを保ちながら走り続ける。俺とウィルに少し遅れる形でシャーリアが続く。

「はぁ……なかなか疲れるな」

ヤヨイに釣られてペースが上がり、少々バテてしまったが当の本人は全く疲れた様子を見せない。

「ふー、良い汗かいたであるぞ」

「すごいな、ヤヨイさん」

ウィルがヤヨイの様子に感心しつつも、ウィル自身もあまり疲れていないようである。

「はぁ……みんな……すごく速いね」

一方、シャーリアは俺以上にバテているようであった。

「お前ら、こんなんでバテて貰ってちゃ困るぞ。ここからが本番だ。今から鬼ごっこを始める。鬼はお前ら。私は今から三十分間逃げる。私は魔法を使わないが、お前らは魔法を使っても良い。何か質問があるものはいるか？」
魔法ありの鬼ごっこ。これは俺達の方が遥かに有利そうである。
「オリモカ先生」
ヤヨイがすかさず手を挙げた。
「オリモカ先生、刀を使うことは可能であろうか？」
ヤヨイ、刀を使うつもりなのか……そんなことしたら物騒な鬼ごっこになる。
「ああ、別に構わんぞ。他に何か質問のある者はいるか？」
可能なのか……他に質問をしようとする人はいないようだ。
「いないみたいだな。それじゃ、早速始めるぞ。カウントがゼロになったら始める。五、四……」
いよいよか。カウントがゼロになったら一気に捉えてやる。四人いれば流石に捕まえることは不可能ではないはずだ。
「三、二、一、零」
「えっ……」「なぬ!?」
ヤヨイとシャーリアが同時に驚きの声をあげる。ウィルのみが無言のまま横に視線を移していた。
そして、ウィルの視線の先にはオリモカ先生がいた。俺たちから十メートルほど離れている。
「相変わらず速いなぁ。オリモカ先生」
は、速いなんてもんじゃない。とてもじゃないが追いつけそうな気がしない。
「し、信じられぬ……今、小生も目で捉えることができなかったであるぞ」
「おいおい、どうしたー？　お前ら、来ないのかー？」
オリモカ先生がヒラヒラと手を振る。想像以上に速いがこっちからも仕掛ける必要がある。
「アイスボール」

俺は牽制がてら氷の基本魔法を放つ。
しかし、オリモカ先生はそれを素手で掴み、
「あらよっと」
アイスボールを投げ返す。氷の塊が頬を掠め、俺の後ろを通り抜けていった。
「化け物か……」
思わずそんな感想が口から溢れる。
「あ？　誰が化け物だって？」
やばい。聞かれていた。すると、俺の隣にいたヤヨイが刀を抜く。
「オリモカ先生……小生も本気でいかせてもらうぞ」
「ああ、思う存分掛かってこい」
『ダッ』という地面を蹴り込む音が耳に入る。たった一歩でオリモカ先との間を一気に詰める。
「せぃあ！」
ヤヨイは勢いよく刀を振り下ろす。
「躊躇ない良い太刀筋だ。だが……」
ヤヨイの振り下ろした刀をオリモカ先生は白刃取りで掴んだ。
「ぐ、ぐぬぬ……」
ヤヨイは必死に歯を食いしばり、力を込めるが刀は全く動く気配はない。
「ヤヨイ。お前は私と剣を交えたいと言っていたな。だが、今のままじゃ私に一太刀も浴びせることはできないぞ」
ヤヨイの体が浮いた。驚くことにオリモカ先生は刀ごとヤヨイを持ち上げ、投げ飛ばした。
「いたた……染みたであるぞ」
ヤヨイが上半身を上げ、痛そうに背中をさすった。
「先生、僕とも遊んでくださいよ」
「む……」
いつの間にかウィルはオリモカ先生の背後に回り込み、タッチしようとした。しかし、すんでのところで躱される。
「やるな、ウィル。気配がほとんど感じなかったぞ」

「僕もいろいろと特訓してきましたから」
ウィルはオリモカ先生を捉えるべく、素早い速度での移動を繰り返すが、オリモカ先生は涼しそうな表情で逃げ続ける。
「ねぇ、ムゲン君。私達も手伝おう！」
「やめとこう。次元が違う。俺達が捕まえに行ってもウィルの邪魔になるだけだろう」
俺とシャーリアの魔法では牽制にすらならない。いや、それどころかウィルの邪魔をしてしまうことだってありうる
「むー……」
シャーリアが頬を膨らませ、睨んできた。
「最初から無理だって諦めるのは良くないよ！　例え役に立たなくても私はやるから！　ファイアボール、ファイアボール、ファイアボール……」
シャーリアが連続で放つ魔法に対して、オリモカ先生はまるで踊りでもするかのように華麗に避けた。
「なんて綺麗な避け方なんだ……」
いや待てよ。避け方？
あの時、オリモカ先生はアイスボールを素手で掴んだのに、なぜファイアボールはわざわざ避けた？
しばらくの間、考えていると一つの答えに辿り着いた。
「エレキボール！」
雷の基本魔法であるエレキボールを地面スレスレに放つ。これをオリモカ先生はジャンプして避けた。
「シャーリア、オリモカ先生に火の魔法で攻めてくれ！　俺は雷の魔法で攻める」
「うん！　分かった！」
シャーリアはファイアボールを放つ。一方、俺はエレキボールを放つ。
オリモカ先生は相変わらず見事な動きで避けてはいるが、少し表情が険しくなっているように見えた。
そして、地面の石に足を取られたのか、オリモカ先生がよろけ、体

勢を崩す。
「今だ！」
ウィルがオリモカ先生の肩に手を伸ばした。しかし――
「よっと！」
なんと、後ろに二回バク転して回避した。
「……ごめん、ムゲン君。私、もうアギが残ってないや」
「気にするな。俺もだ」
もう俺達に魔法を使うだけのアギは残っていない。
「困ったなぁ。僕もだよ」
やはり、ウィルも魔法を使っていたようだ。おそらく、移動速度を上げる魔法、『アクセル』でも使用していたのだろう。
「なんだ、お前ら。もう降参か？」
「まだであるぞ」
ヤヨイがゆっくりとオリモカ先生に近く。
「ヤヨイはまだやる気なんだな？」
「当然であるぞ。小生、こう見えても負けず嫌いである」
こう見えてというかどう見てもそうにしか見えない。
「そうか……どこからでも掛ってきな。気にせず刀を振れ。手足の一本や二本、治癒魔法でどうとでもなるから気にせず本気で来い」
「御意。では……」
ヤヨイが身体の中心に刀を構える。冷たい風が吹き込み、地面に生えている雑草が揺れる。ピリピリとした緊張感がこのグランドに張り詰める。
「ヤヨイのやつ、『魔撃斬』を使う気か……」
昨日、実技試験でヤヨイが見せた魔法剣術の一つである魔撃斬。
一体、オリモカ先生にどこまで通用するのだろうか。
「はぁ！」
ヤヨイが素早く刀を振り下ろす。
を切り裂いた――ただし、残像の方の。
「中々の威力と速度だったぞ。ヤヨイ＝テンマ」
オリモカ先生は悠々とヤヨイの背後を通り過ぎていった。

「おい、ウィル。今のオリモカ先生の動き、見えたか？」
「何とかね」
マジか……俺なんか今どうやって移動したのか全く分からなかった。
「どうするヤヨイ＝テンマ、まだ続けるか？」
「うむ。小生のアギは確かにもうない。しかし、小生には健全な肉体がある。故に諦められん！」
祖父が言っていた。魔法が使えない時、頼りになるのは己の頭脳と肉体であると。
俺だって祖父から鍛えられたんだ。
俺はオリモカ先生に向かって走り出し、触れようとする。
「おお、お前もやるのかムゲン＝アベイル。いい目だ」
触れそうで触れることができない――まるで雲みたいな人だ。
「ムゲン殿、助太刀感謝いたす！」
「気にするな」
ムゲンと連携してオリモカ先生を捉えようと試みた。
「いて！」「あた！」
しかし、勢い余って俺の頭とヤヨイの頭が激突した。
「す、すまぬムゲン殿」
「い、いや……絶対に捕まえるぞ！」
「うむ！」
身体の血が沸騰しているようであった。ヤヨイを見ているとこっちまで熱くなる。
「しょうがないから僕も付き合うよ」
「私も！」
ウィルとシャーリアも参戦する。四人で協力し、必死になってオリモカ先生を捕まえようと時間制限ギリギリまで試みたが、結局捕まえることが出来ず、罰ゲームであるグラウンド二十周を走るハメになった。
アギがほとんど無い状態で走るというのは、中々辛かった。

薬品作り

「悔しい！　小生、とても悔しいぞ！」
　お昼休みの食事中、ムゲンは二限目の鬼ごっこについて、とても悔しそうに嘆いていた。
「まぁまぁ、ムゲンさん。初めてであれだけ出来れば上出来だよ」
「ぐ……し、しかし……」
「僕らが初めてやった時は全然何もすることが出来なかった。それに比べれば三人とも魔法を使ってなんとか捕まえようとしていた。ほんと、みんな大したもんだよ」
「そういえばムゲン君。私に火の魔法を使うように言ってきたけど、何か意図があったの？」
「ああ。アイスボールは固形物で投げ返された。土の基本魔法であるストーンボールも同じく投げ返されるだろう。だが、流形体である火と雷を使った魔法なら効果があるんじゃないかと思ったんだ」
「なるほど、いい目をしているね。ムゲン君」
「そ、そうか？」
「うん。ムゲン君、君ならオリモカ先生をどうやって捕まえればいいと思う？」
　ウィルの質問に俺は少しの時間、考え込んだ。
　このメンバーの特性を生かしてオリモカ先生に一泡吹かせるとしたら――
「現状、一番早く動けるウィルがオリモカ先生を捕まえるのを担当する。俺とシャーリアが遠距離魔法でオリモカ先生の動ける範囲を制限して、ヤヨイが魔法剣術でウィルのサポートをする。これが一番良いと思うんだが……」
「うん、限りなく正解に近い。けど、それは今の持っている特性を使っての話だよね？」
　今の特性を使っての話？　一体、どういうことだ？
「当面はムゲン君の作戦でいこう。そのうち分かると思うから」
「分かる？　一体、何が分かるっていうんだ？」

「まぁ、それはおいおいね……それじゃ僕は一旦部屋に戻るよ。ご馳走様」
ウィルは食堂を後にし、部屋に戻っていった。
「ねぇ、ウィル君ってどうして卒業試験落ちたのかな？」
「どうしてって……そりゃ強いモンスターにでも出会したからじゃないのか？」
いくら優秀な冒険者でも自分以上のモンスターと遭遇したら逃げ出すのが普通だろう。
「うーん、まぁそうなのかな……けど、私から見てもかなり強いと思うんだけどな」
確かにオリモカ先生が規格外だとしても、あれだけ応戦していたのだ。
ウィルが対処できないほどのモンスターか。
「お二人方、一つお願いがある」
ヤヨイが何やら畏まった感じで頼みだした。
「ねぇ、何かしら？　協力できるならするけど」
「小生にも基本魔法とやらを教えて欲しい。小生はもっともっと強くなりたい」
「もちろん！　ムゲン君も手伝ってくれる？」
「ああ」
ヤヨイに基本魔法か。覚えれば確かに戦略の幅が拡がることだろう。
「感謝致す。代わりと言ってはなんだが小生も二人に剣術を指導いたすぞ」
「剣術かあ。覚えて損はないかもね」
「うむ！　それじゃ早速、今日の放課後からお願いしたい」
「分かった。それじゃ放課後な」
昼休み後が終わると再び教室に戻る。三限目の授業は魔法工学であった。
主な内容は魔道具の作り方や魔法反応についてである。俺が最も楽しみにしていた授業である。

「ポーションはアギの量が多いモンスターの血液を原材料に作られる。だが、もしもモンスターの血液を何の処理を施さずに飲もうすると勿論、身体に良くない」
俺が真剣にオリモカ先生の話を聞いていると隣に「グー」という寝息が聞こえてきた。
ヤヨイが机に突っ伏して眠っている。居眠りなんてもんじゃない。爆睡である。
「おいこら。起きろ。ヤヨイ」
オリモカ先生は本を宙に浮かせ、それを軽くヤヨイの額にぶつけた。
ヤヨイは顔を上げ、眠たそうな瞳を手でこする。
「すまぬ、オリモカ先生。つい居眠りを……」
「居眠りというかもはや爆睡だぞそれは。お前にとってはつまらない内容かもしれないが冒険者になるんだったら必要なことだからちゃんと聞いておけ」
「承知した」
「全く……さっきも言った通り、ポーションにはモンスターの血液が使われている。飲むとアギは一時的に回復するが食中毒になったりするからくれぐれもそのまま飲まんようにな」
「なるほど……では、オリモカ先生。焼いて食べれば良いのではないか？」
おお、その発想はなかった。ヤヨイのやつ、天才かもしれない。
「そう来たか……確かに食べてもアギは回復するだろうが、そんな時間は戦闘中にない」
「むぅ……確かにそうか。では、火の魔法で炒めて一口でガブリと」
「あー、とにかく食べることから頭を離せ。それで早速、今からお前達にポーションを作ってもらう」
マッチ、赤い液体が入ったフラスコ、アルコールランプ、箱に入った白い粉、銀製のスプーン、ヘラがオリモカ先生の浮遊魔法により、俺達の机に上に置かれた。
「作り方はさほど難しくない。この箱に入った白い粉にはフラスコに

入った血液にある毒物を浄化する作用がある。アルコールランプでフラスコ内の血液を熱し、三分ごとに白い子なをスプーン三杯入れる……ちゃんとヘラを使うようにな。これを三回繰り返せば完成だ……まぁ、お店で売られているものはもっと細かい処理が行われているが基本的な作り方が今言った通りだ」

俺は早速作業に取り掛かることにした。アルコールランプにマッチを使って火を付け、フラスコの血液を熱する。血液はすぐに『グツグツ』と音を立てて沸騰した。

注意深く時計を確認し、三分経過したらスプーン三杯投入した。

「うわ！」

『ボン』という大きな音が響いた。隣のヤヨイの席を見ると、フラスコビンが割れている。

「あちゃー、やっちまったか。粉の入れる時間や量を間違えると爆発するから気をつけるようにな」

そういうのは先に言って欲しいものである。俺は本で読んでいたから知っていたが。

時間、量を的確に見定め、作業を繰り返す。

「で、出来た……」

出来上がったポーションは綺麗な青色である。よくお店で見かけるような色だ。

「そろそろみんな出来たかー？」

周りの様子を確認すると、ヤヨイ以外は既に完成させているようである。

「よし、ヤヨイ以外は完成したようだな！　それじゃ、次の実技の授業後に飲んでみるように。ヤヨイは今日の放課後、私と補習だ。完成するまで帰らせないから覚悟しておけよ」

「ぐぬぬ……しょ、承知した」

魔法工学の授業後、実技の授業を行うべく体育館へと向かった。

体育館には竹刀を持った無精髭の老人の姿が見える。

「来たな……実技を担当するガルド＝シーラルだ。よろしくな」

ガルド先生に自己紹介され、俺達は「よろしくお願いします」と返

答した。
「ワシの授業では主に体術について指導を行う。後、剣道も行う予定だ。冒険者たるもの、強靭な肉体こそが何よりも重要だ」
凛とした声で授業の概要について説明を行うガルド先生。魔法を使うことあはあるのだろうか。
「という訳でまずは腕立て伏せ百回、上体起こし百回、スクワット百回、そしてランニング十キロ……つまり、グラウンド二十五周するように。始め！」
マジか……サ〇タマ先生のトレーニングかよ。なかなかにハードだな。

組手

「ほら！　ちゃんと腕を下まで下げろ、シャーリア＝アルフレッド！」
「は、はい！」
「ムゲン＝アベイルよ！　もっとリズミカルにスカワットせんか！　ちゃんと膝を曲げろ！」
「はい！」
　このトレーニングでシャーリアと俺は厳しく指導された。俺も山でそれなりに鍛えてはいたのだが、中々疲れる。
　一方でウィルとムゲンはそつなくこなしている。
「ヤヨイ＝テンマよ。お主は中々に見所があるな」
「ありがたいお言葉である。しかし、小生はまだまだ半人前であるぞ」
「そんなことは知っておる！　これからも鍛錬を怠るな！」
「承知した」
　スクワットまでこなし、俺達はグラウンドに向かった。
「どう？　ムゲン君、辛い？」
　ウィルは走りながら訊いた。ウィルはまだ涼しい顔をしている。
「まぁな……けど、こなせない程ではない」
「そっか。けど、過酷なのはここからだよ」
　ウィルが意味ありげに微笑む。なんだかとても不安になってくるな。
　十キロ走り終え、体育館へと戻った。
「やっと終わったか……今日からこれを毎日やってもらうからな。覚悟しておけよ！」
　ま、毎日か……リアルサ〇タマになりそうだ。いや、ならないか。もはや魔法を使う必要がなくなる。
「では、早速ワシと組手をやってもらう。二人ずつ掛かってこい」
　ウィルとシャーリア、俺とヤヨイでペアを組むことにした。
　一組目であるウィルとシャーリアがガルド先生に対峙する。
「よし、どこからでも掛かってこい！」
　開始と同時にウィルが間髪入れずに正拳を突き出す。しかし、ガル

ド先生はウィルの手首を掴み、軽く投げ飛ばした。
ウィルは空中で二、三回ほど回り背中を床に打ち付けた。
「いてて……さすがはガルド先生。そう簡単には決まらないか」
「シャーリア＝アルフレッド。お前も掛かってこい！」
「は、はい！」
シャーリアは攻撃を仕掛けるが、ガルド先生は何ともないように防御する。シャーリアの動きは何だかぎこちない。体術はあまり得意ではないのか。
ウィルも立ち上がり、再び参戦する蹴りを繰り出すが、ガルド先生は左手で防御し、右手でウィルの腹部に手刀を入れる。
「うご！」
ウィルが顔を青くし倒れた。おいおいおい、さっきから容赦なさすぎだろガルド先生。
だが、さっきからウィルに凄まじい攻撃を繰り出しているがシャーリアには特に何もしてこない。
ガルド先生も女性には優しいのだろうか。
「ウィル＝モニーク。まだまだ隙が多いぞ」
「す、すみません」
ウィルが苦しそうに立ち上がる。
「シャーリア＝アルフレッド。戦おうとする意思を強く持て。最初だから様子を見ていたが、このまま何もしないつもりならお前にも攻撃する」
「は、はい！」
ウィルとシャーリアは二人掛かりで戦うが最後まで有効打を与えることは出来なかった。
ガルド＝シーラル先生か……オリモカ先生ほどじゃないがこの人も化け物だな。
「次、ヤヨイ＝テンマ。ムゲン＝アベイル。準備しろ」
俺とヤヨイはガルド先生と向き合った。こうして対峙していると、隙が全くないのが分かる。
「ふむ……隙があらんな」

「……だな」
「一人なら攻略は不可能。だが、小生とムゲン殿の二人でなら攻略は可能。そうは思わぬか？」
「そうかもしれんな」
俺たちが小声でやり取りをしているとガルド先生が首を回す。
「おい、来ないのか？　来ないなら……」
「――ッ！」
ここで初めてガルド先生の表情が強張る。さっきの実技でも感じたが、ヤヨイの瞬発力は俺達の中でもズバ抜けて高い。魔法無しの状態であれば、ウィルよりも能力は高いだろう。
「せぃあ！」
ヤヨイが叫びすと連続してパンチを繰り出す。
いける――俺は後手に回っているガルド先生の背後に回り込んだ。
「おら！」「せぃあ！」
挟み撃ちになるような形で俺とヤヨイが同時に蹴りを繰り出す。
だが、自分の足に伝わる衝撃はヤヨイの蹴りであたった。
ガルド先生は上空で二、三回バク転し華麗に着地した。
「お前ら……中々、見所があるな」
くそ、避けられたか……だが、必ず一撃を入れてやる。俺が行動しようとする前に、ヤヨイが突然体勢を低くした。
「とりゃ！」
ヤヨイがそのままガルド先生にローキックする。
「……っく！」
しかし、攻撃をしたヤヨイの方が痛そうに顔をしかめる。いかん、俺も攻めねば。
真正面からガルド先生に向かっていく。どの攻撃を仕掛けてもカウンターを喰らうことは明白だ。ならばここは……
ガルド先生の顔の前で『パン』と大きく手を叩く。ガルド先生が目を丸くする。
「隙あり！」
ヤヨイの渾身の飛び膝蹴りが見事に決まり、ガルド先生は尻餅を着

く。
「てて……まさか猫騙しを使うとはな。ついびっくりしてしまった」
これは祖父と体術の訓練の時によく使っていた手だ。使う方によっては相手に隙を生み出すことができる。
しかし、なんとか一撃を入れることには成功したが、大して効いていないようだ。
「ムゲン殿、咄嗟の機転、誠に感謝致す」
「気にするな。もう一度二人掛かりで攻めるぞ！」
同時にガルド先生の懐に入り込む。しかし、一瞬にしてガルド先生は姿を消す。
「まだ遅いな」
背中に痛みが走ると、吹っ飛ばされた。くそ……オリモカ先生といい、この人といい、魔法を使っていないのにどうしてこんなに速く動けるんだ。
「いてて……今のは中々強烈な一撃であった」
ヤヨイも床に倒れこんでいる。立ち上がり、どう攻撃すべきかと模索した。
「せぃあ！」
俺が動き出す前にヤヨイが動いた。
あいつ、闇雲に……ヤヨイの放った右手のパンチと左足のキックを防せがれ、まもや投げ飛ばされてしまった。
俺は落下地点へと向かい、飛ばれたヤヨイを受け止めた。抱えたヤヨイを下ろす。
「助かった。ムゲン殿、感謝致す」
「ああ」
「ヤヨイ＝テンマ。思い切りが良いのは評価するがもう少し考えて行動すべきだな」
「ご指導誠に感謝致す。ガルド先生。しかしながら小生、じっと考えるのは苦手ぞ。動いておらぬと落ち着かぬのだ」
「そんなんじゃいつか早死にするぞ」
「では、ムゲン殿。そうならぬよう協力して戦おうぞ」

特訓

「いやー、ガルド先生とても手強かったであるな。ムゲン殿！」
「そうだな」
結局、あの後ほとんど何もできなかった。
実技の授業が終わり、教室に戻ってきた俺は魔法工学の授業で作成したポーションを飲んだ。
爽やかな飲みご心地で我ながら美味しい……が、特段魔力が回復した様子はない。
そもそもさっきの授業で一度も魔法を使ってないから当然か。
「よーし、お前らー。ホームルームを始めるぞー。ポーションはもう飲んだか？」
オリモカ先生が教室に入ってきた。
「一応飲みましたけど……さっきの授業じゃ全然魔法を使わなかったです」
ウィルの言葉を聞き、オリモカ先生は頭に手をあて、「あー」と嘆く。
「そういえばガルド先生の授業だったか……すまん、すっかり忘れてた。まぁいい。とりあえず、今日一日授業を受けてみてどうだった？」
「オリモカ先生もガルド先生もとても強い。小生達も卒業までに先生達みたく強くなれるだろうか？」
「いや、無理だろうな」
オリモカ先生はあっさりと否定した。
「私だってかなり長い時間を掛けて今の力を身につけたんだ……って言っても全盛期はとっくに過ぎているがな。私みたいに慣れるのは実際に冒険者になってしばらく経ってからだろう」
「そうか……それはとても残念である」
「ヤヨイ。お前はななんでそこまで強くなりたいのかは分からないが、あんまり慌てるな。まだ若いんだし、じっくりと力を身に付けるつもりでいけ」
「……承知した」

確かにヤヨイの強さへの渇望は異常だと言っていいかもしれない。
何かあるのだろうか――例えば復讐とか
「あと、お前は魔法工学の補修があるから残るようにな」
「あ……そ、そうであった！」
ホームルームが終わると、一度寮に戻ることにした。
ヤヨイの補修が終わり次第、シャーリアと共にヤヨイに基本魔法について教える予定である。
補修は一時間ほどで補修が終わることだろう。
俺は早速、魔道具の開発を行うことにした。小屋の中にある材料を使って、魔道具を作っていく。
作るのはモンスターに効く痺れ玉だ。薬品の調合を行い、慎重に作り上げる。
「出来た……！」
出来上がった銀色の球体をじっくりと眺める。一定以上の衝撃を与えると球は割れ、痺れ作用のあるガスを噴射する。
実際に使わなければ効果は分からないが、かなり強めに作用するよう設計した。
「ムゲン殿！　何をしているか！」
「うわ！」
突然、ヤヨイが小屋の中に入ってきた。
「ムゲン殿！　約束したではないか。基本魔法について教えてくれると！」
「わ、悪い……つい夢中になってた。よくここが分かったな」
「ウィル殿が教えてくれたのだ。ムゲン殿、それは何であるか？」
「痺れ玉っていうモンスターの動きを鈍らせる魔道具だよ」
「ほう、痺れ玉とな。これをムゲン殿が……さすがであるな」
「いやぁ、それほどでも」
ヤヨイに褒められ、なんだかちょっと照れくさくなった。
「ちょっと見せてもらってもよいだろうか？」
「ああ、別にいいよ」
俺はヤヨイに痺れ玉を手渡す。ヤヨイはそれを訝しんだ様子で見

つめる。
「とう！」
　そして、何を思ったかヤヨイは結構強めに痺れ玉を小突いた。痺れ玉は割れ、中から黄色いガスが噴射し、ヤヨイの身体がガスに飲み込まれた。
「お、おいヤヨイ！　大丈夫か？」
「だ、大丈夫であるぞ。なるほど……確かにこれは結構くるものがあるな」
　ヤヨイは身体をブルブルと震わせていた。
「お前、どうして小突いたりするんだ」
「興味本位でつい……思ったよりあっさりと割れるのであるな」
「これくらいの強度にしないと実戦じゃ使えないからな」
　三十秒ほど時間が経つと、ヤヨイは普通に身体を動かせるようになった。
「いやぁ、なかなか強烈であった。ムゲン殿、せっかく貴殿が作った魔道具を台無しにしてしまってしまなかった」
「いや、気にしなくていい。どうせ卒業試験にならないと使う機会もないだろうしな」
　ん？　待てよ。さっき、俺が作った痺れ玉はモンスターにしか作用しないはずだ。
　どうしてヤヨイに効いたんだろうか。もしかして調合を間違えたのだろうか。
「どうしたのであるか？　ムゲン殿」
　ヤヨイが不思議そうな表情で俺の顔を覗き込む。
「い、いや……なんでもない。シャーリアが待っているだろうしそろそろ行くか」
　俺とヤヨイは構内にある広場へと向かう。そこでシャーリアが待っているようであった。
　広場にある椅子でシャーリアが退屈そうに座っているのが見えた。
「あ……おーい、二人とも」
　俺達に気がついたシャーリアが手を振る。

「待たせて申し訳ない。シャーリア殿」
「もう！　遅いよ二人とも」
「悪い。俺のせいなんだ。ウィルから譲ってもらった魔道具開発室でつい夢中になってしまってな」
「うふふ、嘘だよ。そんなに怒ってないから。それじゃ始めようか」
　早速、三人で修行を開始することにした。まずはヤヨイに水魔法について教える。
「水魔法を使うときは頭の中に水を思い浮かべるんだ。そして、呪文を唱えれば発動する。こんな風にな。ウォーターボール」
　手本を見せるべく俺はウォーターボールを放った。
　水の塊はコンクリートの壁にぶつかり、『バシャッ』と音を立てて弾ける。
「なるほど……では、小生も。ウォーターボール！」
　ヤヨイは呪文を唱えたが、魔法は発動しなかった。
「何も起こらないであるな……」
「最初からそう簡単に上手くいったりしないよ。それに最初は杖を使ってやってみた方がいいよ。はいこれ。貸してあげる」
「うむ。ではありがたく使わせていただくぞ」
　ヤヨイは杖を受け取り、構えた。体内のアギを魔法へと変化させようとするのが伝わる。
「ではゆくぞ……ウォーターボール！」
　しかし、何も起こらない。
「くっ……上手くいかんな」
「何度も繰り返していけばきっと成功するよ！」
「そうであるな。よし！　鍛錬に励むであるぞ！」
　しばらくの間、ヤヨイはウォーターボールの発動を試みた。俺やシャーリアは見本として何度かウォーターボールを放った。
　すると、何十回かの試みにて、杖の先に小さな水の玉が出来上がっているのが分かった。
「おお！」
　しかし、玉の形に形成されるとすぐに消えてしまった。

「むぅ……また失敗してしまった」
「いや、かなりの上達ペースだと思う。俺なんか使える水を具現化させるまでに一ヶ月くらい時間が掛かったからな」
「ムゲン殿でもそれくらい掛かるものであるか。魔法というのは実に奥が深いな」
「けど、ヤヨイは魔法剣術を使えるじゃない。そっちの方が難しいんじゃないの？」
　シャーリアの言うことはもっともだ。ヤヨイが使う魔法剣術は間違いなくレベルの高いものであると思われる。
「確かに魔法剣術を身につけるのは大変であった。しかし、この基本魔法も中々に難しい」
「そうか。どの魔法も一朝一夕で身に付けることができるものじゃないからな」
　俺が最初に身につけたのはファイアボールであったがそれが覚えられたからといって、すぐにウォーターボールを使えたわけではなかった。
「そうであるな。よし！　もう少し鍛錬を続けるであるぞ」
　その後もヤヨイはウォーターボールの発動を試みたが、成功させることはできず、気づけば日が暮れていた。
「むぅ……もう日が暮れてしまった。二人に剣術を教えようと思っていたがつい夢中になってしまったである。すまない」
「気にするな。それに、よく考えたら俺は刀を持っていないからな。シャーリアは？」
「私も持ってないや」
「ふむ、確かにそうであるな」
　刀は魔道具ではなく、（一部例外もあるが）購入するという選択肢しかない。
「それじゃ休日にみんなで刀を買い物に行きましょう！」
「買い物であるか。それは良い提案であるな」
「ムゲンくんはどう？」
「ああ。俺はどっちみち買いに行く予定だったからな」

久々に街に繰り出すのも悪くない。魔道具開発のために買っておきたいものが色々とあった。

「夕食の時、ウィルくんにも声を掛けてみるね」

魔法の種類

バキア魔法学校――ここでの学校生活は中々に面白く刺激的であった。
オリモカ先生との鬼ごっこは連日行われた。
入学してから五日目の実技の授業の日。今日も鬼ごっこが行われている。
「せぃあ！」
ヤヨイは刀を振り回すが、相変わらず刀は空を切る。
「エレキボール！」「ファイアボール！」
俺とシャーリアが放った魔法をオリモカ先生は楽々と避ける。
「やはり当たらないか……」
俺は再びエレキボールを放った。照準をオリモカ先生に合わせ、飛ばしていく。
「何度やっても同じだ」
エレキボールの軌道を下に変える。やがて、地面にぶつかり、砂埃が巻き起こる。
「隙ありです。先生」
ウィルがオリモカ先生をタッチしに行った。
「ふー、ちょっとヒヤッとしたなぁ……」
オリモカ先生はウィルから離れた場所にいた。
「これでもダメか……」
昨日の夕食の時、打ち合わせした通りに作戦を実行してみたが失敗に終わった。
「うおおおお！　ウォーターボール！」
ヤヨイがオリモカ先生に向かって走りながら魔法を放つ。しかし、魔法によって作り出された水の玉は照準が大きく逸れてオリモカ先生の遥か横を通り過ぎていった。
「ヤヨイのやつ。できたのか……」
修行の時は一度も成功しなかった。だが、外れたとはいえ実戦で魔法を発動させることができた。

なんという勝負強さだろうか。
「ウォーターボール！」
今度はオリモカ先生の顔に向かって飛んでいった。オリモカ先生は顔を動かし、避ける。
「ふん！」
ヤヨイが剣を振り抜く。
「ほう。多少、付いていけるようになったな」
「ふむ。やはり掠りもせぬか」
ヤヨイのやつ、少しづづオリモカ先生の動きが見えてきているのだろうか。俺には未だに捉えそうにない。
「……時間切れだな。罰ゲームだ。グラウンド二十周走ってこい」
今日も鬼ごっこに破れた俺達は今日も罰ゲームとしてグラウンドを走る。

そして、昼食後にはガルド先生との体術の授業が実施された。ちなみに昨日は剣道を使った授業であり、スパルタと言って差し支えない内容であった。
今日はウィルとともにガルド先生と組手を行う。
「そりゃ！」
飛び上がり、蹴りをしようとしたがあっさりと足首を掴まれる。
「安易に飛び上がるでない！　この愚か者め」
「よっと……大丈夫かい？」
「う、ウィル……ありがとう。大丈夫だ」
投げ飛ばされた俺の身体をウィルが抱きかかえてくれた。俺が女性なら思わず惚れてしまいそうなシチュエーションである。
「一人じゃとても敵わない。連携して崩していこう」
「だな」
しかし、この日も大した授業を上げることができなかった。ガルド先生との授業の後は魔法学の授業である。
俺の好きな授業の一つであり、今日の授業は魔法のランクについてであった。

「魔法には習得難易度によってランク分けされる。特別な才能が無くても習得可能な基本魔法だ。該当するのがウォーターボールやファイアボールとかだな。一般的な冒険者はほぼ全ての基本魔法を使える。消費アギは大体二百前後ってとこだな」
　基本魔法については祖父から教わっていた。習得するのに結構時間が掛かったものである。
「基本魔法の一つ上のランクが中位魔法。基本的にクエストやダンジョンで主に使われるのがこれだ。フレイムランスやアクセルがこれに該当する。これも努力しだいで属性に適正が無くても身につけることができる。消費アギは四百から五百ってとこだな」
　俺も中位魔法までなら大体は使うことができる。しかし、『その先』がどうしても難しかった。
「そして、中位魔法の一つ上が上位魔法。ここから使い手が限られてくる。上位魔法を一つも使えない冒険者もザラにいる。自分の適性の属性以外の上位魔法は身につけることは難しいとされている……だが、S級冒険者やベテランの冒険者の中には適正の無い上位魔法も使えるものもいる。私もその一人だ。消費アギは千から二千アギってとこだな」
　上位魔法はいくら努力しても身につけることが出来なかった。先生が言った通り、冒険者の中で上位魔法を使えないものもいるが、もし俺が仮に冒険者になってもいずれ限界を悟る時が来るだろう。
　だから、俺は冒険者を志そうとは思わない。
「さらにその上が最高位魔法。文字通り最高位に位置する魔法だ。最高位魔法は適正のある属性以外は身に付けることはできない。私も最高位魔法が使えるが、風魔法の最高位魔法しか使えない。消費アギは三千から五千アギだ」
「オリモカ先生。二つ以上の属性の最高位魔法を扱うことは不可能であるということか？」
「その通りだヤヨイ……と言いたいところだが、バキアにおいて一人だけ二つ以上の属性の最高位魔法を使える者を知っている」
「一体それは……誰であるか？」

「ナハラ＝アベイルという伝説の冒険者と呼ばれた人物だ。誰かは知っているな？」
「なるほど、ムゲン殿の祖父であるか」
　祖父は全ての属性の最高位魔法を使えると言われている。しかし、祖父が実際に使ってるのを一度も見たことはない。
「その通りだ。まぁ、最高位魔法なんてお前達にはまだ早い。まずは基本魔法をしっかりと身に付けることだ。お前達ならすぐにできるだろう。卒業前には上位魔法を一つ身につけてほしいと思っている」
　俺はともかく、他の三人ならできるだろう。ウィルに関してはすでに使えるのではないかと勘繰っている。
「ちなみにさっき言ったのは魔法の説明だ。これとは違って『エキストラユニークスキル』と呼ばれる特殊な能力についても説明する」
　エキストラユニークスキル？　今までたくさんの本を読んだ俺でも聞いたことのない単語であった。
「前にも言ったが全ての生き物の体内にはアギが存在している。モンスターが死ぬ時、周囲には一瞬だけそのモンスターのアギの波動が拡散する。モンスターと自分のアギが共鳴した時、エキストラユニークスキルを身に付けることができる。どうなるかっていうとな、そのモンスターの力を使うことができるんだ」
　し、知らなかった。そんなことが起こりうるのか。
「なるほど。では、もしも小生がドラゴンを倒した場合、ドラゴンの力のを使うことができるということであるな？」
「その通りだ。しかし、実際にエキストラユニークスキルを習得した人は少ない。それこそ、最高位魔法を使える人数より少ないだろう」
「先生！　ムゲン君のおじいさまはその……エキストラユニークスキルを使えるんでしょうかか？」
　シャーリアが手を上げて質問した。
「いや、私もそこまでは……ムゲン、どうなんだ？　それらしいのを使っているのを見たことはあるのか？」
「いや、俺も見たことはないですね」
　祖父が魔法を使うのは何度も見たことはある。だが、エキストラユ

ニークスキルらしきものを使っているのを見たことはない。
「なら、ナハラ＝アベイルさんもエキストラユニークスキルを習得してないのだろう。そして、エキストラユニークスキルは普通の魔法と違って他者に譲渡することもできる」
エキストラユニークスキルか……もしもそれを俺が習得できれば冒険者を志す気にもなるかもしれないが、生涯習得することはないだろう。

休日

「いやー、長い一週間であったな！」
今日の授業が全て終わり、夕食の時間にて俺達四人は食事を嗜んでいた。
「だな。しかし、オリモカ先生には全く敵わないな。鬼ごっこをするたび、先生の凄さを実感するよ」
「そうだね。それで、ムゲン君。一週間を通して何かいい作戦は思いついたかい？」
この一週間、前に俺が考えたフォーメーションで鬼ごっこを行なっていた。
俺とシャーリアが遠距離魔法で援護し、素早く動けるヤヨイは魔法剣術を使ってウィルをサポートし、オリモカ先生に現状唯一付いていけるウィルがオリモカ先生を捕えるというフォーメーションであった。
しかし、もっといい方法があるのではと思い始めた。
「今日の鬼ごっこを通して思った。ヤヨイ、もう少ししたらお前がオリモカ先生を捉える役割を担うべきだ」
「小生が……であるか？」
今期三人の中でオリモカ先生を捕らえることができるとしたらおそらくヤヨイだけだろう。
まだ、ヤヨイは自身の移動速度を上げる魔法『アクセル』を使えないが、覚えたらウィルよりも速く動けると踏んでいる。
「僕もそう思うよ。ヤヨイさんならいずれ僕より速く動けるようになるだろう」
「そうであるか……よし！　ムゲン殿の作戦に乗った！」
「オリモカ先生を捕まえる為に各自の実力アップは必須ね！」
「うむ！　皆で切磋琢磨し合おうぞ！」
「うん。まぁ、とにかくみんな一週間お疲れ様。明日はみんなで楽しもう。折角の休みなんだし」
明日の買い物を俺はとても楽しみにしていた。魔道具に関する本

を読むたび、自分で作ってみたいものがどんどん増えていったのである。
　しかし、材料を持っていないため明日の買い物で必要な材料を買っていこうと考えていた。
「小生、街に繰り出したこともないのでとても楽しみであるぞ」
「そうなんだ。ねぇ、ヤヨイ。よかったら一緒に服とか見ない？」
「服……であるか？　戦闘に役立ちそうな服があるのであるか？」
「違うって！　もっと、こう……可愛い服とかお洒落な服とか一緒に見ましょう！」
「うむ……しかし、そのような服とか着て一体どうなるのであるか？」
　ヤヨイは案の定というか、お洒落には疎いようだ。
　そんなヤヨイの様子を見て、シャーリアは呆れたように大きな溜息を吐く。
「折角可愛い容姿をしているのに勿体ないわね……こうなれば、明日ヤヨイに服の魅力を教えてやるんだから覚悟しなさい！」
「お、お手柔わかにお願いしたい……」

　そして次の日の朝。俺達四人は校門の前に集まっていた。
「それじゃみんな、集まったことだし行きましょうか」
　シャーリアが先陣を切って、街へと向かう。バキアの中心街は学校から歩いて十分ほどの場所にある。
「おお……すごい人だかりであるな！」
　中心街の一つである中央通りではたくさんの人が行き交っている。ここではエルフや獣人など、様々な種族を目にすることができる。
「それじゃ、お店に入りましょう！」
「うむ。では早速武器屋に向かおうぞ」
「へ？　まずは服屋さんに行くでしょう？」
「俺は先に魔道具店を見たいんだが……」
　三人とも意見がバラバラであった。そんな様子を見て、ウィルはどこか可笑しそうに微笑む。
「それじゃ、あれだね。集合時間を決めて各自自由に店を見ることに

しようか」
　ウィルが効率的な提案をした。さすがは最年長者である。
「ええ!?　折角みんなで来たのにどうしてそうなるの？」
「まぁまぁ。シャーリア殿。良いではないか。小生もウィル殿の意見に賛成であるぞ」
「全くしょうがないわね……それじゃ、十二時にまたここで集合ね！」
　単独行動を開始した俺はある魔道具店に入った。ランプによって灯されている照明は薄暗く、ポーションや煙玉といった冒険者御用達アイテムや魔石や薬草といった魔道具開発に使われる素材が棚に置かれている。
「おぉ……」
　品揃えの良さに思わず目を見張った。
「お客様。何かお探しでしょうか？」
　店員がにこやかに笑みを浮かべながら尋ねてきた。
　おっと、忘れていた。まずは魔弾銃を作る為に必要な材料を購入するんだった。俺はすぐさまポケットからメモを取り出した。
「えっと、スチール石とチタン石、スカンジウム石……後、工具セットってありますか？」
「はい！　少々お待ちください」
　店員が商品を持ってくるのを待っている間、販売品である他の素材を眺めることにした。
「おお……これがドラゴンの目玉か」
　ガラスで出来たショーケースに入っているまるで宝石のように輝く赤い目玉を眺めた。
　ドラゴンの体内には隅々まで大量のアギが行き交っており、特に目玉には豊潤なアギが秘められていると言われる。
　この目玉を素材に強力な爆薬や優れた回復薬を造れるだろうが、値段が高すぎて到底俺が手を出せるものではない。
「お待たせしました！　こちらスチール石、チタン石、スカンジウム石、工具セットになります。合計で七千ロルとなります」
　この世界のお金は日本と同じように紙幣と貨幣が流通している。

俺は財布を取り出し、一万ロル札を店員に差し出した。
「ありがとうございます。三千ロルのお返しとなります」
購入品を手にし、魔道具店を後にした俺は他のお店を物色してみようと考えた。
人気の少ない裏通りへと入る。小綺麗なお店が多い大通りとは異なり、この通りには廃退的な雰囲気のお店が多い。
途中でアンティーク品を取り扱っているお店に目が入った。外から見ても品揃えが良さそうなのが伝わってくる。
「ちょっと入ってみるか……」

妖刀と人魚

店の中に足を踏み入れたが、店内は薄暗く、他のお客さんどころか店員らしき人も見当たらない。
「誰もいないのか？」
とりあえず、販売品を見てみることにした。
古そうな壺や皿などが置いてあり、到底魔道具作りに立ちそうもないが、店内をよく見渡すと、魔道具作りに使えそうな鉱物も置いてある。
販売品を眺めているとカウンターの奥から『タタタタッ』という足音が聞こえてきた。
「すみませーん！　って、あたー！」
「だ、大丈夫ですか？」
店内でコケてしまった人に手を差し出すと、その人は俺の手を掴み、ゆっくりと立ち上がる。
長い緑色の髪の二十歳前後の女性は床に落ちた眼鏡を掛けなおす。
「いててて……ありがとうございます」
女性は起き上がると背中を摩った。抜けてそうな女性の印象を見て、恐らくは店員の
一人なのだろうと予想した。
彼女の身長は低いが一方で別のものがかなり大きい。何がとは言わないが。
「店長のモリア＝チノハと言います。来店していたのにすみませんでした」
この人が店長なのか。モリアさんという女性は心底申し訳なさそうに深々と頭を下げてきた。
「いえ……あの、ちょっとお聞きしたいんですが、こちらの鉱石って何という名前なんですか？」
近くにある白い石を手に持ち、名前を訊く。
「あー、えっとこちらの鉱石はですね……ランカン石と言いまして、マグマが冷えて固まったものなんですよ！」

モリアさんが早口で鉱石の説明を始める。
「なるほど……これで魔道具を作れたりしますか？」
「はい、できますよ。このランカン石には微量ですが、魔力が秘められています。これで爆弾を作ることができますよ。上手くいけば上位魔法に匹敵する威力の爆弾を。すごいでしょう？」
「そうなんですか。いいですね、それ。他の鉱石についても教えてもらってもいいですか？」
「勿論です！」
俺はモリアさんから鉱物について、色々と教えてもらった。モリアさんは鉱物に関して、かなりの知識を有していた。
「モリアさん、ものすごく鉱物にお詳しいですね」
「いえいえ、そんな。大したことありませんよ。お客様は魔道具を作るのお好きなんですか？」
「そうですね。最近、自分でも作り始めました」
「そうなんですか。まだ、かなりお若いですよね。学生さんですか？」
「はい。この近くの学校に通っています」
「この近くの学校……もしかして、バキア魔法学校の生徒さんですか？」
「はい。そうです」
「私、あそこの学校の卒業生なんですよ！」
モリアさんはバキア魔法学校の卒業生であることを告げる。
見た目的にオリモカ先生と同じくらいの歳に見えるが、もしかしたら同期かもしれないな。
「そうなんですか。奇遇ですね。オリモカ先生って知ってますか？」
「オリモカ先生ですか？　はい、知っていますよ。私も先生から教わったんですよ！」
「……そ、そうですか」
どうやらオリモカ先生はモリアさんと同期ではなく、モリアさんが生徒の時から教師をしていたらしい。
一体幾つなんだろうか、あの人。
「お客様は卒業したら魔道具を作るようなお仕事に就く予定ですか

？」
　すると、モリアさんは俺の手を力強く握りしめてきた。
「応援しています！　もしも良かったらうちで働きませんか？　うちでは魔道具の販売も行なっているんですよ！」
　すごいぐいぐい来るなこの人……だが、悪い話では無いかもしれない。
　見た限りあまりお客さんも少なそうだし、忙しくはなさそうである。
　その分、あまり給料の方は期待できないかもしれないが。
「は！　すみません。私ったら……」
「いえ、その……考えておきます」
「本当ですか!?　ありがとうございます。あの…もしよかったらお名前を聞いておいてもよろしいですか？」
「はい。ムゲン＝アベイルと言います」
「アベイル……もしかして、ナハラ＝アベイルさんのお孫さんですか？」
「はい、そうです」
「まさかナハラさんのご家族と会えるだなんて感激です！　私、ナハラさんに憧れて母魔法学校に入学したんです」
「それじゃ、以前は冒険者を？」
　正直なところ、モリアさんがそこまでのアギを秘めているようには思えなかった。おそらく、アギの量は俺よりも少ないだろう。
「いえ……在学中に才能がないと自覚して諦めました。自分に何が出来るだろうって考えた時にこんなお店を開きたいなって思って始めたんです」
　なるほど、この人もある意味俺と同じか。
「そうなんですか。素敵なお店だと思います」
「ありがとうございます！　さっき、説明した鉱物。ムゲンさんに差し上げます」
「そんな！　悪いですよ」
「いいんです。この鉱物、買ってくれる人もいないですし」

「それじゃ、お言葉に甘えて……あ、そうだ。このお店に刀って置いてありますか？」
　本来であれば武器屋で購入するつもりであったが、ここに置いてあるのなら購入しようと考えた。
「ありますよ。ちょっと待っててください」
　モリアさんは刀を取りに店の奥へと向かった。モリアさんはすぐに戻ってきたが、彼女が手に持っているのはやけに年季の入った刀である。
「これがこのお店に置いてある唯一の刀です。どうぞ、手に取ってみてください」
　俺は店長から刀を受け取った。その刀はずっしりとした重量感があり、どことなく禍々しい雰囲気を醸し出している。
「なんていう、かその……不思議な感じがする刀ですね」
　試しに鞘から刀を抜こうとした。
「あ、気をつけてください！」
「え？」
「この刀はですね、鞘を抜いた人を呪うという言い伝えがあるんですよ」
　モリアさんからとんでもない話を聞かされ、思わず刀を床に落としてしまった。落とした衝撃で床から『ドン』という鈍い音が鳴る。
「な、なんてものを渡すんですか！　やばい、触っちゃった……」
　幾ら何でも呪いの刀を勧めるなんてあんまりだろう。アンビリーバボーである。
「いや、その……聞いて欲しいんです。まず、この刀は『ムラマサ』と言いまして」
「む、ムラマサ!?」
　俺でも聞いたことのある刀であった。確か、妖刀の一種だったはずだ。
「もしかして、知ってるんですか？」
「詳しくは知りませんが、確か妖刀ですよね？」
「その通りです。この刀はジャポニで造られた刀で『絶殺の剣』とも呼

ばれていました。言い伝えでは、この刀はどんなものも斬り殺せると言われています。それこそ、不死の生物をも切り殺せると」
「不死の生物……ですか？」
漫画や小説などの創作物でよく見るが、ここが魔法の世界とは言え、いくらなんでも不死など実在するのだろうか。
この世界において、俺は魔法や生き物に関する本をいくつか読んでみたが、不死の生物に関する記述を目にすることはなかった。
「あくまでも言い伝え……ですけどね。人魚って知ってます？」
人魚って確かあれだな。最後、泡になって消えてしまうという話だったはずだ。
「魚類と人間のハーフみたいな生き物ですよね？」
「その通りです。人魚はジャポニに棲息すると言われている伝説の生き物です。不死の肉体を宿しており、その肉を喰らった生き物もまた不死の力を身に宿すと言われています」
それは知らなかった。人魚って不死なのか。もっとも、俺のいた世界の人魚の言い伝えとは微妙に違うのかもしれないが。
「それじゃ、このムラマサは人魚や人魚の喰らった生き物も殺すことができる刀……という訳なんですね？」
「そうです。あくまで言い伝えなんですが。鞘を抜いたものは刀の代償として寿命を減らすと言われています」
「寿命を減らす……具体的にはいくら減るんですか？」
「それは私にも分かりません。ある者は一度鞘を抜いだ直後に命を落とし、またある者は幾度となく鞘を抜き続けても長寿を全うしたと言われています。もしかしたら呪いなんてないのかもしれません。どうです？　興味があれば使ってみますか？」
考えるまでもない。確かに言い伝えに過ぎないのかもしれないが使う気にはなれなかった。言ってみれば事故物件かも知れない部屋に自ら進んで住むようなものだろう。
「悪いですが……俺には使うことができません。呪いが単なる言い伝えかもしれないといっても、やっぱり不気味ですよ」
「そう……ですよね。すみません。物騒なものを勧めてしまって。た

だ、この刀も誰かに使って欲しいんじゃないかと思いまして。私、そういうのがなんとなく分かるんです」
「そ、そうなんですか」
半信半疑で答えるとモリアさんはやや不満そうに眉をひそめた。
「その目……信じてませんね？」
「いいえ！　そういう訳じゃ……」
すると、お店の扉が開いた。誰かが入ってきたようである。
「おや……これはムゲン殿でないか？」
お店に入ってきたのはヤヨイであった。
「ヤヨイ、どうしてここに？」
「ぶらりとこの辺りを彷徨っていたら偶然このお店を見つけ入った次第である。雰囲気のいいお店であると思ったであるぞ。ムゲン殿は？」
「俺もまぁ同じ理由だ」
ヤヨイは顎を摩りながら店長が手に持っているムラマサを見つめた。
すると、ヤヨイはプルプルと身体を震わせた。
「店長殿、その刀はもしや……」
「ヤヨイ、その刀を見たことがあるのか？　ムラマサっていう妖刀らしいんだが……」
「ムラマサ……」
刀の名前を聞くと、ヤヨイは目を大きく見開き、ポツリと刀の名前を呟く。
「勿論であるぞ。小生、ジャポニからやってきたのでな。店長殿。ぜひともその刀を売って欲しい」
なんと、ヤヨイはムラマサを購入したいと言い出した。
「ヤヨイ、正気か？　そいつは寿命を吸い取る呪いの刀って言われてるんだぞ」
俺が助言すると、ヤヨイは顔を上げ、鋭い眼光を向けた。
「ムラマサは呪いの刀などではない！　この刀は職人が端正込めて打った素晴らしき一振りであるぞ！」

ヤヨイの熱弁に思わずたじろいだ。
やはり、呪いというのはデマなのか？　少なくともヤヨイは呪いを全くもって信じていないようだ。
「そ、そうか……詳しく知らないのに適当なことを言ってすまなかった」
「……いや、小生も少し熱くなってしまった。すまなかったである」
「ヤヨイさん。こちらのムラマサはお代はいりません」
モリアさんはヤヨイにムラマサを差し出した。ヤヨイはそれをゆっくりと受け取り、刀の重さを確かめる。
「店長殿、よいのか？」
「はい！　この刀は誰かに使われたがっています。ヤヨイさんが受け取ってくれるなら嬉しい限りです！」
「かたじけない。では、ありがたく頂戴いたす」
こうしてヤヨイはムラマサを入手した。俺の方も好物を譲り受け、お店を後にすることにした。
「ムゲンさん。ヤヨイさん。またいらしてくださいね！」
「はい」「うむ」

俺とヤヨイは並んで裏通りを歩き始めた。ヤヨイは歩きながら真剣な表情でムラマサを見つめている。
「なぁ、ヤヨイ。人魚の話って知ってるか？」
さっき、モリアさんから聞いた人魚の話についてヤヨイに尋ねる。
「……うむ。その肉を喰らわば不死の力が宿るという生き物であるな」
「モリアさんが言ってったんだ。人魚はジャポニ棲息してるって。実際にジャポニにいるのか？」
「まさか。ただの言い伝えであろう」
「そっか。そうだよな」
やはり、不老不死というのは言い伝えだったようだ。もしも、本当にいるというのなら実際にこの目で見てみたいものでる。
そろそろ集合時間が差し迫っていた為、集合場所へと向かうことに

した。

面談

まだ時間前であったが、既にシャーリアとウィルが到着しており、二人は雑談をしていた。
「や！　ヤヨイ、ムゲン君。二人とも一緒だったんだ」
「おお、偶然店で一緒になってな」
「うむ。とても良い店であった。この刀をくれたであるぞ」
ヤヨイは躊躇うことなく、鞘から刀を抜いた。
「うわ！　ヤヨイ、こんな所で刀を抜くなよ」
この世界に銃刀法違反にあたる法律はないが、近くにいる通行人が物珍しそうな目でヤヨイを見つめていた。
「ヤヨイさん、もしかしてそれってムラマサ？」
「そうであるぞ。ウィル殿も知っているのであるか？」
「うん。確か妖刀って言われている刀だよね。寿命を吸うだとか、あまり良い噂は聞かないけど……」
「ウィル殿もそのようなくだらない噂を信じているのであるか？　ムラマサは素晴らしき一振りであるぞ」
「そっか……そうだよね。ヤヨイさんならきっと使いこなせるよ」
「みんな！　刀の話もいいけど、そろそろみんなで食事に行きましょうよ！」
シャーリアに促され、俺達はレストランに入り、食事をすることにした。
食事の後はみんなで武器屋に入り、俺とシャーリアは剣を購入した。
購入した剣はヤヨイが使っているような日本刀ではなく、ロングソードという種類の剣である。
「きゃー！　ヤヨイ可愛い！　その服、超似合ってるわよ！」
シャーリアの提案で服屋に入り、シャーリアはヤヨイに服を着させてはこうしてはしゃいでいる。
「あはは……シャーリアさん、ものすごく楽しそうだね」
「そうだな」

こういうのも悪くはないな。友人とショッピングを楽しむ――元の世界でそういったことを最後にしたのははたしていつだっただろうか。もう、思い出すこともできない。

「ねぇ、二人とも来て！」

俺とウィルはシャーリアがいる試着室の前に向かう。試着室のカーテンは開けられており、中には白いワンピースのような服を着たヤヨイがいる。

「どう二人とも？　ヤヨイ、すごく似合ってるでしょ？」

「うん！　ヤヨイさん、とても似合ってるよ！」

ウィルは微笑みながら感想を述べた。さすがは爽やかイケメン。女性の扱いに慣れてやがる。

「そ、そうか……ムゲン殿はどう思われるか？」

ヤヨイに感想を求められた。いつもは着物のような服を着ているため、なんだか新鮮な感じだ。

「あー、その……い、いいんじゃないか？」

「あー！　ムゲン君ったら、照れてる！」

「て、照れてなんかない！」

シャーリアにからかわれ、俺はついムキになってしまった。

「シャーリア殿、この服を勧めてくれたこと誠に感謝いたす」

「気に入ってくれたなら何よりよ！　この服、買う？」

「買いたいのは山々であるが……お金がちょいと足りぬな。次の機会にさせてもらおう」

「あら……なら、私が出そうか？」

「気持ちはありがたいが、小生が冒険者として稼いだお金で買いたいであるぞ」

「そっか。わかったわ」

服屋から出ると、すでに日は暮れていた。門限の時間が差し迫っているため、そろそろ寮へと戻ることにした。

一人でお店を巡るのも楽しいが、こうしてみんなでお店に入るのも悪くないと感じた。

入学してから、毎日があっという間に過ぎていった。四人で授業を受け、切磋琢磨しながら魔法の技術を高めていく日々。
他のみんなは急成長とも呼べるほど、魔法のスキルを磨き上げていた。
シャーリアは火の上位魔法を一つ、ヤヨイは水の上位魔法を一つ、ウィルは雷の上位魔法の二つをこの半年間で取得した。
一方で俺の方は未だ上位魔法を使うことはできないでいる。新しい中位魔法はいくつか覚えることができたものの、上位魔法は使えないままだ。
剣術も体術もアギの使い方も、入学時よりもいくらか向上したが、やはり俺は他のみんなよりも才能が薄いのだろう。
「失礼します」
個人面談にて、オリモカ先生がいる教室の中へと入る。個人面談では、主に卒業後の進路について話し合うことになっている。
「おう。来たな。座ってくれ」
椅子に座り、オリモカ先生と向かい合う。何気にオリモカ先生と二人きりで話すのは初めてのことであり、少しばかり緊張する。
「あともう少しで卒業だな」
「そうですね。卒業試験に合格したら……ですけどね」
「お前達なら合格できるだろう。鬼ごっこで私を捕まえることができたんだ。しかも、四人だけでな。今までの生徒は十人前後の人数で挑んでも卒業までに私を捉えることができなかった。お前達の成長には本当に驚いたぞ」
しかし、急激に成長したのは俺以外の三人だ。俺自身は思ったより成長することができなかった。
「……ありがとうございます」
「納得してなさそうな顔だな。自分だけ上位魔法を習得できなかったのがそんなに不満か？」
「そんなことは……」
オリモカ先生は俺の心情を察したようである。口では否定したが、やはり悔しいという気持ちも少なからずある。できることなら一つ

は上位魔法を覚えたかった。
「慰める訳じゃないが……別に強い魔法を使える冒険者が必ずしも強いって訳じゃないぞ。少なとも四人の中でムゲン。お前が一番魔法の本質を理解していると思ってる」
「ありがとうございます……ですが、俺は冒険者になるつもりはありません。魔道具開発者になるつもりです」
　自分の進路先をオリモカ先生に告げる。俺はモンスターと戦うよりも魔道具を作る方に楽しさを感じている。
「あー、そっち方面を目指すのか。まぁ、確かにお前にはぴったりの職業かもしれないな。ナハラさんは知っているのか？　お前が魔道具開発者を目指すことを」
「まだ話していませんが……きっと祖父は認めてくれると思います」
　祖父は俺に魔法のことを教えつつも、決して「冒険者になれ」とは言わなかった。
　きっと俺が何を目指しても祖父は俺が進みたい道を応援してくれるだろう。
「そうか……なぁ、ムゲン。お前の両親の話、聞きたいくないか？」
　両親の話だと？　どうしてオリモカ先生がそんなことを……まさか。
「私はお前の両親、インフィニ＝アベイルとアンフィニ＝アベイルと同じギルドに所属していたんだ」
　やはりそうか。両親のことを詳しく知っている人といえば、同じギルドのメンバーが真っ先に挙げられる。
　俺の父であるインフィニ＝アベイルはギルド内で銃士を、母のアンフィニ＝アベイルは剣闘士をしていると祖父から聞いたことがあった。
「聞かせてください」
「了解した。では、話そう」
　オリモカ先生は冒険者時代のことを語り始める――

オリモカ先の過去

八年前、ムゲンの父、インフィニ＝アベイルがリーダーを務めるギルド『無限の栄光』はA級モンスターを狩りに山へと向かった。目的のモンスターを討伐し、山を下ろうとした時だった。

「グオオオオォオオォ！」

忘れることのできない耳が痛くなるほどの咆哮と共に私達の前に現れたのは『シャープスネイルベアー』というA級モンスターだった。

目的のモンスターを倒し、アギをほぼ使い果たしてしまった私達にはもうほとんど戦う力が残っていなかった。

「逃げるぞ！　みんな！」

インフィニは私達に逃げるよう指示を出した。煙玉や痺れ玉といった少ない魔道具を使って何とか逃亡を試みた。

しかし――

「うわあああああ！」「やだ、死にたくない！」

そのモンスターは恐ろしいまでの速さで私達に襲い掛かり、私達が使う魔道具など意に介さないようであった。

八人いた私達の仲間は次々と惨殺され、残ったのはインフィニとアンフィニ、そして私だけになった。

「オリモカ。君だけでも逃げるんだ！」

インフィニがシャープスネイルベアーと対峙する。所持していた魔弾銃で二発魔弾を浴びせるも、全くダメージを受けた様子はなかった。

「リーダー！　そんな、私だけ逃げるだなんて……」

「はあああああ！」

アンフィニが叫び、シャープスネイルベアーに斬り掛かる。しかし、奴は鋭い爪で斬撃を防ぐばかりか、あっさりと刀身を切ってしまった。

「オリモカ、あなたは逃げなさい！　大丈夫。必ず生きて帰ってくるから」

「アンフィニ……」

「行くんだ、オリモカ！　こいつは私と妻で食い止める！」
私は二人に背中を向け、走り出した。街に戻った私はすぐに他のギルドの人達にこの事を伝え、共に山へと登った。
だが――そこで見つかったのは二人の無残なまでの死体であった。
「……」
オリモカ先生の話を最後まで聞いた俺は何とも言えない気持ちになり、何か話そうと思ったが、言葉が出てこなかった。
「どうだ？　今の話を聞いて、私のことが憎くなったか？」
自嘲するように尋ねるオリモカ先生。その目は悲哀に満ちている。
「憎くなんてなりませんよ。そんな状況に出くわしたら誰だって逃げるしかないでしょう」
「そうか。その言いづらいんだが、お前の両親と私達の仲間を殺したそのモンスターなんだがな……まだ生きている」
「……！」
オリモカ先生の言葉を聞き、全身の血が沸騰するかのような感覚がした。俺の両親を殺したモンスターが……まだ生きている。
「ウィルが前の卒業試験で不合格になった理由だがな……そのモンスターと会ったからなんだ。他の生徒が逃げ切れず殺されていく中、あいつだけが逃げ切ることができた。それだけで卒業認定させても良いくらいの実力なんだが結果として、試験は不合格になった」
「シャープスネイルベアーでしたっけ？　そのモンスターの名前」
名前から推測するに熊のモンスターであるのだろう。銃でも傷一つつけることができず、刀を斬るほどの鋭い爪。相手にするのは厄介である。
「そうだ。奴は八年に一度冬眠から目覚める。今年、丁度目覚めたんだ。もう少しで冬眠の時期に入るがな」
確かに俺の両親が亡くなったのは八年前である。あの日の出来事は今でも忘れることができない。ただただ、現実を直視することができなかった。
この世界で俺を育ててくれた両親のことを元の世界と両親と同じ

かそれ以上に大切に思っていた。
「卒業試験はバキア内のダンジョンなら自由に選ぶことができる。だが、コウロク山だけはやめておけ」
「……分かりました」
個人面談を終えた俺は寮に戻り、シャープスネイルベアーのことを調べてみることにした。
学校の図書館から借りていたモンスターに関する本を取り出し、奴の項目を閲覧する。
シャープスネイルベアーはその名の通り、鋭い爪を持ち、人間を見ると見境なく襲いかかってくる。その執着度は異常と言って差し支えなく、見失うまで追いかけてくるようである。そして、ランクはA級。
「A級モンスターか……」
この世界のモンスターは危険度によって、ランク付けされる。
一番低いランクのモンスターがD級――卒業試験では、大抵の在学生がこのランクのモンスターを討伐する。最下位のランクということもあり、強さも控え目である。
その次のランクであるC級は普通レベルの強さのモンスターで、一般的な冒険者がこのランクのモンスターを討伐する。
B級になると、上位クラスの冒険者でなければ手を出すことができず、大抵は複数人で狩りに行く。
そして、A級――より優りの冒険者が集まらないと倒せないと言われている。
オリモカ先生は別のA級モンスターを討伐した後にシャープスネイルベアーと遭遇したと言っていた。
先に会っていたのがシャープスネイルベアーなら、両親は死ななかったのかもしれない。
「もう少しこのモンスターの情報が必要だな……」
俺はウィルの部屋に向かうことにした。扉の前に立ち、ノックをすると、ウィルが出てきた。
「やぁ、ムゲン君。どうしたんだい？」

「ちょっと聞きたいことがある。中に入ってもいいか？」
「うん、いいよ」
　ウィルの部屋の中に入った。部屋の中は綺麗に片付けられており、机の上には魔法警察の試験対策本が置かれいてる。
「ムゲン君。コーヒーでいいかな？」
「あ、うん」
　ウィルがコーヒーカップを机の上に置く。コーヒー豆の香ばしい香り鼻腔を付く。
「悪いな勉強中に。警察の試験勉強していたんだな」
「まぁね。卒業できたらすぐに警察試験が待っているからね」
　最近、ウィルは夕食の時に食堂で姿を見せないが、きっと試験勉強に励んでいたのだろう。
「それで、聞きたいことっていうのは何かな？」
「シャープスネイルベアーのことについて聞きたい。ウィルが卒業試験の時に遭遇したっていうな」
　ウィルは目を丸くし、しばらくの間黙り込んでいたが、やがて口を開く。
「オカモリ先生から……聞いたのかな」
「ああ、そうだ」
　俺は頷き、オリモカ先生が話してくれたことを認めた。トラウマと呼べる過去を聞くのである。正直ベースで話した方がいいと考えた。
「ちなみにどこまで聞いてる？」
「卒業試験の時……ウィルが唯一そのモンスターから逃げることができたってとこまで聞いたよ。あと、他の生徒は殺されたってことも」
「そっか……そこまで知ってるんだね」
　ウィルは後ろめたそうに顔を伏せた。きっと何もできなかった自分を悔いているのだろう。
「ムゲン君はさ、オリモカ先生の話を聞いてどう思った？」
「どうって？」
「その……僕のことを軽蔑したりしなかったのかい？」
「軽蔑なんかするかよ。自分よりも強いモンスターと会ったら、普通

は逃げるしかないだろう」
少なくとも俺が同じ立場であれば逃げるだろう。逃げることだって立派な選択肢だと考えている。
そうだ、逃げることは間違いじゃない。元の世界の時だって俺は――
「そっか。ムゲン君は優しいんだね。それで聞きたいことはシャープスネイルベアーのことだったね」
「ああ」
ウィルからシャープスネイルベアーの情報を聞いた。
奴の姿形、そして強さについて。
ウィルが言うには奴は中位魔法をものともせず、次々に他の生徒は殺していったらしい。
しかし、唯一目くらましに使われる魔法、フラッシュは通じたとのことだった。
「ムゲン君、一応聞くけど……卒業試験の時、シャープスネイルベアーを討伐しに行く気じゃないよね？」
「仮にそうだったと言ったら？」
ウィルがものすごい力で俺の肩を掴み、ぐっと顔を近づけてきた。
「いくら何でも危険すぎる。止めるべきだ」
ウィルの言うことはもっともである。中位魔法までしか使えない俺が挑んでも到底敵わないだろう。しかし――
「オリモカ先生から聞いたんだ。奴が俺の両親を殺した」
「え……そ、それって……」
ウィルにかつてオリモカ先生が俺の両親と同じギルドに所属していたこと、俺の両親の仇であるシャープスネイルベアーがもうすぐ冬眠してしまうことを伝えた。
「そうだったんだ……けど、やっぱり止めるべきだ。みすみす自ら死にに行くようなものだよ」
「そんなことはわかっている。けどな、これは俺がやらなきゃダメなんだ」
自分の中にある全身の血が信じられないくらい熱くなっているの

が分かる。
こんな『憎い』という気持ちは初めてである。
なんなら、今すぐにでもコウロク山へ向かいたいが、無策で行っても無駄であることくらい、自分が一番良く知っている。
「奴を殺したい。だから、俺はあいつをこの手でぶっ倒す！」
コーヒーを一気に飲み干すと、俺は立ち上がり、玄関へと向かった。
「ちょ……ムゲン君！」
ウィルが呼び止めようとするも、俺は自分の部屋に戻り、シャープスネイルベアーを倒す為の作戦を立てることにした。
卒業試験当日まで時間が少ない。奴を狩るのに有効な魔道具、魔法の検討を始めた。

結束

卒業試験当日。俺はコウロク山の麓にいた。目的は勿論、シャープスネイルベアーの討伐である。

本来、Ｄ級モンスターを討伐すれば合格となるこの卒業試験だが、俺はあえて到底敵うはずのないＡ級モンスターを狙う。

ヤヨイとシャーリアには欲しい魔道具の材料があるという名目でコウロク山に向かうと伝えておいた。

二人は一緒についていくと言い出すのではないかとヒヤヒヤしていたが、意外にもあっさりと一人でコウロク山に行くことを認めてくれた。

ウィル達三人はオアバ山で卒業試験を受けているはずだ。

「さてと、行くか……」

色々とやらなきゃいけない準備もあった。モタモタしていると、日が暮れてしまう恐れがある。

「待たれよ。一体、どこに向かうつもりぞ」

「どこって……そりゃ、あいつを討伐しに……って、ええ!?」

なんと、いつの間にか俺の後ろにヤヨイ、シャーリア、ウィルの三人が立っていた。

「ごめん、ムゲン君。二人に話したんだ。君の両親のことを」

ウィルは申し訳なさそうに深く頭を下げた。俺の両親の話を聞いて、わざわざ一緒に付いていこうと思ったという訳か。俺は咄嗟に三人に「帰れ」と言おうとした。

「水臭いぞムゲン殿。何も一人で極悪モンスターを倒しに行くことはないではないか。小生も助太刀いたす。皆で協力して倒そうぞ」

「ムゲン君、ひどいよ。私達……仲間じゃない！　みんなで一緒に卒業しましょう！」

二人の言葉を聞いて何も言えなくなった。仲間か……そんな風に言われること、元の世界で一度もなかったかもしれない。

正直、とても嬉しかった。

「みんな……本当にバカだな」

「なんとでも言うが良い。それじゃムゲン殿。早速、作戦会議といこうぞ！」
「……だな」
俺は頷き、シャープスネイルベアーの討伐に向けて、作戦会議を開始した。まずは全員の持ち物を確認した。
俺達は一人づつグレートポーションを十本づづ持ってきている。アギをいかに極限まで温存できるかが討伐の鍵となる。
「それじゃ、早速登ろうか。弱いモンスターとの戦闘は極力避けていこう」
山を登る前にD級モンスターが嫌がるスプレーを身体に掛けておいた。これであまりモンスターと遭遇することはないはずだ。
山の高度が上がるにつれ、息が苦しくなっていき、さらに緑が深くなり足場がドンドンと悪くなってきた。重たい足を必死に動かし、雑草を掻き分けながら歩いて行くと、やがて開けた場所に出た。
目の前には大きな泉があり、泉の水はかなり透き通っていた。
「おお、すごく綺麗な水だな」
「そうであるな。この水、飲めそうであるぞ」
ヤヨイは手で水を掬い、それを顔に当てた。すると、「ちびた！」と呟き、ブルっと身体を震わせた。
なんだか猫みたいである。後ろにいるシャーリアとウィルの方を振り向くと、ウィルは何やら深刻そうな表情で泉を見つめている。
「ここでシャープスネイルベアーと出会ったんだよね」
「そうか。ここで……できれば会った時の詳しい状況を聞かせてくれないか？」
「うん、分かった」
ウィルの話によると、ここで休憩をしていた際にシャープスネイルベアーが現れたとのことだった。
「もしかしたら、この近くに奴の巣があるのかもしれないな。ここで罠を仕掛けよう」
罠を仕掛けるよう提案し、四人で協力して作業を行う。罠を仕掛ける途中でシャープスネイルベアーや他のモンスターが現れないか注

意しておく必要があるため、交代交代で見張りを行うことにした。
「やっと終わったな……」
二時間ほどで罠の仕掛け終えることができた。奴がこの罠にうまくハマってくれる保証は勿論ないが、これがあるかないかで勝率は格段に変わってくると俺は踏んでいた。
「それじゃどこかで身を隠そうか」
ウィルが身を隠すのに丁度良い木を見つけ、その背後に隠れた。
「パーセプション」
モンスターを感知するための魔法の呪文を唱えた。この魔法は、自分の半径二十メートル前後のモンスターの接近に気付くことができる。
この魔法は中位魔法に位置するが、上位クラスの冒険者が使用すれば、半径百メートル程までモンスターを感知することができる。
ちなみに俺の場合はこの魔王を一分間使用するごとに三百アギ程消費することになる。
「ムゲン殿、なんであるかその魔法は？」
「感知用の魔法だよ。半径二十メートルぐらいまでモンスターの接近に気付くことができるんだ」
「左様か。ちなみにその魔法、アギを消費するのではないか？」
「そりゃあ、魔法だからな」
「では、小生が変わろう」
ヤヨイが俺の代わりに感知魔法を使うと申し出た。その心意気はありがたいが、上位魔法を使えるヤヨイには極力アギを温存しておいて欲しいと思った。
「ヤヨイも感知魔法使えたのか？　けど、ヤヨイには戦闘までアギを温存しておいて欲しいんだ」
「いや、使えぬ。ただ、小生は魔法を使わなくてもモンスターを感知することができる」
ヤヨイがさらりととんでもない事を言ってのけた。ウィルは絶句し、シャーリアは「う、嘘でしょ……」と呟いた。
「ヤヨイ、それ本当なのか？」

「うむ。五十メートルくらいまでならいけるぞ。ほら、あの泉の奥の方にゴブリンがいるであろう？」
確かにヤヨイが指差している方に何か棍棒のような物を持った全身緑色のモンスターがいるのが見えた。
少し遠くてはっきりとは見えないが、外見的特徴から見て、ゴブリンで間違いないだろう。
「す、すごいな……」
「小生が感知するからムゲン殿はアギを温存しておくが良いぞ」
「お、おぉ……」
感知をヤヨイに任せるとした。俺は鞄から魔弾銃を取り出す。この程度の魔道具、奴に通用するとは思っていないが、念のため用意だけはしておこう。
「ふむ……来たか。この強いアギ。恐らくは……」
ゾクリと全身から鳥肌が立ち上がる。寒気がするような凄まじいアギ。ゴブリンと思われるモンスターが茶色い剛毛を生やしたモンスターに丸呑みにされるのが見えた。
俺は離れた先にいるそのモンスター、シャープスネイルベアーを見つめた。

ハチ

罠として木にシャープスネイルベアーが好むハチミツを塗っており、その木の手前には落とし穴を掘っておいた。
穴の中には毒を塗った矢じりを仕掛けてある。シャープスネイルベアーが穴に落ちたら一気に総攻撃を行うという作戦である。
「よし、予定通り奴が穴に落ちたら一気に仕掛けるぞ！」
今の所は順調である。しかし、シャープスネイルベアーは穴の手前で立ち止まってしまった。地面に鼻を当て、匂いを確認する。
「あやつ、罠に気づいたのかもしれぬな……」
「そ、そんな……何て賢いモンスターなの」
くそ、少し甘く見ていたか。まさか罠に気づくなんて。シャープスネイルベアーは穴とは反対方向に歩き出した。
「ムゲンくん、作戦を変えましょう」
「……そうだな」
次のプランとしては奴の後を追い、巣を見つけ、油断したところで襲いこむというもの。
しかし、シャープスネイルベアーは急に走り出すと、こちらに近づいてきた。
「あやつ、小生達の場所に気づいたか！」
ヤヨイは柄を握り、シャープスネイルベアーに向かって走り出した。地面を激しく蹴り上げる音が聞こえてくる。
「おい、ヤヨイ！　待て！」
俺が叫ぶもヤヨイは止まらない。鞘からムラマサを取り出し、黒い刀身が光る。
「ゆくぞ！　シャープスネイルベアーよ！　ハイドロウェーブ！」
水の上位魔法、『ハイドロウェーブ』で大きな津波を発生させると、奴の身体は波に飲み込まれた。
シャープスネイルベアーは地面に伏せ、ブルブルと身体を震わせ、水飛沫を飛ばす。
「その首貰うぞ。せぃあ！」

ヤヨイはムラマサでシャープスネイルベアーの首を切り落とそうとした。だが――
「な、なんと硬い首であるか……」
奴の首はあっさりとムラマサの刀身を受け止めた。
「おい、ヤヨイ。そこから離れろ！」
シャープスネイルベアーが立ち上がると、奴は頭を大きく動かした。
「うお！」
ヤヨイの身体が空に大きく舞い上がる。俺は動き出し、空中でヤヨイをキャッチした。
「助かった……ムゲン殿も随分と小生をキャッチするのが上手くなったものであるな！」
「ま、まぁな……」
変なところをヤヨイに褒められ、何とも言えない気持ちになった。ガルド先生の授業で散々吹っ飛ばされたヤヨイの身体をキャッチしてきた為、反射的にキャッチできたのである。
「サンダーバースト！」
ウィルは雷の上位魔法を発動させる。強烈な電撃がシャープスネイルベアーに直撃する。
「グオオオオオオ！」
『バチバチバチ』という電流の音と共にシャープスネイルベアーは叫び声を上げる。周囲が煙に包まれ、奴の姿が見えなくなった。
「やった！　さすがウィル君」
しかし、ウィルの表情は晴れず、険しい表情のままである。
「いや、まだだよ。奴はこんな簡単に死ぬほどヤワじゃない」
煙が晴れ、シャープスネイルベアーの姿が確認できた。ウィルの言う通り、奴は敵意を剥き出しにして近づいてきた。
俺は魔弾銃で奴の顔面に数発、アギの弾丸を浴びせる。こんな攻撃、あまり意味はないだろうが、奴の意識は俺の方に向く。
「こい！　このクマやろう！」
シャープスネイルベアーが素早い速度で向かってきた。あまりの

迫力で思わず足がすくんでしまいそうだ。
「アクセル！」
高速移動の魔法を使用し、奴と鬼ごっこを開始する。
落とし穴の近くまでシャープスネイルベアーを誘導する。狙い通り、奴は追いかけてきた。
「とう！」
落とし穴の手前でジャンプした。これで奴が落ちてくれれば――しかし、奴はまたもや落とし穴の手前で立ち止まる。
やはり、そう簡単にはいかないか。
「シャーリア！　ここで魔法を使ってくれ！」
「え……でも」
シャーリアは俺が巻き添えを食らうのを危惧しているのだろう。
「大丈夫だ！　特大のを頼む」
「わ、分かったわ！　フレイムバースト！」
巨大な炎の砲弾がシャープスネイルベアーに向かっていく。俺は痺れ玉を投げた。そして、ズボンのポケットに入れておいた赤色の立方体にアギを込める。
次の瞬間、自分の身体の周りに青白い障壁が展開される。少量のアギで発動させることができる魔道具、『シールドボックス』は質の高い防御魔法を展開することができる。
かなり強力な魔道具であるが、一日一回しか使用することができない。
この魔道具でシャーリアの魔法によって起こった爆風を防いだ。
シャープスネイルベアーは炎の上位魔法と痺れ玉を浴び、身体を痙攣させていた。
「みんな！　一斉に魔法を放つぞ！」
「承知した。ハイドロウェーブ！」
「サンダーバースト！」
「フレイムバースト！」
三人が上位魔法を放った。俺は持ってきていた剣を取り出す。
「魔撃斬！」

シャーリアから教わった魔法剣術を使用した。現状、俺が使える魔法の中でこれが一番攻撃力が高い。さすがの奴も大ダメージを受けることだろう。
「う、うそ……ほとんど効いてないの？」
シャーリアの言う通り、シャープスネイルベアーに傷を負った様子はなかった。ここまで耐久力が高いとは想定外である。
「怯むな皆の者！　小生達が攻撃を続ければ必ず突破口が開かれる」
ヤヨイがまたも上位魔法を放つ。俺達はヤヨイに触発され、奴に攻撃を浴びせ続けた。
アギが少なくなるたび、グレートポーションを飲んで回復する。
気づけば戦闘は長時間になり、さすがの奴も疲れが出始めているのが分かった。
しかし、それはこちらも同様だ。アギを回復しても体力が回復するわけじゃない。
「くそ……しぶといな！」
俺は半ばヤケクソの状態で中位魔法を出す。そして、グレートポーションを一気に飲み干した。保持しているポーションは残り一本となった。
「ムゲン君！　さすがにこれ以上の戦闘は危険だ。逃げよう！」
ウィルの言うことはもっともだ。このまま戦闘を続けていてもジリ貧となるだろう。
だが、それでも俺は戦闘を続けたかった。
我儘なのは自分でも理解している。それでも、両親の仇をこの手で討たねば気は済まない。
しかし、三人にも絶対に死んで欲しくはない。
「みんな、先に逃げてくれ。俺は後から行く」
迫り来るシャープスネイルベアーに目くらまし用の魔法、『フラッシュ』を使用する。
奴は雄叫びを上げながら俺の横を通り過ぎていった。思ったよりも効いているようだ。
「ムゲン殿……」

ヤヨイが俺の肩にそっと手を置く。「どうした？」と聞き返そうとしたその瞬間、
「馬鹿者！」
彼女は俺の頬を強く叩いた。一瞬、何をされたのか分からなかった。
「ちょ、ちょっとヤヨイ！　何してるの！」
シャーリアが慌てて俺達の元に駆け寄ってきた。
「ムゲン殿は間違っておられるぞ！　大切な友をみすみすと見捨てておけるか！」
「ごめん、ムゲン君。僕もやっぱり戦おうよ。これ以上、仲間をあいつに殺させはしない必ずここで倒してみせる！」
「私も協力するわ！　絶対に三人で生きて帰りましょう！」
心の中で苦笑した。面倒な仲間を持ったものである。ますます負けられなくなってしまった。
「まったく……良い仲間と出会えたもんだ！」
再び攻撃を再開した。学校の授業で培った連携を惜しげも無く出し尽くすも、さすがの奴もＡ級モンスターだけあって中々倒れなかった。
「ち……もう魔法を使えるだけのアギが残ってねぇや」
「私ももう魔法を使えそうにないわ」
「僕もだよ、本当困ったね」
「小生もであるぞ」
退路は完全に立たれてしまった。役に立ちそうな魔道具もほとんど残ってはいない。
「だが、小生はまだまだ戦うぞ」
ヤヨイの闘志は消えていない。しかし、彼女は激しく息を切らしている。流石に疲労が溜まっているようである。
何とかしなくては……俺は頭の中でオカモリ先生の授業を思い出した。
「体内のアギが無くなった時、アギを回復する以外に魔法を使う術は

ない。だが、一つだけ体内のアギが無くなっても魔法を使う方法が一つだけある」
「オカモリ先生、一体それはどんな方法なんですか？」
本当にそんな方法があるのかと半信半疑の状態だった俺は挙手をして質問した。
「……人間の身体には生命活動に使われているアギがある。アギが空の状態で無理やり魔法を使おうとすると、生命活動に使われているアギを消費し、魔法が使えるようになる」
オカモリ先生の話を聞き、少しばかりゾクッとした。それはつまり……
「簡単に言えば寿命と引き換えに魔法が使えるということだ。人にもよるが、寿命一年につき、千アギになる。いいか？　この方法は絶体絶命の時以外は絶対に使うなよ」
今が使うべき時なのだろう。両親の仇を討つため、奴を倒すため、そして友人を守るため。
「ここで寿命を使う……」
俺はぶっつけ本番でまだ身につけていない無属性の上位魔法を使おうと試みた。
すると、突然息苦しくなり、グニャグニャと視界が歪み出した。
自分の姿、形が見る見るうちに変わっていくのが自分にも分かった。
「む、ムゲン君。何、その姿？」
シャーリアが驚きの表情で俺を見つめている。やけに自分の身体が軽く、まるで浮いているようであった。
頭に生えている二本の触覚、六本の足、音を鳴らし身体を浮遊させる羽、尻に生えている鋭利な針、この姿はまさに――
「お、俺は……ハチになったのか？」

卒業

どうして俺はハチになったのだろうか……いや、それよりも今は奴を倒さねば。

シャープスネイルベアーは爪を立て、俺に腕を振り下ろしてきた。しかし、何故か奴の動きがスローに見えた。

爪を避け、奴の首に齧り付く。ムラマサですら刃が通らない奴の首に俺の牙が強く突き刺さる。

「ギャアアアアァァ!」

奴が痛そうに吠える。とても耳障りな鳴き声だ。奴の肉を食べたせいなのか、なんだか不思議な感覚に陥った。驚くべきことに前足二本から奴に似た鋭い爪が生えてきた。

「なるほどな。相手の能力をコピーすることができるのか」

とても便利な能力だな。まるで某ピンク色の悪魔のような能力だ。元の世界でよくプレイしたものだ。

「みんな下がっていてくれ。ここは俺一人でやる」

三人にそう伝えるもシャーリアとウィルは呆然とした様子で俺を見つめている。

どうやらハチになったせいか、意思疎通が取れなくなってしまったようである。

「シャーリア殿、ウィル殿。ここはムゲン殿に任せようぞ。ムゲン殿、ご武運を」

しかし、理由は不明だがヤヨイの言葉は理解することができた。三人に背中を向け、シャープスネイルベアーにゆっくりと近づいていく。

「お、お前……一体何なんだ?」

ハチになった影響でモンスターであるシャープスネイルベアーと意思疎通が取れるようになったようだ。奴の首筋からポタポタと血が流れ出ていた。

「さぁな。俺にも良く分からん」

奴から手に入れた鋭い爪で目を切りつける。目はまるで豆腐のよ

うに柔らかく、深くまで切ることができた。
「痛い！　も、もう許してくれ！」
奴がこの場から逃げ出そうとした。俺の追いかけ、背中に毒針を打ち込んだ。
奴の動きが鈍くなったが、それでも必死になって逃げ出そうとしていた。
しかし、その先は……
「おい、そこ落とし穴だぞ」
伝える前に奴が穴に落ちた。これはもう終わったな。俺はハチの姿から人間の姿へと戻る。
「ムゲン君。なんだったんだい？　さっきの姿は」
「俺にもよく分からない。それより奴はもう虫の息だ。ウィル、止めを刺すといい」
穴の中にいる奴は身体をピクピクと痙攣させている。放っておいても直に死ぬことだろう。
「いいのかい？」
「ああ。俺の気はもう晴れた」
ハチになり、俺の両親を奪った奴に十分な苦しみを与えることができた。これで少しは殺された人達も浮かばれるだろうか。
「分かった」
ウィルは落とし穴に手を向け、目を閉じる。おそらく殺された仲間達のことを思い出しているのだろう。
「サンダーフォース！」
雷の矢が奴の首を貫く。奴の首と身体が別れた。断絶魔を上げることすら無く、奴は絶命した。
「終わったな……」
奴の死体を見つめ、呟く。とても強いモンスターだった。きっと、俺だけだったら為す術もなく殺されていただろう。
「ムゲン殿！　すごかったであるぞ。さっきのは一体、何であるか？」
多分、祖父が入学する前、ローブと共に俺に預けてくれたものだろう。たしか、祖父は魔法を授けてやったと言っていた。名付けるとし

たら――
「エキストラユニークスキル『ハチ』だ」
　シャープスネイルベアーの討伐を終えた俺達は山を下り、学校へと戻った。
「みんな、試験ご苦労だったな。早速、冒険者カードを見せてくれ」
　俺達はオリモカ先生に冒険者カードを渡した。この冒険者カードは魔道具の一種で、討伐したモンスターの情報が記載される。本来、正式な冒険者に渡されるものだが、卒業試験の為に学校から配布されたものだ。
「しゃ、シャープスネイルベアー……！」
　討伐情報を確認したオリモカ先生の冒険者カードを持つ手が震えている。まだ冒険者ににすらなっていない俺達がＡ級モンスターを倒すだなんて、到底信じられないのだろう。
「お、お前たち……本当にシャープスネイルベアーを倒したのか？」
「はい。本当は俺一人で倒しに行く予定でした。ですが……みんな一緒についてきてくれたんです。自分一人だけだったら多分、俺はこの場にいなかったでしょう」
　オリモカ先生が俺の頬を叩いた。かなり怒っているのが伝わってくる。散々忠告してくれたから当然か。
「馬鹿野郎！　だが……無事で本当に良かった」
　オリモカ先生が抱きしめてきた。柔らかく、暖かな温もりが伝わってくる。驚いた俺はどんなリアクションを取るべきか分からなくなった。
　俺から離れたオリモカ先生は優しげに微笑む。
「よくあいつを倒せたもんだな」
「みんなのおかげです」
「いや、ムゲン殿は本当に凄かったであるぞ！　ハチに変身した時は小生、とても驚いた」
「ハチに？　変わった魔法だな。まさか、エキストラユニークスキルか？」

「はい。おそらくは」
祖父が与えてくれたこの力。きっともう使うことはないだろう。
それに、モンスターを狩るのは今日で最後だ。復讐劇を終えた俺は予定通り、魔道具開発者を目指す。
「そうか……みんな、シャープスネイルベアーを倒してくれたこと、本当に感謝する。あいつは私にとっても因縁の深いモンスターだったんだ」
オリモカ先生は深々と頭を下げる。しかし、感謝すべきは俺達の方である。なぜならば――
「頭を上げてくださいよ先生。先生がいなかったら仲間の仇を討つことはできませんでしたよ」
ウィルの言う通り、オリモカ先生やガルド先生がいなかったら、ここまで強くなることはできなかっただろう。
過酷な授業であったが、今は先生に教わって心の底から良かったと思っている。
「私は特に何もしていない。強くなったのはお前達の努力の賜物だ。卒業してもお前達ならまだまだ強くなれるだろう。頑張れよ」
「はい！　私は必ずS級冒険者になります！」
「僕は立派な魔法警察になります！」
「小生は凄腕の冒険者に……そして、目的を達成するであるぞ」
みんな目標に向けて、モチベーションが高まっている。あまりに若々しくて思わず目をつむりそうだ。
「俺は魔道具開発者の道を目指します！」
次の日、卒業式があり、それが終わると四人で打ち上げを行った。みんなで学校での思い出を語りながら、未来に向けての話をする。とても楽しい時間であった。
しかし、シャーリアはS級冒険者になった後、どうしたいのかやはり教えてくれなかった。
ヤヨイも入学前から掲げているとある目的について、明かそうとはしなかった。
だが、別に構わない。他人に話したくないことなんて誰だってある

だろう。
打ち上げ終了後、一度祖父の家に戻る為、荷造りを行なった。
「この部屋ともおさらばか……」
何だか名残惜しい気持ちになる。祖父の家でしばらくゆっくりと過ごしたら、モリアさんのお店で働こうと考えていた。もしかしたら、冒険者になるシャーリアやヤヨイと会うこともあるかもしれないな。

しかし、俺は結局モリアさんのところで働くことはなかった。
卒業後、俺が就いた仕事は冒険者である。
その理由は――祖父を殺した犯人を突き止めるためである。

手掛かり

「じいさん……」

魔法警察の人に運ばれていく祖父の死体を呆然と眺める。祖父の家に到着した時、リビングで多量の血を流し、冷たくなっている祖父の死体を発見した。

部屋はひどく荒らされており、戦いが起こったのだろうと安易に想像することができた。

「祖父は一体、誰に殺されたのでしょうか？」

祖父の死体を発見した後、俺は無我夢中で山を降り、すぐに警察へと駆けつけた。

警察はすぐに捜査を行い、捜査が終わるまでの間、オリモカ先生に事情を説明し、寮に泊まらせてもらっていた。

両親の仇を討てたと思ったらまたこれだ……一体、どうして祖父が殺されなくてはならないのだろうか。

悲しいという思いから一転して犯人が憎いという思いへと変わっていく。

祖父が殺されてから約一週間後、警察から取り調べに呼ばれ、バキア魔法警察署へと向かった。

とても狭い取り調べ室に案内され、警察官に座るように促される。

「我々も現在、懸命に調査を進めておりますが、手係かりが掴めない状態です」

「そうですか……」

警察から主に聞かれるたのは学校での生活についてであった。事情聴取を終え、取り調べ室を後にした。

「やぁ、ムゲン君」

警察署から出ようとした時、俺に話しかけてきたのはなんとウィルであった。

「おお、ウィル。久しぶりだな。もう警官になったんだな」

「うん、まだ研修中だけどね。それより、聞いたよ。ムゲン君のおじいさんのこと」

「そうか……」
まだ研修中の身であるウィルにも知られているということは重大な事件として取り扱われているのだろう。
「ムゲン君。おじいさんを殺した犯人のこと、知りたいと思うかい？」
「そりゃあ……まさか、ウィル。何か知ってるのか？」
するとウィルは俯き、黙り込んでしまった。ウィルの様子を見て、何かを隠していることを察した。
「おい、何か知ってるならちゃんと話せよ！」
思わず頭に血が登った俺はウィルの胸ぐらを掴む。ウィルはそんな俺に対し、恐ろしく冷たい視線を向ける。
「仮に犯人を知ったとして、ムゲン君はどうするつもりだい？　また仇を討つつもりなのかい？　君のおじいさんを殺せるほどの力を持った相手を」
「そ、それは……」
確かにそうだ。俺は一体どうしたいんだ。かつて伝説の冒険者と呼ばれた祖父を殺せる力を持つ相手を上位魔法すら使えない俺が勝てるはずがない。
例えエキストラユニークスキルを使っても――すると、突然頭が痛んだ。誰かの記憶が頭に思い浮かび上がる。

若き祖父と思われる人物と赤髪の青年が大きなハチのモンスターと戦闘を繰り広げている。
「ライトニングテンペスト！」
祖父が雷の最高位魔法と思われる魔法を発動する。晴天の空が瞬く間に曇天に変わり、稲妻がモンスターに落ちる。稲妻を受けたモンスターは痙攣し、動きが止まった。
「今だ、やれ！」
祖父が叫ぶ。赤髪の青年はモンスターに手を向けた。モンスターの上空から赤い複数の魔法陣が浮かび上がる。
「スプリードエクスプロード」
赤髪の青年が炎の最高位魔法と思われる魔法を発動する。凄まじ

い爆発が起こり、モンスターは爆炎に飲み込まれる。
やがて、そのモンスターは黒焦げになり、地面に落ちた。どうやら死んだようである。
「やったな……ナハラ」
「そうだな。シークレットビーは今まで倒したモンスターの中で一番手強かった。俺一人じゃ敵わなかっただろ」
祖父がかなり疲弊しているのだが分かる。年齢からして祖父の全盛期と思われるが、その祖父が一人で倒せないほど、強いモンスターのようである。
「それで、獲得できたのか？　エキストラユニークスキルを。俺は何の変化した様子はないんだが」
「ああ、どうやら上手くいったみたいだ」
祖父はハチの姿へと変化した。
やはり、祖父は持っていたのだ。エキストラユニークスキルを。そして、魔法学校へ入学前日、俺は祖父からエキストラユニークスキルを譲り受けた。
「ナハラ。そのエキストラユニークスキルは君が持っていてくれ。これは君以外の人間が扱うにはあまりにも危険な代物だ。出来るだけ使わないようにしてくれ」
「分かった。お前はこれからどうするんだ？」
「一度、城へ戻るよ。兄の暴走を止めないといけないからね」
「そうか……気をつけろよ、『バキア』」
「その名前で呼ばないでくれ。今の俺の名は……」

「ちょ、ちょっとムゲン君。大丈夫かい！」
ウィルに話しかけられ、ようやくが意識が戻った。
さっきの記憶を元に祖父の手掛かりを得るとしたら――
「王国軍……」
頭の中で思い浮かんだ言葉を呟く。
「え？」
「祖父の手掛かりを得るには王国軍のことを調べる必要がある。祖父

がエキストラユニークスキルを手に入れた時の記憶を見たんだ。そこには王族らしき人がいた」
　赤い髪をしたバキアの姓を持つ人物。現在の王なのか不明だが、王族のひとりと考えてもいいだろう。
「……そこまで自分で辿り着いたんだね」
　ウィルのその反応、やはり王族が関わっていると見ていいだろう。
「頼む、ウィル。知っていることを全て教えてくれ。お前に迷惑は掛けない」
「分かった。だけど……一つ、約束してくれ」
「何だ？」
　少し間を置いた後、ウィルが頼むごとをしてきた。
「絶対に無茶はしないでくれ」
「分かった」
　俺はウィルから事件に関する詳しい話を聞いた。
　祖父は『王族魔法』と呼ばれる王族にしかない魔法によって殺害されていたこと。
　王族が祖父を殺したことが判明したことで、警察が捜査を打ち切りにしようとしていることを知る。
「魔法警察は王国の機関だからね。王族が事件の首謀者である場合は、手を出すことができないんだ」
　警察に頼っても無駄であることが判れば、やるべきことは決まっている。
「なぁ、ウィル。王族魔法っていうのは、王以外でも使うことができるのか。例えば、王子や王女とか」
「うん、そうだね。バキアの血を引くものなら使えるって言われているよ。王族の中でナハラさんと関わりの深い人物が犯人だとは思うけど……」
　それだけ分かればもう十分であった。ゆっくりと俺はベンチから立ち上がる。
「ありがとうウィル。助かったよ」
「ムゲン君……どこに行く気だい？　まさか……」

城へ乗り込む気は『まだ』ない。ひとまず、俺がまずしなければならないことは――

「S級モンスターを倒しに行ってくる」

ウィルとの会話を終えた後、俺は魔法学校へと戻った。

荷物を取りまとめ、寮から出る準備を行った。その次の日にオリモカ先生に挨拶へと向かった。

「本当にここを出るのか？　もう少しここにいてもいいんだぞ」

「お気持ちはとてもありがたいですが、そこまで迷惑は掛けられません」

まずはS級モンスターを倒す。そして、王国軍へと入り、祖父を殺した犯人の手掛かりを掴まねばならない。

「そうか。無理に止める気は無いが。まぁ、なんだ。こんなこと、私が言う資格なんてないかもしれないが……復讐に囚われるな。ナハラさんもお前に危険な目に遭ってほしいなんて思ってはいないはずだ」

オリモカ先生の言うことはもっともである。祖父は俺が復讐をすることなんて望んでいないのかもしれない。だが――

「助言してくれたこと、心から感謝します。だけど……俺は必ず祖父を殺した犯人を見つけ出します。祖父が望むとか望まないとか関係ありません。俺がそうしたいんです」

「ムゲン……」

深々と頭を下げ、学校を後にした。

これで本当にさらばだ、バキア魔法学校。

友人との再開

「卒業証明書、確認いたしました。こちらの用紙に必要事項をご記入ください」

俺は『冒険者ハウス』という冒険者にクエストを斡旋する施設にいた。

受付の人から渡された冒険者登録書を記載していく。記入が終わると、受付の人に冒険者登録書を渡した。

「内容を確認いたしますので、少々お待ちください」

受付員が内容を確認している間、俺はクエスト掲示板の依頼書を見て時間を潰すことにした。

王国軍に加入するためにはまずは冒険者になる必要がある。その上で、S級冒険者へとランクアップする必要があった。

「貴殿……もしかして、ムゲン殿ではないか？」

背後から聞き覚えのある声がした。振り返ると、ヤヨイとシャーリアが立っていた。

「ヤヨイ、シャーリア……」

久々に友人の顔を見て、今まで復讐心による張り詰めていた気持ちが少しばかり緩んでいくようであった。

「ムゲン君とこんなとろで会うなんて驚きだわ！　どうしたの？　魔道具開発者になるんじゃなかったの？」

「そのつもりだったんだが……ちょっとその、野暮用でな」

二人に冒険者を目指す経緯を話すかどうか悩んだ。ここはうまくはぐらかすべきか……

「内容確認いたしました。『アイン＝ダハ』さん。こちら、冒険者カードになります」

受付員から冒険者カードを受け取り、ヤヨイ達の方を見ると、二人は驚いたように目を丸くしていた。

俺が冒険者登録したこともそうだが、改名したことに驚愕しているのだろう。

「ムゲン殿……詳しく話を聞こうか」

冒険者ギルド内にある飲食スペースの席にて、二人に冒険者を目指すことになった経緯を話した。
「そっか。おじい様がね……」
「お悔やみ申し上げる」
俺が名前を変えたのはウィルから勧められたからである。
祖父を殺した犯人――今度は俺を襲ってくる可能性が高いとのことだった。
襲ってくるのならば祖父を殺した犯人と接触はしやすいだろうが、真っ向勝負して勝てるなどとは思っていない。
俺はウィルの言う通り、改名を行なった。この世界では比較的簡単に改名することができる。
改名した後は二ヶ月余りバキアを離れ、自力でモンスター討伐を行なう生活をしていた。
「ムゲン殿の目標は王国軍の加入……であるな」
「そうだな」
「では、我々のギルドに入らぬか？」
「ヤヨイ達のギルドか……」
ある程度エキストラユニークスキルの使い方を学んだが、単独でＳ級モンスターに勝てるかと言われると、正直まだ微妙である。
どこかのギルドに所属した方がいいとは考えていた。
「二人以外には誰がギルドに入っているんだ？」
「私達二人だけよ」
「何!?」
普通ギルドは四、五人大規模なところだと十人以上で構成される。
「小生達も何度かギルドに入ってみたが、どこのギルドもＢ級モンスター以上のモンスターを倒そうとする気概のあるギルドは無かったであるぞ」
通常のギルドはＢ級以下のモンスターを討伐するのが普通である。難易度が高いのも勿論だが、一度受けた依頼は失敗すると、ペナルティが発生する。
その為、Ａ級以上のモンスター討伐依頼は凄腕の冒険者では無い限

り、誰も受けようとはしない。
「なるほど……だから二人だけでギルドを結成したのか。二人はどれくらいのモンスターを倒してきたんだ？」
「最近、Ａ級モンスターを一体討伐したわ。シャープスネイルベアーよりも遥かに弱いモンスターだったけどね」
二人もこの短期間でかなり、腕を上げているようだ。確かにアギの量は卒業前よりも増えているのが肌で感じられる。
「すごいな二人とも。俺も二人のギルドに加入させてもらえるか？」
「勿論であるぞ。共にＳ級モンスターを倒そうぞ！」
三人でギルドを結成することにした。クエスト掲示板の前へと移動し、Ｓ級モンスターの討伐依頼がないか探してみることにした。
「こ、これは……」
一枚のクエスト依頼書を手に取った。依頼内容は『レッドフレイムドラゴン』の討伐であった。
「れ、レッドフレイムドラゴン!?　そんな依頼が来てるの！」
俺も驚きであった。よりによってエレメントドラゴンの依頼か……他にはＳ級モンスターの討伐依頼は無さそうである。
「何であるか？　そのレッドフレイムドラゴンというモンスターは」
「エレメントドラゴンの一種よ。レッドフレイムドラゴンは炎の属性を司り、一拭きで街を焦がし、空に羽ばたけば天候を変えると言われているわ」
エレメントドラゴンには火、水、風、雷、土、氷の属性を司るドラゴンがいる。エレメントドラゴン達から採れる素材は素材はどれも高値で取引され、他のＳ級モンスターと比較しても討伐難易度が高い。
「なるほど……ようするにかなりの強者（ツワモノ）ということか。では、こやつを討伐することとしよう」
「ほ、本気!?　ドラゴンって基本的に討伐するのが難しいのよ。あいつら、危なくなると飛んで逃げるし！」
シャーリアの言う通り、エレメントドラゴンに限らず、ドラゴンは漏れなく体力が減ると身の危険を察知して空へと逃げ出す。

「だが、それでも倒す価値はあると思わぬか？　ムゲン殿の祖父を殺した相手はそのドラゴンよりも遥かに手強いのだろう？」
「そうだな。俺達でレッドフレイムドラゴンを倒そう」
俺はヤヨイの意見に乗っかることにした。二人には隠しているが、S級モンスターの討伐を急ぐ『ある理由』がある。
「全く……しょうがないわね。それじゃ、やりましょうか！」
最初は乗り気ではないシャーリアも同意し、俺達はレッドフレイムドラゴンの討伐依頼を受けることにした。

シャイニングバッド

依頼書によると、討伐対象となるレッドフレイムドラゴンは現在、シルヴァ山という山にいるらしい。
シルヴァ山の標高はとても高く、移動するだけで膨大な時間が掛かる。
さらに討伐モンスターがＳ級モンスターであるため、長期戦が予想される。
「移動時間を考えると、少なくとも二日は掛かると見た方がいいわね。そうなると、どこかでテントを張る必要があるわ」
「テントか……であれば、水辺に張った方がよいな。それと、食料やポーションも買い溜めておく必要があるぞ」
Ａ級以上のモンスターを討伐する際は準備に多大な時間を掛ける必要がある。自分達の方が討伐するモンスターよりも強い場合はゴリ押しでも何とかなるだろうが、あいにく俺達とレッドフレイムドラゴンと向こうの方が何枚も上手だ。
モンスターと遭遇した場合は、逃亡する場合も考慮して、速やかに仕留めることが望ましいとされる。
「二人はテントで泊まったことがあるのか？」
「いえ、ないわ。Ａ級モンスターを倒した時も日が沈む前には戻ってきたわね」
かくいう俺もテントで寝泊まりしたことはなかった。バキアの街を離れている間は、野宿か宿で寝泊まりしていた。
「三人で寝泊まりするとなると、大きなテントを用意せねばなるまいな」
なぜかヤヨイは俺も含めて三人で同じテントで寝泊まりする気のようである。
「いや……俺は自分のテントを用意するよ」
「どうしてであるか？」
ヤヨイは心底不思議そうな表情で訊いた。こいつ……本気で分かってないのか。

「そりゃ、俺は男だしな。色々とまずいだろ」
「俺が気にするんだ！　シャーリアだって困るだろ？」
「え、ええそうね……あはは」
　シャーリアは顔を引きつらせて笑っていた。反応に困っているようである。
「とにかく俺は別のテントで泊まるからな」
「承知した。では、ドラゴン討伐に向けて、作戦を立てようぞ」
　レッドフレイムドラゴンに向けて、各々の役割、討伐の手順、当日に向けての準備について、綿密に話し合った。
　また、少しでも連携を高めておくため、B級モンスターの依頼を受けることにした。

　街から少し離れたところにあるリッセン洞という洞窟に向かった。
　その洞窟にいる『シャイニングバッド』というモンスターを討伐するべく、洞窟の奥へと進む。
　洞窟に入ってから三十分程で最深部へと到着した。
　シャイニングバッドは逆さまの状態で天井に止まっていた。
「見つけたわ……食らいなさい、フレイムランス！」
　シャーリアが放った火の矢がシャイニングバッドに腹部に突き刺さる。
　すると、シャイニングバッドは激しく羽をバタつかせる。
「キーーーーーーーーーー！」
　奴は鼓膜を突き破ろうとするかのような鳴き声を発した。
「ッ！」
　ヤヨイは苦しそうな表情で耳を塞いだ。俺とシャーリアも耳を塞いで後ずさりを行う。
　ひたすら奴の咆哮を耐えるしかなかった。しかし、このままではじっとしていても埒が明かない。耳栓でも持ってきておけば良かったのだが、あいにくそんなものは用意していない。
　一瞬でもあの鳴き声を止めることができれば良いのだが……
「そうだ」

ふと、脳裏にある作戦を思いついた。エキストラユニークスキルでハチに変身し、即座に人間には出すことにできない音で大声を発する。
「急に音が小さくなった……これもムゲン殿の力であるか？」
『アクティブ消音』という騒音に騒音を重ねて消すという方法で、シャイニングバッドの音を抑えた。
音を出しながら俺はシャイニングバッドに向かって飛び、奴の身体に針を突き刺した。
「ぎゃあああ！　い、痛い！」
ハチの姿になると、モンスターの声が聞こえるようになる。さっき、刺した針には痺れ作用があり、シャイニングバッドは動かしていた羽を止め、地面に落ちた。
「お前の能力もいただいておくぞ！」
シャイニングバッドに噛り付き、奴の力をコピーした。コウモリは暗闇でも超音波で獲物の位置を特定できる。この力は役に立つことだろう。
俺は人間の姿へと戻った。B級モンスターにしては中々厄介な敵であった。
上位魔法を使えばもっと楽に倒せるだろうが、洞窟内で使うと、崩壊する恐れがあるため、使用を控えていた。
ヤヨイは鞘からムラマサを抜き、力強く地面を蹴り込む。
「水流斬！」
文字通り、刀に水流を纏わせ、シャイニングバッドを真っ二つに斬り裂いた。奴の身体から緑色の血が流れ、断絶魔を上げる間も無く絶命した。俺は人間の姿に戻った。
「ヤヨイ、さっきの技は……」
「うむ。魔法学校を卒業してから編み出した技であるぞ。刀に水属性の魔法を付与してみた。これで強力な斬撃へと昇華した」
「へぇ……」
二人とも随分と腕を上げているようだ。これなら、レッドフレイムドラゴンを倒せるかもしれない。

「ムゲン君もすごかったわ。もう自由にハチになれるのね」
「一応な」
　最初は自由にハチになれなかったが、エキストラユニークスキルの使用を繰り替えしているうちにコツを掴むことができた。
「ムゲン殿。先ほどはいかにして音を消したであるか？」
「ああ……あいつの鳴き声と逆の周波数の鳴き声を重ねて相殺したんだ」
　以前、『レインボーパラケイト』というモンスターと戦闘した時に能力をコピーしていた。
　そのモンスターは周波数を調整し、声色を自在に変えることができる能力を所有している。
　あまり戦闘で役立つことはないと思っていたが、意外なところで役立った。
「ふむ……よく分からんな」
　ヤヨイには難しい話のようであった。
「ねぇ、ムゲン君。さっきモンスターの肉を食べていたけど、何か意味があるの？」
「そっか、二人は知らなかったんだな。モンスターの肉を食べることでそのモンスターの能力を使うことができるようになるんだ」
「ほう、それはすごいな」
「しかし、中々手強いモンスターだったな。Ｂ級モンスターを少し甘く見ていた」
　ウィルもいたとはいえ、シャープスネイルベアーを討伐した俺達ならもっと楽に倒せると思っていた。
「ランクは危険度で付けられるから純粋な強さとは直結しないわ。さっきの条件下なら、Ａ級はあると見ていいわね」
　確かにあの音攻撃は洞窟内だからこそ手を焼いたが、野外ではあまり強くは作用しないだろう。
「何はともあれ、無事討伐できたのだ。街に戻ろうぞ」
　洞窟を抜け出し、街へと戻ることにした。街に到着すると、ある洋食屋に入り、三人で打ち上げすることにした

シャーリアの正体

「無事、シャイニングバッドを倒したこと、そしてレッドフレイムドラゴンの討伐を願って乾杯！」
「かんぱーい！」
ヤヨイが率先して乾杯の音頭を取り、シャーリアがテンション高めにグラスを掲げた。
一応言っておくが、俺達が持っているグラスの中身はお酒ではない。ただのジュースである。俺は蜂蜜ジュースを頼んでいた。
「ほら！　ムゲン君も一緒に乾杯！」
「お、おう……乾杯！」
俺は自分のグラスをヤヨイとシャーリアのグラスに軽くぶつけた。
「しかし……成り行きはどうあれ、またムゲン殿と一緒に戦うことができて、小生とても嬉しいぞ！」
「うん。私も本当に嬉しいわ」
「そ、そうか……そういえば、二人が王国軍に入りたい理由って何なんだ？」
「小生の目的に関わることである。それゆえ、まだ言えぬ」
魔法学校での生活の時もヤヨイは自分の目的を話そうとはしなかった。
「そうか。シャーリアは？」
「私も今は……けど、いずれ必ず二人には伝えるから。必ずレッドフレイムドラゴンを倒しましょう」
隠し事くらい誰にだってある。俺だって自分が異世界からやって来たことを二人に話そうとは思わない。
「うむ。そういえばウィル殿は元気であるか？」
「ああ。俺が最後に会ったのは二ヶ月くらい前だったかな？　その時は元気そうにやってたぞ」
「そっかぁ。卒業以来、会ってないからまた四人で集まりたいわね」
「そうであるな！」
俺も二人のように四人で集まり、ゆっくりと話し合いたいと考えて

いた。
「明日は三人で必要なものを買いに行きましょうか。そろそろ新しいローブとか買っておきたいし」
「そうだな。俺も色々と揃えておきたいものがある」
俺が使っている銃や刀の手入れをしておきたいと思っていた。葬儀品を修理してくれるお店がバキアの街にいくつかある。
「すなないが、明日は少し出掛けたいところがある。二人で行ってきてはくれまいか？」
「あら。そうなの？　なら、明後日にしましょうか？」
「いや、小生のことは気にせず、二人で準備を進めておいてくれて構わぬ」
「そうか、分かった。シャーリアはいいか？」
「ええ、勿論よ」
その次に日。予定通り、俺とシャーリアは買い物をするべく、街へと繰り出した。
商店街の近くにある公園の噴水前で、シャーリアが来るのを待っていた。
「ムゲンくーん！」
少し離れたところから、シャーリアが手を振りながらこちらに向かってくるのが見えた。
「ごめんなさい。待ったかしら？」
「いや、俺もまだ来たばかりだよ」
シャーリアと合流し、俺達は商店街に向かうことにした。
「ねぇ、ムゲン君……ヤヨイのことどう思う？」
シャーリアは歩きながら突然、ヤヨイのことについて、訊いてきた。とても深刻そうにしているため、只事ではないなと感じた。
「何だ突然……」
「あの子とギルドを組んでもう二ヶ月以上経つんだけど、その……あの子、一回も私の一緒にお風呂に入ってくれないのよね」
「……は？」
一瞬、自分の耳を疑った。一緒にお風呂の入ってくれないから何だ

というのか。
「だから！　ヤヨイがどういう訳か一緒にお風呂に入ってくれないのよ。銭湯に誘っても絶対に断るし、前にお風呂に乱入したらものすごい勢いで追い返されたし」
「まぁ、単純に恥ずかしいんじゃないのか？」
「……そうかもしれないけど、なんか背中に秘密があると思うのよね。お風呂に乱入した時も必死に隠してたし」
「それは……傷でもあるんじゃないのか？」
　背中の傷は剣士の恥って言うしな。
「そうなのかしら……うーん」
　俺からしたら些細な問題のように感じるが、シャーリアは真剣に悩んでいるようであった。
「隠し事なんて誰にだってあるだろ。シャーリアだって……S級冒険者を目指す理由を教えてくれないじゃないか」
「そ、それは……」
　シャーリアはピタリとその場を立ち止まった。振り向くと、シャーリアは顔を伏せていた。
「しゃ、シャーリア？」
「ねぇ、ムゲン君……」
「な、なんだ……？」
　急にシャーリアは俺の手首を掴むと、どこかに連れて行こうとした。
「おい……どうしたって言うんだ一体？」
　シャーリアに連れて行かれた場所は商店街前にある大広場であった。遠く先にバキア城があり、シャーリアはそれを指差した。
「ねぇ、ムゲン君。あのお城なんだけど……」
　バキア城――恐らくはあの場所に祖父を殺した犯人がいる。
「あ、あれがどうしたっていうんだ？」
「私さ……昔、あそこの住んでたんだ？」
　シャーリアの言葉を理解するのに時間が掛かった。
「え!?」

「私の『前』の名前はね、シャーリア＝バキアだったのよ」
次々と明らかになる衝撃的な事実に脳の処理が追いつかなくなりそうである。
「王族だったのか……シャーリアは」
「元ね。私の父さんは今の王の弟だったわ。父さんはね、殺されたのよ。実の兄に……」
シャーリアの表情は今まで見たこともないような憎悪の表情に満ちていた。
「……今の王がシャーリアの父さんを殺したっていう確証はあるのか？」
俺に質問に対し、シャーリアが首を横に振る。
「ないわ……けど、どう考えてもあいつが殺したに決まっているわ！
元々、父さんが王に即位する予定だったのよ。即位の日の前日に父さんが殺されて、あいつが王になった……そして、私はあいつに城を追い出されたのよ」
幼い子供が身寄りもない状態でいきなり追い出されるなんて、さぞや苦労したことだろう。
「それからどうしたんだ？」
「衰弱して倒れていたところをある老夫婦に拾われて、学校に入学するまでお世話になったわ。私を拾ってくれた二人は元冒険者で魔法の使い方を教わったのよね」
確かにシャーリアの魔法適性はかなり高い。王族であるなら、あの魔法適性の高さにも説明がつく。
「シャーリアは……今の王を殺すつもりなのか？」
「ええ、そうよ。もしかしたらムゲン君のおじいさまを殺したのも王かもしれないわね。だとしたら、目的は一緒よ」
目的は一緒か……シャーリアが王族であると分かった今、俺はシャーリアに聞きたいことがあった。
「シャーリア。王族魔法について詳しく教えてくれるか？」
ウィルにも以前、王族魔法がどんなものか聞いてみたが、どうやら極一部の人間にしか知られていないようであった。

「私もそこまでは詳しく知らないけど……父さんは『時を司る魔法』だって言っていたわ」
「時を司る魔法……」
俺は祖父が死んでいるのを見つけた時の様子を思い浮かべた。
とてもつらい記憶であるが、年齢にして若々しかった祖父の見た目はひどく老け込んでいるように見えた。恐らくは王族魔法によって、生じた現象なのだろう。
「……結構、厄介な魔法だな」
時を司る魔法と言っても、さすがに何でもありというわけではないだろう。
しかし、某吸血鬼のように数秒間だけでも時を止められでもしたら、かなりの脅威となり得るだろう。
「なぁ、シャーリアの父さんも王族魔法を使えたのか？」
「ええ。あまり、戦闘向きの魔法じゃなかったけど」
「どんな魔法なんだ？」
「自分の年齢を自在に変えられる魔法よ」
「いいなそれ」
元の世界で使えればかなり便利な能力である。どんなサービスも子供料金で利用できるだろう。
「その能力を使って母さんを口説き落としたって言っていたわ」
「えっと……その、母さんとは何歳差なんだ？」
「二十五歳差よ」
おお。大分歳の差婚だな。となると、シャーリアの父さんと俺の祖父は大して年齢が変わらないのかもしれない。
「うっ……！」
突然、激しい頭痛が襲いかかってきた。脳内でとある記憶が再生される。どうやらウィルと話した時に見た記憶の続きのようである。

覚悟

「その名前で呼ばないでくれ。今の俺は『アルフレッド』だ」
　祖父と会話している人物は自分のことをアルフレッドと名乗った。アルフレッドと名乗る人物はどことなくシャーリアと面影がある。
　今、この人物が誰なのか分かった。
「……なぁ、シャーリア」
「ん？　何かしら」
「シャーリアの母さんのファミリーネームは……何て言うんだ？」
「アルフレッドよ」
「なるほどな……」
　記憶の中で出てきた人物――あれはシャーリアの父親なのだろう。
「な、何？　一体、どうしたの？」
　俺は今見た記憶のことをシャーリアに伝えた。
「父さんがムゲン君のおじい様と……」
「記憶の中で、シャーリアの父さんは兄の暴走を止めると言っていた」
「そうなんだ。何かを企んでいたのかもしれないわね」
「何かって？」
「それは分からないけど……」
　シャーリアの父さんが言う暴走とは一体何を指しているのか、今の時点ではよく分からない。
「そうか。だが、確かに祖父を殺したのは今の王の可能性が高いな」
「そうね。少しは信用してもらえたかしら」
「一つ、勘違いしているぞ」
「え？」
　俺は何を隠していようが別に構わないと思っていた。シャーリアがどんな立場にいようが仲間である。
「俺は元からシャーリアとヤヨイを信頼している。誰だって話したくないことくらい、あるだろう」
「あ、ありがとう……」
「礼には及ばない。それよりもシャーリア。ヤヨイの目的について、

何か知らないか？」
　ヤヨイもまたシャーリアと同様、自分の目的を明かそうとしなかった。シャーリアになら、もしかしたら打ち明けているのではないかと思ったのだが。
「ええ、聞いてないわよ。私も何度か聞いてみたけど、教えてくれなかったわ」
「そうか」
「随分とあの子のこと気にしているのね」
「別にそういうわけじゃ……」
「あの子、もしかしたらムゲン君に心を開くかもしれないわね」
「なんだ、心を開くって？」
「あの子……多分、私に対して心の底から信頼してないと思うのよね」
「そうなのか？」
　俺には全く分からなかった。いや、思い出すと確かにヤヨイは俺達とはどこか遠い場所にいる。
　気のせいかそんな気はしていた。
「うん。それとヤヨイね。冒険者になってから、ムゲン君に冒険者になって欲しかったってボヤいていたのよ。ムゲン君が私達のギルドに加入することになった時、すごく喜んでいたわ」
　ヤヨイが……ヤヨイはとても強い少女である。俺よりも、シャーリアよりも。
　こんな自分でも必要としているのだろうか。
「けど、俺にもまだあいつは自分の目的を話さないと思う」
「そうかもしれないわね」
　その後、俺達は商店街で買い物をした。買い物が終わると、シャーリアと別れ、寝泊まりしている宿屋へと戻った。

　シャーリアと買い物をしてから三日後が経過した。身支度を整え、ギルドハウスへと向かう。
　今日はレッドフレイムドラゴンの討伐へと向かう。ギルドハウスには既にヤヨイとシャーリアがいた。

「おはよう、二人とも」
「おはよう。それじゃ、みんな揃ったことだし行きましょうか」
シルヴァ山の麓までは馬車を使って移動する。街を離れ、田園地帯に差し掛かった。
「のどかな場所であるな。ジャポニのことを思い出す」
ヤヨイは懐かしそうに延々と続く田園風景を見つめていた。
「なぁ、ヤヨイ。ヤヨイはいつかジャポニに帰るつもりなのか？」
「うむ。いつの日か戻るつもりであるぞ」
「それは……目的を達成したらか？」
「うむ、そうであるな」
あっさりと認めた。この際、ヤヨイの目的について詳しく訊いてみたいと思った。
「なぁ、ヤヨイの目的ってなんだ？」
「前にも言ったが、まだ言えぬ」
やはり、ヤヨイは話すつもりはないようであった。
「ヤヨイ、シャーリアが王族ってことは知っているのか？」
「ちょ、ちょっと！　ムゲン君！」
シャーリアが取り乱した。しかし、これからS級モンスターと戦うのである。この際、ハッキリさせておいた方が二人のコンディション的に良いと判断した。
「そうであるのか？　シャーリア殿」
「ええ、そうよ」
「王族であるシャーリア殿がどうして魔法学校に入学していたのであるか？」
「それはね……」
シャーリアは俺にしたのと同じ説明を行なった。
「そうであったか。バキアの王がシャーリアの父上殿を……」
「ヤヨイ。シャーリアは自分が王族であることを俺達に話してくれたんだ。ヤヨイも目的を教えてくれないか？」
「すまぬな二人とも。やはり小生は……」
ヤヨイの意思は想像以上に硬い。これ以上、追求しても無意味だろ

う。
「そうか」
「本当に申し訳ない二人とも。だが、これだけは伝えておきたいと思う。小生の目的も二人と同じ『復讐』であることを」
　ヤヨイも復讐を企てている？　だとすれば、一体誰を狙っているのだろうか。
「ヤヨイも家族を殺されたのか？」
「うむ」
　意外であった。まさか、ヤヨイの目的が復讐であるとは。モンスターと戦う時、ヤヨイはいつも純粋に戦闘を楽しんでいるように見えた。
　ヤヨイに憎悪という感情があるとは露にも思わなかった。
「ねえ、私達っておかしいのかしら？」
「おかしい？　一体何がだ？」
「復讐に囚われていること。たまにね、本当は純粋に楽しんで生きた方がいいんじゃないかって」
　シャーリアの言うことも一理ある。よく復讐は何も生み出さないと言われるが、多分それは正しいのだろう。
　だが、そんな簡単に割り切れるほど、人間はいや俺は単純なものではない。
「シャーリア殿の復讐に懸ける思いはそんなものであるのか？」
　ヤヨイの声がいつもより低く聞こえた。どことなく迫力を感じる。
「や、ヤヨイ……」
　シャーリアもまたいつもと違うヤヨイの迫力に圧倒されていた。
「小生には……どうしても許せぬものがいる。其奴を殺すまでは、絶対に死ねぬのだ！」
「おい、ヤヨイ。ちょっと落ち着け」
　俺が呼び掛けると、ヤヨイは睨みつけるように俺のことを見上げる。
「小生の復讐への思いは誰よりも強い。ムゲン殿だって祖父を殺したものが憎いであろう？」

祖父が殺された時の様子を思い浮かべた。
ひどく衰えた状態で亡くなっている祖父の姿。祖父は幼くして両親を亡くした俺にとっても唯一の家族であった。
魔法を教えてくれ、真っ当に働いたら恩返しをしたいと考えていた。しかし、祖父を殺した犯人のせいでそれは叶わぬ願いとなった。
「……そうだな」
「すごいなムゲン殿」
「何がだ？」
「ムゲン殿から伝わる殺気……シャープスネイルベアーと対峙した時以上のものを感じる」
「ヤヨイ、俺もお前と同じだ。今は目的を話さなくても構わない。一緒にレッドフレイムドラゴンを倒してくれ」
俺は二人とギルドを組むまで一人でモンスターと戦い続けた。色んなモンスターの肉も喰らい、その都度新しい能力を獲得した。
それでも、一人ではレッドフレイムドラゴンには勝てないだろう。
「御意。元からそのつもりであるぞ」
「シャーリアはどうする？」
「えぇっと、その……ど、どうしたらいいんだろう？」
「それは自分で決めるんだ。復讐のことを忘れて楽しく生きるか、それとも仇を討つのか。だが、どちらを選んでも俺はシャーリアを責めたりしない」
「ヤヨイはどうなのかしら？」
「小生も……シャーリア殿が考えた結果なら認めるつもりであるぞ」
「ありがとう二人とも。私もやっぱり二人についていくわ！　父さんを殺した王が憎いのもあるけど、まだ二人と一緒に冒険したいの」
「シャーリア殿、一緒に付いてきてくれること、誠に感謝致す」
「やめてよもう……ムゲン君もいい？」
「勿論だ」
当初の想定とは違ったが、これで二人とも吹っ切れたであろう。

ヤヨイの正体

シルヴァ山の麓に到着すると、馬車から降り、徒歩で山頂に向かう。
レッドフレイムドラゴン以外にもシルヴァ山には強いモンスターがたくさん生息している。
極力、戦闘を避けて登って行ったが、やはり戦わなければいけない場面に何度か遭遇した。
「フレイムバースト！」
俺達はホーンホースという大きなツノを持った馬のようなモンスターと戦っていた。シャーリアが魔法をぶつけるも倒れない。
「随分としぶといモンスターであるな！」
ホーンホースのツノをヤヨイがムラマサで受け止めた。戦闘を避けるため、一度は逃亡したものの、しつこく追いかけてきたため渋々戦闘を行うことにした。
しかし、奴は想像以上にタフなモンスターであり、かれこれ十分以上戦闘を行なっている。
「仕方ない……使うか！」
エキストラユニークスキルを発動する。ハチになり、ヤヨイと力比べをしているホーンホースの脇腹に針を打ち込む。痺れ作用のある毒を打ち込まれた奴の動きは鈍くなった。
「隙あり！」
ヤヨイがホーンホースの首を斬り落とした。頭部を失った首から血が吹き出し、奴の身体は倒れる。
「ムゲン殿。助太刀感謝致す」
俺は人間の姿へと戻った。気を抜いたら一気に疲労感が襲ってきた。シャーリアとヤヨイもかなり疲れていることだろう。
「今日はこの辺でテントを張って泊まることにしよう」
「そうね。今日はもう疲れたわ」
少し歩いた先にある川の近くでテントを張ることにした。勿論、シャーリアとヤヨイとは別のテントで泊まる予定である。
テントの組み立てが終わると、中に入り身体を横にした。

今日はひたすら山を登り続けたため、かなり脚がパンパンであった。
「失礼するわ」
シャーリアが中に入ってきた。手には大きなタオルを持っている。
「おお、シャーリアか。どうした？」
「私、水浴びに行ってくるわね」
「お、おぉ。そうか……」
「覗かないでよ？」
「の、覗かねーよ！　それより、ヤヨイにはやっぱり断られたのか？」
「なーに？　ヤヨイがいたら覗きに行くつもりだったの？」
「ちげーよ！」
シャーリアは以前、ヤヨイが一緒にお風呂に行ってくれないことを嘆いていた。だから、聞いてみたのだが、確かにまるでヤヨイが一緒なら覗きに行くみたいな聞き方であった。
「いつも通り、断られたわね」
「そうか。俺はもう寝るから安心して水浴びしてくれ」
「そう、分かったわ」
目を閉じ、眠ろうとしたが咳が出た。手を口に被せ、何度か咳をする。掌を見ると血が付着している。
俺は後、何回変身できるだろうか。エキストラユニークスキル『ハチ』は普通の魔法とは違い、体内のアギではなく、寿命を使って変身しなくてはならない。
一人で活動していた頃、何度もエキストラユニークスキルを使用していた為、もう俺の寿命は長くはないと薄々感じていた。
「復讐を終えるのが先か、寿命が尽きるのが先か……」
いずれにせよ、モタモタしている時間はない。明日で必ずレッドフレイムドラゴンを仕留める。
「ムゲン殿、中に入ってよろしいか？」
テントの外からヤヨイの声が聞こえてきた。「いいぞ」と返事をすると、ヤヨイはテントの中に入ってきた。
ヤヨイは立ったまま、じっと俺のことを見つめてくる。

「座ったらどうだ？」
「うむ。では失礼する」
ヤヨイは正座した。俺もヤヨイに釣られるようにヤヨイと向かう会うように正座した。
「……」「……」
重々しい空気が流れる。何だこれはお見合いか。
「ムゲン殿、隠していることがあるであろう？」
「何のことだ？」
「気づいておらぬとでも思っていたか？　ムゲン殿の寿命、そう長くはないであろう？」
ヤヨイの表情は明らかに確信している。これ以上、誤魔化しても無駄か。
「気づいていたのか」
気づいている素ぶりは全くみられなかった。しかし、どうして分かったのだろうか。
「うむ。小生、昔から分かるのだ。人の寿命というものが」
ヤヨイにそんな能力があるとは驚きである。しかし、ヤヨイが俺の寿命を把握しているとしたら確認しておきたいことがあった。
「シャーリアには俺の寿命のこと、話してないよな？」
「うむ。しかし……」
「今はまだ伏せておいてくれ。頼む」
ヤヨイに深々と頭を下げた。別にシャーリアを悲しませたくないとかそういう理由ではない。
変に動揺を与えれば、明日の討伐に影響が出ると思った。
「……承知した」
「ありがとう。ヤヨイ、俺の方からも聞いておきたいことがあったんだ」
「何であるか？」
ヤヨイは水色の髪をかき上げた。やはりこうして見ると、普通の可愛らしい少女にしか見えない。
「ヤヨイ、お前って……モンスターなのか？」

「……」
ヤヨイはしばらくの間、沈黙した。この反応はやはり……
「どうしてそう思うのであるか？」
「ハチに変身すると人の言葉が分からなくなる代わりにモンスターの言葉が分かるようになるんだ」
シャープスネイルベアーの戦闘から違和感を感じていた。
ハチになった時、シャーリアとウィルの言葉は分からなかったのに、ヤヨイの言葉は理解することができた。
ギルドを結成してからもハチに変身すると、シャーリアの言葉が分からなくなるのに、ヤヨイの言葉は分かった。
「けど、なぜかハチになってもヤヨイの言葉は分かるんだ」
つまりヤヨイはモンスター又はそれに準ずるものではないかと推測される。
「ムゲン殿。モンスターと会話が分かるということであるが、一体どんな風に分かるのであるか？」
「何て言うか、その……テレパシーみたいな感じでモンスターの言葉が伝わってくるんだ」
俺の説明をヤヨイは「ふむ、ふむ」と興味深そうに頷きながら聞いていた。
「なるほど……小生はモンスターの感情までしか読み取ることが出来ぬのだが、ムゲン殿はすごいな。小生の言葉もテレパシーのように伝わってくるのであるか？」
「いや、ヤヨイの場合は耳に普通に言葉として届く。けど、ヤヨイ以外の人の言葉はノイズでも聞くみたいに全然理解できない音になるんだ」
「作用か。ムゲン殿の察するとおり、小生は普通の人間ではない」
「そ、それじゃ……」
「ムゲン殿！」
質問を続けようとするのをヤヨイが遮った。
「な、何だ？」
「申し訳ないが、今から二時間後に外で待ち合わせしても良いか？

その時に全てを話す」
「全てっていうのは？」
「小生の正体……そして、目的についても明かそう」
なんと、あれ程までには話そうとはしなかった目的について、話すつもりのようである。
「……いいんだな？」
「うむ」
もう覚悟はできているようだ。ヤヨイがテントから出た後、しばらくするとシャーリアが水浴びを終えたことを伝えてきた。
タオルと着替えを持って川へと向かった。ふと何気無く空を見上げると、たくさんの星々が宝石のように光り輝いているのが目に映った。
「人は死んだらお星様になるか……」
祖父がよく言っていた。両親が亡くなった時、お星様になって俺を見守ってくれると言って慰めてくれた。
勿論、信じているわけじゃないが、星を見ると両親、そして祖父のことを思い出してしまう。
川で水浴びをした後、服を着てテントへと戻ろうとした。
「ムゲン殿」
「ヤヨイ……」
ヤヨイがタオルとムラマサを持って、立っていた。強く吹き込む風がヤヨイの水色の髪をなびかせている。
「ムゲン殿。もう、水浴びを終えたであるか？」
「まぁな。今からテントに戻るつもりだ」
「そうか。予定より早いが、良かったら今話をしてもよいだろうか？」
「構わないが」
承諾すると、ヤヨイが川淵に近づいた。そして、何を思ったが、着物を脱ぎ出した。
「ちょ……ヤヨイ！　何してるんだ？」
ヤヨイから視線を逸らそうとした。
「ムゲン殿。小生の背中を見て欲しい」

俺はゆっくりとヤヨイの背中に視線を移す。
「こ、これは……！」
無駄肉が一つも付いていない美しいヤヨイの背中。しかし、驚くべきところはそこではない。
彼女の背中には青白い鱗がいくつもあった。
「驚いたか？　これが小生の正体である」
ヤヨイは着物を着て、俺に近づいてきた。
「ヤヨイ、お前は一体……」
「小生は……人間と人魚のハーフである」
「人間と人形のハーフ？」
「うむ。小生の生い立ちから話そう」

ムゲンとヤヨイ

小生はジャポニにある小さな村で生まれた。小生の父上殿は侍として国の為に働いていた。

母上殿は純粋な人魚であり、地上に遊びに来ていた時、父上殿と出会った。

父上殿に一目惚れしたらしく、足を生やす薬を飲み、代償として自分の声を犠牲にし、人間として父上殿と共に生きていくことを決めたようである。

小生は両親と幸せな日々を送っていた。しかし、そんな毎日は突然、終わりを迎える。

「邪魔するぞ」

夜遅くに赤髪の男が家に上がり込んできた。

「何者だ。お前は」

父上殿は愛刀『ムラマサ』を男に向ける。

「知る必要はない。お前らはここで死ぬのだから」

「二人とも逃げなさい。ここは俺が何とかする」

母上殿と小生はその場から逃げ出した。しかし、赤髪の男はすぐに小生達に追いついてきた。

「貴様……まさか父上殿を！」

「ああ、殺した。中々手強い相手だった。さぁ、大人しく……」

小生が赤髪の男に飛びかかろうとすると、母上殿は小生の襟首を掴み、赤髪の男とは反対側の方へと投げ飛ばした。

「母上殿！」

——逃げなさい！

母上殿は声を出せない。だが、そう言っているような気がした。

情けないが、小生は母上殿の言う通り、逃げることにした。

赤髪の男は小生を追ってはこなかった。家に戻ると、腹部に血を流し、ひどく衰えていた父上殿の死体が転がっていた。

「父上殿……」

小生はムラの人達にこの出来事を伝えた。すると、かつてバキアの城で働いていたことのある者が教えてくれたのである。
かつて王族に赤い髪の者がいたこと。その男は人魚について調べていたこと。
人魚の肉を喰らった者は不老不死の身が宿ると言われている。
おそらく赤髪の男の目的は母上殿であったのだろう。
それと、父の持つムラマサ。その刀は不老不死である人魚も殺すことができる。
あのムラマサは父上殿が摶ったものである。父上殿は侍として働く傍ら、刀職人としても名を馳せていた。
母上殿は結婚する時、父上殿に死ぬ時は一緒がいいと要望したそうである。母上殿の要望を叶えるために作られたのがあのムラマサであった。
だからこそ、モリア殿のお店でムラマサを見た時は本当に驚いた。
両親が殺されてからは知り合いの家で暮らすことになった。そこでの生活はそれなりに充実したものであったが、復讐心が消えことはなかった。
独学で魔法剣術を学び、魔法学校へと入学し、こうしてムゲン殿達と出会ったのである。

「これが今まで小生が隠していた真実である」
明かされる数々の衝撃的な事実に頭が追いついてきそうにない。
まずは一つ一つ整理しておきたいと思った。
「まず、ヤヨイの母さんは人魚……なんだな」
「うむ。そうである。小生と同じく背中に鱗がある」
「正直、鱗だけじゃまだ信じられないな。他に特徴とかないのか？」
「では、今から証拠をお見せする」
ヤヨイは懐から短刀を取り出す。そして、その短刀で自身の腕を深く斬りつけた。腕から多量の血が流れ出る。
「お、おい。何してるんだ！」
しかし、腕の傷は塞がり、瞬く間に治っていった。思い返せばヤヨ

イが授業やクエストで傷らしい傷を負ったのを見たことがない気がする。
　ヤヨイの実力が高いからだと勝手に思い込んでいたが、おそらく不死の力が作用していたからであろう。
「驚いたか？　ムゲン殿」
「かなりな」
「隠していてすまなかった。小生には人魚の血が流れている。これがどういう意味か分かるか？」
「ヤヨイにも不死の力が宿っているんだな？」
　ヤヨイが頷いた。そして、この事実を明かした意味を俺は理解する。
「小生の肉を喰らうといい。ムゲン殿が持つエキストラユニークスキルはモンスターの能力をコピーするのであろう？」
「俺に不死になれってことか……」
「不服であるか？　不死になることが」
「いや、確かに不死になれば寿命で死ぬことはない。けど……」
「やはり、不死になるのは気が進まぬか……」
　俺は死ぬこと自体、それほど恐れてはいない。
　元の世界で死を経験しているからだろうか。だが、死ねないというのはある意味で死ぬよりも遥かに怖い。
「そんなことは……って言っても、信じてくれないよな」
「確かに寿命で死ぬことはできなくなる。だが、死ぬことは可能である」
　ヤヨイがムラマサを抜いた。ムラマサで軽く腕を傷づける。先ほどとは違って、傷が治ることはなかった。
「死にたくなったらこのムラマサで自害できる。それでは不服か？」
　このまま突き進むか、不死の力を手にするかしばらくの間考えたが、俺は後者を選ぶことにした。
「いいだろう。ヤヨイ、お前の力貰うぞ！」
　ハチに変身する。そして、ヤヨイの背中に思いっきり齧り付いた。
「ぐ……！」

ヤヨイが痛そうな声を出す。ヤヨイの背中は少し苦くも甘い、薬のような不思議な味がした。
ヤヨイに伝える気はないが、今まで食べたどのモンスターの肉よりも美味しかった。
俺によって、かじり取られた背中の部分は不死の力によって、すぐさま再生した。
俺は人間の姿へと戻った。
「どうであるか？　ムゲン殿」
「何も変わった感じはしないが……」
モンスターから力を得る時、力が湧き上がるような感覚が起こるのだが、今回はそれがなかった。
「ちょっと、短刀を貸してくれるか？」
「うむ」
ヤヨイから短刀を借り、試しに腕を傷つけた。しかし、腕の傷は治らない。
「どうして不死にならぬのだろうか？」
ヤヨイが腑に落ちないといった表情で血が流れている俺の腕を見つめた。
「ヤヨイがハーフだからかもしれないな。純粋な人魚じゃなければ意味がないのかもしれん」
「そ、そんな……このままではムゲン殿は」
「その前に決着をつけるさ」
ヤヨイは着物を着ると、ゆっくりと俺に近づき、俺の手を掴んできた。
「ムゲン殿」
「な、なんだ……？」
「小生は……ムゲン殿に生きて欲しいと思っている」
「それは嬉しいが……」
「母上殿が言っていた。人魚は母上殿以外にも存在し、地上で暮らしているものもいると。小生達の戦いが終わったら人魚を探しに行こうぞ」

「そりゃありがたい話だが、探す当てはあるのか？」
「赤髪の男は何らかの方法で人魚である母上殿を見つけたのである。だから、奴から人魚を見つける方法を聞き出そうぞ」
「確かにそいつなら人魚の場所を知っているのかもしれないな」
「それと教えて欲しい。ムゲン殿の寿命は後、どれくらいであるか？」
「長くて半年くらい……下手すれば三ヶ月も持たないかもしれない」
　残りの寿命を教えると、ヤヨイの瞳から涙が流れ始めた。
「お、おい……何泣いてるんだ？」
「いや……ムゲン殿は死ぬのが怖くないのか？」
　元の世界で死んだ時のことを思い浮かべた。あの時の俺は死ぬことに対して、どう思っていたのだろうか。
　多分、『この辛い世界からおさらばできる』と思っていたのだろう。
「怖くないと言えば嘘になるな。だが、それなりの覚悟はできているつもりだ」
「本気のようであるな。その上で伝えておく。レッドフレイムドラゴンとの戦いの時は、小生の不死の力を利用した作戦を立てて欲しい」
「いいのかそれ……つまり、その」
「シャーリア殿には明日、全てを話す」
「分かった。ヤヨイがそのつもりならそれでいい」
「うむ。では、ムゲン殿は明日に備えてゆっくり休むがいい。小生は水浴びをする」
「あ、あぁ……」
　すっかり忘れていたが、ヤヨイは水浴びに来たんだったな。
「ムゲン殿。良かったら一緒に浴びるであるか？」
「……遠慮しとく」

赤きドラゴン

俺はテントに戻り、深い眠りについた。次の日、外で二人と合流した。

「おはよう二人とも」

「おはようムゲン君」

ヤヨイの方に視線を向けると、彼女は石の上に座っており、無表情でムラマサを握りしめていた。

小さな声でヤヨイに話しかける。

「ヤヨイ。シャーリアにはもう話したのか？」

ヤヨイは首を横に振った。ヤヨイは「これから話す」と返事をすると、石の上から勢いよく立ち上がった。

「シャーリア殿。聞いて欲しいことがある。実は……」

「人間と人魚のハーフなんでしょ。ヤヨイ」

「シャーリア……昨日、もしかして聞いていたのか？」

「まぁね」

「ま、全く気がつかなかった。小生に気配を掴ませぬとは、すごいなシャーリア殿」

「私だって成長しているのよ。それと、ムゲン君のことも聞いたわ。寿命が近づいてきてるんですって？」

寿命のこともバッチリ聞かれてしまっていた。シャーリアには教えない方がいいと思っていたが、もう誤魔化しようがない。

「すまない。隠していて」

「うん、二人ともちょっと来てくれる？」

シャーリアが微笑みながら手招きしてきた。目が全く笑っておらず、とても怖い。

俺達はゆっくりとシャーリアに近づいた。

「えい！」

「いた！」「あた！」

シャーリアが俺とヤヨイにデコピンをしてきた。結構痛い。

「私に隠れて二人だけひどいよ！　けど、私も王族ってことを隠して

いたからこれでチャラね。それとヤヨイ！」
「な、何であるか？」
「レッドフレイムドラゴンの討伐が終わったら、一緒にお風呂に入るわよ！　いいわね！」
「う、うむ！」
　シャーリア……一昨日、ヤヨイが一緒にお風呂に入ってくれないことを嘆いていたがそんなに一緒に入りたかったのか。
「ムゲン殿も一緒にどうであるか？」
「入らねぇよ！」
　ヤヨイは何で俺を誘ってくるんだ。冗談なのか本気なのかよく分からない。
「え……二人とも、もうそこまでいっちゃったの？」
　シャーリアがドン引きしていた。ヤヨイの言葉を信じてしまっているようである。
「違う！　断じて違うからな！」
　シャーリアに俺の身の潔白を信じてもらうのに五分ほど時間が掛かった。

「それじゃ、二人とも改めて作戦会議をするぞ。前の立てた作戦のことは覚えているな？」
「うむ。まずは翼を狙うであったな」
　レッドフレイムドラゴンが逃亡できないようにする。これが必須条件である。そのため、一番に狙うのは首や頭でもなく、翼である。
「そうだ。前にも説明したが、ドラゴンは翼とアギの二つを使って飛行する。どちらか一方を崩せれば遠くまで逃げることはできない」
　ドラゴンの体は他のモンスターと比較しても大きい。翼だけでは十分な飛行をすることができないと言われている。翼と全身のアギをコントロールすることで飛行が可能となる。
「承知した。小生が必ずドラゴンの翼を切り裂いてみせる」
「私も全力でサポートするから任せておいて！」
　シャーリアの役割は遠距離からレッドフレイムドラゴンを攻撃す

ることである。
　レッドフレイムドラゴン相手にシャーリアの魔法がどれ程効くか分からないが、少しでも奴の体力を消費させることができれば戦況はかなり有利になる。
「ヤヨイ、聞いておきたいことがある」
「何であるか？」
　昨日、ヤヨイが人魚だとしってから、一つの疑問が生じていた。
「ヤヨイ、お前は無限に魔法を使えるんじゃないのか？」
　寿命はアギに変換することで、魔法を使うことができる。不死の特性を持つヤヨイなら魔法を上限なく使えるのでないかと考えていた。
「残念であるがそれは無理である。小生もかつてムゲン殿と同じことを考え、試してみた。しかし、体内のアギが無くなると全く魔法が使えなかった」
　俺の推測は外れてしまった。だとすれば、ヤヨイの母を喰らった王もアギの上限が存在するかもしれない。
「そうか、分かった」
「すまぬな。期待に添えず」
「いや、気にしないでくれ。ヤヨイが不死であるだけで、戦闘がかなり有利になる。それより、二人とも。レッドフレイムドラゴンの気配は感じているか？」
「うむ。どうやらこの近くにいるな」
「す、すごいアギね……ちょっと怖いかも」
　シャーリアの気持ちも理解できる。シャープスネイルベアーと遭遇した時以上の恐怖心を感じる。
「恐れることは何もない。三人なら必ず倒すことができる」
「そうね！　必ず全員生きて戻りましょう！」
　勾配の強い坂を登っていくと、広く地面が平らな場所へと辿り着いた。
「ここ、山頂かしら？」
「そのようだな。あれがレッドフレイムドラゴンだろう」
　俺はスフィンクスのように座っているレッドフレイムドラゴンを

指差した、
「二人とも、ゆっくりと近づいこうぞ。下手に刺激してはならぬ」
足音を立てないように注意しながらレッドフレイムドラゴンに近づいた。奴は目を閉じており、『グオー』と大きないびきをかいて眠っている。
「寝ているようね。これってラッキーなのかしら？」
確かにチャンスと言ってもいいだろう。今のうちに俺はレッドフレイムドラゴンを観察することにした。
全身は硬そうな皮膚で覆われており、手足に生えている鋭い爪は鋼鉄をも容易く斬り裂きそうである。
首は太長く、生半可な攻撃では通用しそうもない。
ハチになって奴の肉を喰らいたいが、果たしてこんな硬そうな皮膚、齧りとることができるだろうか。最も柔らかそうな部位である目も今は閉じている。
「ムゲン殿、どこから攻撃するであるか？　翼かそれとも首か？」
多分、俺達が全力で攻撃を叩き込んでもレッドフレイムドラゴンを倒しきることができないだろう。そう考えると、やはり翼か……いや。
「ヤヨイ。尻尾を狙ってくれ。全力で頼む。出来れば一撃で切り落として欲しい」
「尻尾か。承知した」
「ちょっと、ムゲン君！　大丈夫なの？」
シャーリアは俺の指示に不安を抱いているようだ。だが俺は尻尾を狙うのが最善な策であると確信している。
「問題ない。シャーリアは俺達から離れた場所に移動してくれ」
「わ、分かったわ！　信じるわよ」
シャーリアは俺達から離れていった。ヤヨイがムラマサを抜き、集中力を高める。
「水流斬！」
ヤヨイは見事にレッドフレイムドラゴンの尻尾を斬り落とすのに成功した。それと同時に奴が目を覚ます。

すかさずハチに変身した俺は奴の目に針を打ち込んだ。
「グワオオオオ！」
激しい咆哮と共に奴が勢いよく翼を羽ばたかせる。凄まじい風が俺たちを襲った。痺れ作用のある毒を打ち込んだのだが、あまり効いていないようだ。
「シャーリア！　魔法を打ち込んでくれ！」
「分かったわ！　フレイムバースト！　エクスプロード！　フレイムバースト！」
シャーリアが連続で上位魔法を繰り出す。奴はたちまち爆炎に飲み込まれた。
「や、やったかしら？」
上位魔法を数発当てただけで倒せるほど、レッドフレイムドラゴンは弱くない。案の定、奴は翼を羽ばたかせ、宙に舞っていった。
「ねぇ、逃げ切る気じゃない？」
「違う、これは……」
奴は腕を売り上げ、鋭い爪で俺とヤヨイを引っ掻こうとした。
「避けろ！」
アクセルを使って、奴の攻撃を避けた。奴が引っ掻いた地面は深く抉れていた。
「こんなの喰らったらお陀仏だな……」
「ムゲン殿。ここは小生に任せてくれ。作戦通り奴の翼を斬り落とすこととしよう」
「ヤヨイ！　あいつ、かなり興奮してるけど危険じゃない？」
シャーリアが心配そうにヤヨイに呼び掛けた。確かに今、奴に近づくのは無謀と言えるかもしれない。
「心配無用である。小生は不死であるぞ」
「それはそうだけど……」
「では、行ってくる！」
ヤヨイは勢いよくレッドフレイムドラゴンに飛びかかる。
魔法剣術を使って翼を斬ろうとするも、奴は宙を舞っている為、刀が届かない。

「おのれ、ハイドロウェーブ！」
ヤヨイが魔法で津波を発生させたが、レッドフレイムドラゴンの口から放たれる炎によって、蒸発してしまった。
「あいつ、相変わらず闇雲に飛び掛かるな」
いつもそうだった。ヤヨイは自分より強い相手でも果敢に挑む。そんなに打ちのめされても決して諦めようとはしなかった。
「ヤヨイのこと、コントロールするのがムゲン君の役目でしょ？」
「……だな」
俺はハチに変身した。レッドフレイムゴラゴンの意識がヤヨイに向いているため、接近することができた。
俺は奴の尻尾の断面に齧りつく。これでレッドフレイムゴラゴンの能力をコピーすることに成功した。
モンスターの肉は生きている状態で捕食しなければ能力をコピーすることができない。
さっきヤヨイが斬った尻尾の肉や死んだ状態の肉を食べても意味がないのである。
「き、貴様……何だその姿は？」
レッドフレイムドラゴンはハチになった俺の姿を見て、ひどく動揺していた。
「見ての通りハチだよ」
奴が吐き出した炎をギリギリのところで避けていき、首筋に針を打ち込むが、皮膚が硬く、深くまで突き刺さらない。
「ええい、鬱陶しい！」
レッドフレイムドラゴンは首を大きく振った。
「うわ！」
弾き飛ばされ、危うく地面に身体を打ち付けそうになった。
「ムゲン殿。大丈夫であるか？」
「へ、平気だ……」
「言葉は分からぬが、大丈夫そうであるな。ムゲン殿、奴を地面に引きずり下ろして欲しい。頼めるか？」
「任せておけ！」

俺はレッドフレイムドラゴンに向かって、一直線に突き進んだ。

決着

「愚か者め！　これで終わりだ！」
奴は巨大な炎を放つ。シャーリアの上位魔法よりも遥かに凄まじい炎である。
「それはどうかな！」
俺も奴の同程度の威力の炎を放った。早速、奴の能力を早速使わせてもらうことにした。
炎と炎がぶつかり合い、周囲の温度が急上昇していく。
「シャーリア殿！　ムゲン殿のサポートを頼む！」
シャーリアはレッドフレイムドラゴンの頭上に炎を下ろした。
不意を突かれたことで、奴は口を閉じてしまい、俺が放った炎に身を包み込む。
「あ、熱い！」
「おっと、天下のレッドフレイムドラゴン様が俺の炎なんかで熱がるのか？」
炎が沈下するのを確認すると、奴の頭上に移動し、無属性の魔法を使用するべく、体内のアギを調整する。
「エイフォブルグラビティ！」
「な、何だ？　急に身体が重く……」
エイフォブルグラビティは相手に重力を掛ける魔法であり、上位魔法の一種である。
在学中は上位魔法を身につけることができない俺であったが、一人で活動していた時に習得した。
重力を掛けられたことにより、奴はどんどん地面に近づいていった。
「ムゲン殿……協力感謝致すぞ！」
ヤヨイは高らかにジャンプし、空中でバク転を行う。ムラマサに纏う水流はヤヨイが宙で回る度、勢いが増していく。
「水転斬！」
ヤヨイはレッドフレイムドラゴンの片翼を斬り落とした。

「ぐわぁ！　わ、私の翼が……もう許さんぞ、貴様ら！」
奴は闇雲に炎を吐き出した。接近するのが難しそうだ。俺は二人とコミュニケーションを取るため、人間の姿へと戻った。
「ヤヨイ、さっきの技。もう一回できるか？」
「うむ。しかし、少々時間が欲しい。アギを使いすぎた」
ヤヨイにアギを回復してもらうための時間が必要か。俺一人で時間稼ぎをするのは少々厳しいな。
「シャーリアは？」
「私は平気。さっきポーションを飲んでおいたから！」
「よし！　俺が奴の気を引きつける。シャーリアは奴の首を狙ってくれ」
「分かったわ！」
作戦の最終段階。それは奴の急所を狙うことである。ヤヨイでも一撃でレッドフレイムドラゴンの首を斬り落とすのは厳しいだろう。
俺とシャーリアである程度、奴の首にダメージを蓄積させておく必要がある。
ハチになり、レッドフレイムドラゴンの動向を探る。奴は相当頭に血が上っている。少し引っ掛けてやれば、あっさりと食いつくであろう。能力で自分の分身を一体、作り出した。
俺の分身をレッドフレイムドラゴンに接近させた。以前、俺が一人で活動していた頃、攻撃する度、分身を行うモンスターがいた。
その時は結局倒した方が分からず、能力をコピーして逃亡した。
「また貴様か……いい加減、死ぬがよい！」
分身は炎を浴び、消滅した。次々と分身を作り出していく。分身一体一体の強さはどれもオリジナルである俺と同じ強さであるが強力な能力故、寿命を大きく消費する。
俺の分身達は一斉にレッドフレイムドラゴンに向かっていった。
「な、何だこれは……」
迫り来る分身に奴は困惑しているようであった。分身に気を取られている隙にオリジナルの俺は背後から接近した。
「何匹来ようと全て焼き払ってくれるわ！」

その言葉通り、奴は強烈な炎で次々と分身を焼き払っていった。本体である俺は奴の頭の後ろにしがみ付き、呪文を唱える。
「エイフォブルグラビティ」
魔法を発動させると、奴は頭を自分に伏せた。これで少しはシャーリアも攻撃しやすくなるだろう。
「き、貴様……いつのまに！」
「どうだ？　自由に頭を動かせないだろう」
エイフォブルグラビティは重力を掛ける範囲を絞ることでより強い重力を掛けることができる。
シャーリアが炎の矢を奴の首筋に飛ばす。しかし、皮膚が少し焦げただけであまり効いていないようであった。
レッドフレイムドラゴンは俺が掛けている重力を押しのけ、頭を上げようとしてきた。
「ヤヨイ！　シャーリアに伝えてくれ！　もっと攻撃しろって」
必死に訴えかけたが果たしてヤヨイに伝わるだろうか。
「ムゲン殿……うむ！　シャーリア殿、もっと激しい攻撃を行うのだ！」
シャーリアの言葉は分からないが俺が巻き添えを食らうのを心配しているようであった。
だが、そんなことで攻撃を躊躇されても困る。
「俺のことなら気にするな！」
「シャーリア殿。ムゲン殿なら心配ない」
シャーリアは覚悟を決めたのか、連続で凄まじい炎の魔法をレッドフレイムドラゴンにぶつける。俺にも襲いかかるが必死で耐えた。
「お、おのれ！　この私が人間ごときに負けてたまるか！」
レッドフレイムドラゴンは大きく顔を振り回す。俺は必死に六本足を使って奴の頭にしがみ付く。
「離れろ、この愚かな人間め！」
「断る！　ヤヨイ、まだか？」
「すまぬ。随分と待たせてしまった」
ヤヨイは疾走すると、大きく飛び上がった。翼を斬った時よりも高

く飛び、水流を纏わせたムラマサを首に振り落とそうと狙いを定める。
俺はヤヨイが降りてくるのを見計らい、奴の頭から離れることにした。
「これで終わりだ！　水転斬！」
『ガギィン』という、金属と金属がぶつかり合うような音が鼓膜に鳴り響く。
ムラマサは奴の首筋の半分程まで通っていたが、首を斬り落とそうまでには至らない。
「おのれ……なんという硬い首であるか。これでは斬り落とせぬ」
珍しくヤヨイが弱音を吐いた。なんとかしないと……
「いい加減にしろよ、人間ども！」
レッドフレイムドラゴンが炎を吐き出しながらブンブン首を振り回す。
ヤヨイは遠心力で吹っ飛ばされそうなったが、ムラマサを必死に握りしめて耐えていた。
「しつこいドラゴンだな、オイ！」
最初に刺した目とは逆の目に針を刺す。最初に刺した時よりも更に強力な痺れ作用のある毒。弱ってきている今なら効くかもしれない。
「な、なんだ……急に身体が」
案の定、奴は動きを鈍らせた。よし、あともう一息だ。
「ムゲン殿！　小生ごと重力を掛けるのだ」
「だ、だが……」
「心配はいらぬ。小生は不死である。思いっきりやるがよい！」
レッドフレイムドラゴンの首の上に乗り、変身を解除した。ヤヨイの背中にそっと手を置く。
「いくぞ、ヤヨイ」
「うむ」
「エイフォブルグラビティ！」
ありったけの重力をヤヨイに掛ける。ムラマサの刃は徐々に奴の

首に沈んでいく。
「うわあああ！　やめろ！」
　変身を解除した為、奴の言葉が分からなくなったはずだが、そう訴えているように感じた。
「断る。いけ、ヤヨイ！」
「うむ。水転斬！」
　ヤヨイは最後の力を振り絞ってムラマサを振り切ろうとした。
「「落ちろーーーー！」」
　三人同時に叫んだ。ついに奴の首が地面に落ち、フラフラと歩いた数歩歩いた後、バタンと倒れ込んだ。
「や、やったわ！　すごいわ、二人とも！」
　シャーリアが興奮した様子で駆け寄ってきた。俺はレッドフレイムドラゴンから降り、地面に仰向けなって倒れ込んでいるヤヨイの様子を確認することにした。
「大丈夫か？　ヤヨイ」
「平気である。しかし、さすがに無茶をしすぎたようである。肩を貸して欲しい」
「分かった」
　ヤヨイに肩を貸そうとした時、自分の身体の異変に気がついた。
「あれ？」
　大量に吐血し、視界がぐにゃぐにゃと歪んだ。足元がふらつき、自分の意思とは違う方向に向かっていく。
「ちょっとムゲン君!?」
「ムゲン殿！」
　ヤヨイが立ち上がり、俺に手を差し向けた。
「や、ヤヨイ……」
　ヤヨイの手を掴もうとするも、その前に意識が遠のいていった。

新たなる力

「はぁ……」

職場の近くにある公園のベンチで、俺は佇んでいた。

「仕事辞めてぇな……」

この俺、渋谷和也（しぶたにかずや）はこれまで平凡な人生を歩んできた。

そこそこの大学に進学し、それなりに名の知れた企業に入社した。

強いて変わったこととは言えば……二十八年間、一度も彼女が出来たことがないことくらいだろうか。

仕事は営業職であるが、ノルマを達成することができず、上司に怒られてばかりの毎日である。

「父さんと母さん、元気かな……」

ふと両親の顔が思い浮かんだ。俺の家は代々続く養蜂業を営んでおり、大学卒業後は家業を継ぐことを期待されていた。

しかし、俺は反発した。

「誰が『こんな仕事』継ぐかよ！」

両親にそう言い残して、半ば強引に地元を離れて東京で就職した。

楽な仕事なんてない。六年間働いてようやく気がついた。きっと両親は俺を養うために色んなことを我慢して仕事に励んできたのだろう。

「帰ったらちゃんと謝らないとな……」

ふと、視界に一匹の鉢が入り込んできた。実家が養蜂業のため、雀蜂の一種であることが分かった。

「珍しいな、こんなところに……」

刺されたらまずいと思い、この場から離れようと思った。

「っつ！」

急に右腕に猛烈な痛みが走った。視界に入ってきた蜂とは別の雀蜂に刺されてしまったようである。

「しまった……」

サーッと血の気が引いていき、地面に倒れた。上手く身体を動かせ

ない。助けを呼ぼうにも周囲に人が見当たらない。
追い討ちを掛けるように雀蜂は次々と他の箇所にも針を刺してきた。
「死ぬのか、俺……だけど」
まぁ、いいかそんな楽しい人生じゃなかったし。
こうして、元の世界での人生は幕を終えた。

死んだ後、魔法が使えるこの世界に転生し、今日までムゲン＝アベイルとして生きてきた。
冒険者として凄まじい才能を持つ両親や祖父を尊敬すると共に、自分には到底辿り着けないという思いも少なからずあった。
卒業したら、身の丈にあった仕事に就いて生きていこうと考えていた。
しかし、元の世界での死をキッカケに俺は確かに望んでいたのである。
生きる意味を。生きる目的を。
俺は一体、何のためにこの世界に生まれてきたのか。それが分かるまではまだ死にたくないと思っていた。
そうだ……俺にはまだやるべきことがある。まだ生きたい。
「ムゲン殿、目を覚ますのだ！」
ヤヨイの声が聞こえ、ゆっくりと目を開けた。ヤヨイが俺の顔を覗き込んでいる。どうやらヤヨイの膝の上で気を失っていたようであった。
「大丈夫？　ムゲン君」
「すまない心配させてしまって。もう平気だ」
起き上がると、自分の身体の異変に気がついた。
「寿命が……元に戻ってる？」
驚くべきことに残り僅かであった俺の寿命はシャープスネイルベアーと戦う前と同じ状態に戻っていた。
「何!?　ムゲン殿、本当か？」
「俺の勘違いじゃなければだが……」

「良かったじゃない！　けど、どうして急に？」
「推測だが……今になってヤヨイの不死の力をコピー出来たのかもしれないな」
　あくまで予想の範囲内であるため、また寿命が尽きた時どうなるのか検討もつかない。
　復活するのか、はたまた死を迎えるのか。
　だが、もしも前者なら……俺は無限に魔法を使うことができる。
「二人とも、小生達は戦闘でボロボロである。早いところ山を降りようぞ」
「そうね！」
「ん？　なんだあれ？」
　ふと、遠くから人影が見えた。よく目を凝らすと、白い体毛で覆われたゴリラのようなモンスターが近づいてきた。
「あ、あれはシルバーイエティ……」
　シャーリアがモンスターの名前を呟く。よりによって、このタイミングで出会うとはな……
　シルバーイエティはＡ級モンスターに該当し、人を見つけると見境なく襲いかかる凶暴なモンスターである。
「どうしよう……私、もうほとんどアギが残ってないわ。ポーションも全部飲んじゃったし」
　無理もない。シャーリアは上位魔法を何発も繰り出していた。
「では、ここは小生が」
　ヤヨイは地面に落ちているムラマサを拾い上げた。
「ヤヨイ、無茶しないで！」
「せぃあ！」
　シャーリアが呼び止めるも、ヤヨイは聞く耳を持たず、シルバーイエティに斬り掛かった。
「うがぁ！」
　シルバーイエティは片手で刃を掴んだ。俺から見てもヤヨイの動きは明らかに鈍っていた。
「しまった……」

奴は刃を掴む手の力を強める。すると、『バキッ』という鈍い音と共に、ムラマサの刃が折れてしまった。
「そんな……む、ムラマサが」
ヤヨイは身体を震わせて、折れたムラマサを見つめた。そんなヤヨイに対し、シルバーイエティは容赦無く鉄拳を入れた。
「ヤヨイ！　この……ファイアボール！」
シャーリアがファイアボールを当てたことで奴の気が俺達に向いた。奴はゆっくりと近づいてきた。
「ひ……ムゲン君。私が囮になるから、ヤヨイを助けに行って」
優しいな、シャーリアは。俺は彼女の言葉を無視し、シルバーイエティに近づいた。
「よう、ゴリラさん」
モンスターにしか分からない発音で奴に話し掛けた。
「お前……わえの言葉が分かるのか？」
死の淵から目覚めた後、人間の姿のままでも奴の言葉が分かった。そして、何より……不思議なくらい力が湧き出てくる。まるで生まれ変わったみたいだ。
「まぁな。それで一つお願いがあるんだが、この場は見逃してくれないか？」
「ダメだね。わえは人間を殺すのが好きなんだ。お前たちは絶対逃がさん！」
巨大な体躯が俺に迫り来る。本来であれば、恐怖を感じるはずだが、高揚感を感じていた。
肩に刺していた刀を抜き、奴の太い腕を魔法剣術で斬り落とす。
「あれ？」
奴は地面に落ちている自分の腕を見て、愕然としていた。
「ハチになるまでもないな」
人間の姿のまま自分の爪を鋭く伸ばし、奴の首筋を引っ掻いた。人間の姿のままでもモンスターの能力を使えるようになっていた。
「ぎゃあああ！　お、お前！」
奴は残った片腕で俺に殴ろうした。

「遅い」
俺の顔面に拳が届く前にもう片方の腕も斬り落とした。奴の首を引っ掻く際、爪から痺れ作用のある毒を注入しておいた。
「ひ……！」
恐怖で表情が引きつっていた。腰に付けている魔弾銃を取り出し、ありったけのアギを込める。
「お、覚えてろ！」
その場から逃げようとする奴の頭部に照準を合わせ、引き金を引く。銃口から発砲される魔力の弾は絶大で、奴の頭をあっさりと吹っ飛ばした。
「立てるか？　ヤヨイ」
地面に倒れているヤヨイに手を伸ばす。
「うむ。ムゲン殿、恐ろしく強いな」
ヤヨイは俺の手を掴むと、立ち上がり、折れてしまったムラマサを虚しそうに眺めた。
「父上殿が作ったムラマサが……」
これは俺達にとっても痛手である。ムラマサが無ければ不死の力を持つ王を倒す術はない。
「ヤヨイ、それちょっと貸してくれるかしら？」
「シャーリア……まさか直せるのか？」
シャーリアが王族魔法を使えるようになっているのなら、もしかしたら直すことができるかもしれない。
しかし、シャーリアにはもうほとんどアギが残っていない。
「今ならなんだか出来そうな気がするわ」
シャーリアはムラマサを受け取ると、目を瞑り、王族魔法の発動を試みた。ムラマサが青白く発光すると、折れていたはずのムラマサは何事も無かったかのように元に戻っていた。いや、お店で見つけた状態よりも綺麗になっているように見える。
「すごい……けど、大丈夫なのか？　アギが少ない状態で魔法を使って。まさか、寿命を消費したんじゃ……」
「うん、何ともないみたい。寿命どころかアギも全く減った様子はな

いわ」
　何はともあれ、シャーリアのおかげで王を倒すことができる可能性が残った。
「シャーリア殿……ムラマサを直してくれたこと、誠に感謝致す！」
　ヤヨイは深々と頭を下げた。
「ちょっとやめてよヤヨイ。大事な刀なんでしょ、それ」
「うむ」
「それだけじゃない。ムラマサが無ければ不死の力を持つ王には敵わない。俺からもお礼を言うよシャーリア。本当にありがとう」
「何はともあれ、みんな無事で良かったわ。今度こそ山を降りましょうか」
　幸いにも下山中に強いモンスターと遭遇することはなかった。もっとも、今の俺であれば一人でもＡ級モンスターを倒せるであろうが。
　山の麓に到着すると、バキアの街へと戻る馬車へと乗った。
「ムゲン殿。目を覚ますまで何かあったのであるか？　さっきのモンスターを倒した時の力、まるで別人のようであったが」
　別人のようか……確かに生まれ変わったかのように力が溢れてくる。
「どうしてあんな夢を見たんだろうな」
「ムゲン殿？」
「すまない。別に何ともないよ。気にしないでくれ」
「そうか、なら良いが……」
「シャーリア。さっきの王族魔法、もう一度できるか？」
「うーん……今はちょっと無理そうね」
「そうか。アギが回復したらもう一度試してみて欲しい」
「うん、分かったわ」
　俺はシャーリアの王族魔法が王の能力の全貌を知る手掛かりになるかもしれないと考えた。
　バキアの街に戻った俺たちはギルドハウスで手続きを済ませることにした。レッドフレイムドラゴンの討伐実績が記載された冒険者

カードを受付員に渡す。
「こちらが報酬の一千万ロルと王国軍加入申込書になります」
「おぉ、すごい札束の量であるな」
　ヤヨイは大金にえらく感動しているようであった。確かにこんな大金、元の世界だって目にしたことはない。
「ちょっと、ヤヨイ！　私達の目的はお金じゃなくて王国軍への加入でしょ？」
「う、うむ……そうであったな！」
「二人とも今日はゆっくりと休むといい」
「うん。そうするわ」
「ムゲン殿はどうするのであるか？」
「今日は帰って寝る。明日、ちょっと調べておきたいことがあってな」
「そうであるか。承知した」
「それじゃ、ヤヨイ。一緒に銭湯に行くわよ！」
「うむ、そうであるな！」
　楽しそうな二人の背中を眺めた。もう少しだ。後、もう少しで王と戦える。
「見ていてくれよ、じいさん」

協力依頼

「王国軍に加入するアイン＝ダハ。これからバキアの為に忠誠を尽くすように」

現在、バキア城の広大な王室にて、俺は加入式に参加していた。金色に輝く王冠を被り、端正な顔立ちをした見た目二十歳くらいの男が黙々と演説している。

この男こそ、現在のバキアの王、『ヴァラスハッド＝バキア』である。

王のアギの量を見極めようとしていた俺であったが、無意味であった。

俺はどんな強いモンスターや冒険者であっても、ある程度アギの量は推定することができる。

だが、王の場合は全くわからない。

「では、これから王国軍の証である腕章を授ける。アイン＝ダハよ。前に来るように」

「はい」

王に呼ばれた俺は腕章を受け取りにゆっくりと奴との距離を縮めていく。前にも言ったが、俺は名前を変えている。

現在、この王室には複数人の護衛がいる。俺よりも遥かに実力が高いと推定される。

王の暗殺を企てていた時から、護衛との戦闘は極力避けたいと考えていた。

その為の布石は既に打ってある。

遡ること約半年前。レッドフレイムドラゴンを倒した次の日、俺はバキア魔法学校へと足を運んだ。

オリモカ先生のところに報告に行くついでに聞いておきたいことがあった。

「失礼します」

職員室の中を見渡したが、オリモカ先生の姿が見当たらなかった。

「おお、ムゲン＝アベイルではないか？」

俺に気づいたガルド先生が話しかけてきた。ガルド先生は訝しんだ様子で俺のことをまじまじと見つめてきた。
「ふむ……そんなに経ってないのに随分と腕を上げたようだな。今ならワシとも互角に戦えるかもしれんな。どうだ、ちょっと戦ってくか？」
「遠慮しておきます。オリモカ先生はどこにいますか？」
「オリモカ先生なら今授業中だ。今期の教え子はお前らと違って骨の奴がいなくてワシも退屈しとったとこだ。どうだ？　ただ待っているのも暇だろう。ワシとやっていかないか？」
ガルド先生はとても戦いたそうである。これは断っても無駄だろうな。
「分かりました。どこでやりますか？」
「では、道場でやるとするか」
道場に向かい、中に足を踏み入れると久々で懐かしい気持ちになった。ここで何度も何度もガルド先生に投げ飛ばされたものである。
だが今ならガルド先生にも勝てるかもしれない。
「言い忘れていたが勝負は魔法なしの純粋な格闘戦。どちらかが気絶するか、参ったと言うまで勝負は継続する。準備は良いか？　ムゲン＝アベイルよ」
「はい」
「よし、ではどこからでも掛かってくるがいい」
側から見ると隙がない。その為、自らの手で隙を作りに行く。
一歩でガルド先生の懐に入り、右のスネに蹴りを入れる。
「ッツ！」
効いている。反撃する暇を与えない為、腹部に鉄拳を入れた。
「この！」
ガルド先生が攻撃してくるのを予測し、大きく飛び上がり背後に回り込み、回し蹴りをした。『ボギッ』という鈍い音がし、左腕をへし折ることに成功するのを確信する。
「ガルド先生。降参する気になりましたか？」
ガルド先生は折れた左腕を摩っていた。骨折程度の負傷であれば、

治癒魔法で治すことができる。
「恐れ入ったぞムゲン＝アベイルよ。まさかこの短期間でここまで腕を上げているとは思わなかった。お前に一体何があったんだ？」
「何もありませんよ。ただ……成し遂げたい目標が出来たんです」
「そうか。では、ここからは全力を出すがよいな？」
「お願いします」
場の空気が豹変した。これまで受けた授業でも感じたことのない圧力をひしひしと肌で感じる。
だが、王と戦うのならこれしきで臆してはならない。
「消えた？」
思わずそう錯覚してしまう程の凄まじい移動速度。危険を察知した俺は反射的に後ろに飛んだ。
「ぐ……！」
腹部に近距離で石を投げつけられたかのような痛みを感じた。まともに攻撃を受けていたら間違いなく内臓は損傷していたことだろう。
「ちっ……避けられたか」
ガルド先生は右腕で殴りかかってきた。なんとか避けると、『メキッ』という音が聞こえた。
俺の背後は壁であり、大きな穴が空いていた。
「こりゃ、マジだな……」
俺はレッドフレイムドラゴンの戦闘時のヤヨイの動きを思い浮かべた。
ガルド先生が放つ蹴りをジャンプで躱し、空中で何度もバク転を行う。
ガルド先生の脳天目掛けて回転蹴りをした。しかし、ガルド先生はそれを右腕で防ぐ。
「中々良い蹴りじゃないか」
左腕を折った時よりも強く蹴ったはずだが、右腕を骨折するまでには至らなかった。
「だが甘いな。左腕が使えたら終わっていたぞ」

確かに、左腕を骨折させていなかったら間違いなくカウンターを喰らっていたことだろう。
「成し遂げたい目標があるのだろう？　もっと殺す気で来るがよい」
そうだ思い出せ。祖父が殺されていた時の様子を。王が憎くて憎くて仕方がない。
「そうだ……その目だ」
それから三十分近く戦闘を続けた。お互い全力を出して戦った為、道場がボロボロになった。
「うあああああ！」
ガルド先生を組み倒すことに成功し、関節技を掛けた。ガルド先生の右腕から『ボギッ』という音がなる。
「ぐっ……」
よし、これで両腕を使えなくした。さらにガルド先生の両足の骨を蹴りで砕き、歩けないようにした。
「こ、こうさ……」
最後に胸にもう一発ぶちこんでしまいにするか。
「そこまでだ」
突然、現れたオリモカ先生に呼び止められた。
「お、おお……オリモカ先生。助かった」
「全く二人とも暴れまくって……それとムゲン。私が止めてなかったらどうするつもりだったんだ？」
確かに俺はガルド先生のことを本気で殺すつもりでいた。自分の行動を思い返すと、動悸が高まった。
「お、俺は……」
「オリモカ先生。勝負を申し込んだのはワシの方です。どうか余り責めないで上げてください」
ガルド先生は起き上がると俺の肩にそっと手を乗せてきた。
「ムゲンよ。さっきの気持ちを忘れずにな」
ガルド先生は道場を後にした。オリモカ先生は困ったように緑色の髪を掻き分けた。
「全くあの人は……それでムゲン。私に訊きたいことがあったんだろ

う」
「はい、その……」
「あー、まぁ待て。ここじゃなんだし場所を変えよう。応接室に来てくれるか？」
「分かりました」
応接室は職員室に向かい側にあると記憶しているが、俺もほとんど入ったことがなかった。
応接室の中には机を挟んで大きなソファーが二つ置いてあった。俺のその内の一つに座り、オリモカ先生が来るのを待つことにした。
「待たせて悪かったな」
オリモカ先生が部屋に入ってきた。ティーカップが二つ宙に浮いている。
「粗茶だが良かったら飲んでくれ」
魔法を使ってティーカップをテーブルの上に置く。
「ありがとうございます」
粗茶という割には随分と香りが良いと思った。一口飲んでみたが普通に美味しい。
オリモカ先生は俺と向かい合わせになるように座ると、じっと俺のことを覗き込んできた。
「な、何ですか？」
「随分とアギの量が増えたみたいだな」
オリモカ先生の言う通り、数々のモンスターの肉を喰らってきた影響で俺のアギの量は卒業した時よりも倍近く増えていた。
「まぁ、そうですね」
「今、どれくらいある？」
「前に測ってもらった時は一万アギ近くありました」
この世界には測定士と呼ばれるアギの量を数値化する職業がある。レッドフレイムドラゴンをの討伐前に測ってもらっていた。
その時の俺のアギの量は一万八十二であった。
ちなみにシャーリアは八千八百七十。ヤヨイは九千十二であった。。

「中々のアギの量だな」
あまり驚いた様子を見せないあたり、まだオリモカ先生の量より少ないのだろう。俺も具体的な数値までは分からないが他人のおおよそのアギの量を推測することができる。多分、俺の倍以上はあるだろう。
おそらくは二～三万アギってところか。
「おっと、脱線してしまったな。それで訊きたいことっていうのは？」
「一時的に魔法を使えなくする……そんな方法ってありますか？」
王族魔法のことを知ってからずっと王を倒す方法を模索していた。
攻略の鍵となるのはやはり王族魔法をいかにして封じ込めるかどうかに掛かっていると思っていた。
「それを知ってどうするつもりだ？」
「勿論、使うんですよ」
「ナハラさんを殺した相手にか？」
きっと俺が、いや俺達がしようとすることにオリモカ先生は反対するだろう。だが、それでも成し遂げなければならない。
「その通りです」
「なら、教えるわけにはいかないな。前にも言った通り、復讐なんかに囚われるな」
「嫌です」
「何？」
祖父は元の世界で苦しい思いをしていたことなど、忘れさせるくらいに優しく接してくれた。
両親を亡くした時だって、俺のことを愛情を持って育ててくれた。復讐に囚われるなという方が無理である。
「俺はじいさんの仇を……どうしても討ちたいんです！」
机を強く叩き、立ち上がった。
「気持ちは分かるが、本当に一人でできると思っているのか？」
「一人じゃありませんよ。シャーリアとヤヨイがいます」
「あいつらもか……お前の復讐の為にあいつらを危険に晒すことになるんだぞ。分かっているのか？」

「はい。ですが、二人も俺と同じです。王に復讐する理由があります」
『王』という単語を耳にすると、眉を顰めた。祖父を殺した犯人が王であることをまだオリモカ先生には伝えていない。
「詳しく話を聞かせてもらおうじゃないか」
オリモカ先生に状況を説明した。シャーリアが元王族であること。ヤヨイが人魚と人間のハーフであること。
レッドフレイムドラゴンを討伐し、王国軍に加入できるようになったこと。
衝撃的な事実を告げているにも関わらず、オリモカ先生は俺の話を平然とした様子で訊いていた。
「驚くことが多すぎて言葉もでねぇな……」
「そうなんですか？　全然そんな風に見えませんけど」
「表情に出してないだけだ。シャーリアが王族でヤヨイが人魚のハーフだぁ？　頭がこんがらがってくるよ……それで、一時的に魔法を使えなくする方法だがな、限定的にだが一応ある」
「ほ、本当ですか？」
「ああ。授業でも説明したが、魔法には呪文名がある。巨大な魔法を発動するさせるには膨大なアギと呪文を唱える必要がある。ベテランクラスになると中位魔法くらいなら呪文無しでも発動すできるんだがな。単純に呪文さえ唱えさせなければ、少なくとも最高位魔法は使えないはずだ」
最高位魔法か……確かにそれも警戒すべきところだがやはり王族魔法の方が恐ろしい。それに、シャーリアは特に呪文を唱えていた様子もなかった。
「先生。昨日、シャーリアに王族魔法を使ってもらったんですけど、呪文を唱えていませんでした。それにアギも消費した感じは無いそうです」
何らかの方法で王が呪文を唱えるのを封じても、王族魔法は使えるのでは無いかと思った。
「王族魔法については私も知らないことが多い。だが、王族しか使えない以上、血が関係しているんだろう」

「血ですか？」
「そうだ。生き物の血にはアギが含まれている。王族の血が作用して王族魔法が使えるのかもしれん」
「なるほど……あの先生、俺が一番警戒しているのは王族魔法なんです。なんとか使えなくする方法は無いでしょうか？」
「シャーリアの血を分析すれば王族魔法を封じる薬がつくれるかもしれん。だが、仮に薬を作ったとして、王と戦えるような状況を作れるのか？　王の周りには常に護衛が付いているんだぞ」
「そ、それは……」
そこまでは考えていなかった。王と護衛を引き離し、戦いに持ち込む。
その状況を生み出すのは確かに難しい。それに向こうが逃げ出すケースも想定しなければならない。
「どうやらそこまでは考えていないようだな。しょうがない。私も協力しよう」
「いや、そんな……悪いですよ」
幾ら何でも無関係の人間を巻き込む気になれなかった。
「馬鹿野郎。元教え子が危ない目に合いそうなのを黙って見過ごせるか」
「それはとてもありがたいですが……」
確かにオリモカ先生が協力してくれるなら心強い。一気に成功確率は上がったと考えてもいいだろう。
だが、それと同時にオリモカ先生を危険に晒すことになる。
「お前が心配することじゃない。明日、ヤヨイとシャーリアを呼んできてくれるか？」
「分かりました。それと、薬を作れる人物ってどんな人なんですか？」
「モリア＝チノハっていう今は商店街の店で働いている人物だ」
「モリアさん？　モリアさんが薬を作れるんですか？」
「なんだお前、あいつを知っているのか？」
本来であれば俺は卒業後にモリアさんのお店で働くつもりであった。祖父が殺された為、断らせてもらうことにしたが。

「はい。前に店で会ったことがあるんです。ムラマサもモリアさんから貰いました」
「あいつがムラマサをな……なら、話は早いな。王を倒すにはもっと協力者が必要だ。ガルド先生にも協力してもらえるよう声を掛けてみる。ムゲン、他にも協力できそうな人はいるか？」
「そうですね……ウィルは立場上、直接的に協力するのは難しいと思いますが、力を貸してくれると思います」
　ウィルとは最近、会ってはいないが王国について調べているはずだ。何か有力な情報を掴んだだろうか。
「ウィルか……あいつが協力してくれればかなり心強いな。ウィルの方はお前に任せていいか？」
「分かりました。必ず王を仕留めてみせます」

真の能力

その日から王の討伐に向けて準備を進めた。ウィルに協力を依頼を要請したところ、彼は快諾してくれた。
王族魔法を封じる薬は完成するまでの間、オリモカ先生には王国軍に加入してもらい、城の情報について探ってもらうことにした。
薬が完成するまで半年余りの時間が掛かったが、その間に有益な情報を掴むことができた。
王国軍の加入式はいつもより護衛の数が少なくなり、希望すれば比較的簡単に護衛に回ることができる。
俺たちが企てた作戦は加入式に転移魔法で王を城から遠い場所へと移動させるというものだ。
オリモカ先生に加入式の日までに式場にて、俺と王にのみ作用する転移魔法の術式を仕掛けてもらうことにした。
転移魔法の移動先にはシャーリアとヤヨイ、そしてウィルとガルド先生にも待ち伏せしてもらっている。
王を味方のいない場所に誘導させ、一気に袋叩きにするというのが主な作戦である。
転移魔法の発動にはかなりの準備が必要となる上に一度に移動できるのは二人までであり、オリモカ先生には後から戦場で駆けつけてもらう予定である。

そして、時間は再び王国軍の加入式へと戻る。シャーリアとヤヨイに加入式を出てもらわなかったのは王が二人を見て、怪しむのを防ぐためである。
大分昔とはいえ、二人は王と出会っている。顔も見られておらず、名前も変えている俺なら王に怪しまれる可能性は少ない。
「アイン＝ダハよ。王国及びこの王の為に忠誠を誓うか」
シャープスネイルベアーの能力を使って、自分の爪を鋭く伸ばす。両親を殺した奴の力を祖父の仇である王に使うことになるとは、随分と皮肉なものである。

「王様。私はあなたに……復讐いたします！」
俺は奴の腕を引っ掻いた。さらに自分の爪から王族魔法を封じる薬を注入する。
前もってモリアさんから貰った薬を自分の体内に注入しておいた。
「貴様！」
護衛が俺を攻撃すべく、接近してきた。その直後、俺と王が立っている場所に大きな魔法陣が現れ、瞬く間にヤヨイ達が待ち構えている場所へと転移した。
「なんだ、ここは？」
王は思ったよりも落ち着いた様子で辺りを見渡した。ヤヨイ達は臨戦状態で王を取り囲んでいる。
「ここはあんたの死に場所だよ」
「ふむ、そうか……何やら変な薬を注入されたようだな。そこにいる奴らはお前の仲間か？」
「そうだ。全員じゃないが、お前に恨みを持っている者達だ」
「ふん……恨みを持つ者というには知らぬ顔ばかりだな」
「エクスプロード！」
王の言葉に怒りを感じたのか、シャーリアは王に魔法をぶつける。しかし、王がダメージを受けた様子は全くない。
「姪の顔を忘れるなんて幾ら何でもひどいんじゃないかしら？　叔父様」
王はシャーリアのことを訝しんだ様子で見つめた。
「……忘れてしまっていて申し訳ない。随分と大きくなったな。シャーリア＝アルフレッド」
「気安く私の名前を呼ばないで欲しいわね。フレイムバースト！」
数多の炎の砲弾を王に発射する。しかし、王がバリアを張り、全て防いだ。
ヤヨイは王がバリアを解くのを見計らい、王に向かっていった。
「水流斬」
的確に王の首を狙うヤヨイであったが、王は魔法で剣を生み出すと、ヤヨイの刀を受け止めた。

「良い太刀だな。褒めて遣わす」
「貴様に褒められても全く嬉しくない！」
ヤヨイは王の魔法を警戒したのか、一度後ろに下がった。王は予想通りかなり強いが、まだ底を見せていない為、底が知れない不気味さがある。
「お前も私に恨みがあるのか？」
「うむ。小生のこと……覚えておらぬか？」
王は顎を摩りながら、ヤヨイのことを見つめていた。そして、少しだけ申し訳なさそうな表情でこう述べた。
「すまない。全然思い出せな」
「殺す」
ヤヨイが高らかにジャンプし、空中でバク転をした。レッドフレイムドラゴンを倒した時の技を使用するつもりだ。
「水転斬」
しかし、刃が王に届く前にヤヨイの腕が斬り落とされてしまった。王が持つ剣の刃には血が付いている。王の太刀が全く見えなかった。
「ぐ……！」
「いたいけなお嬢さんを殺すのは気が引けるが……私に刃を向けてくるのなら仕方ないな」
「何が殺すのは気が引けるだ……貴様はあの時も平然と小生から両親を奪っただろう！」
ヤヨイは不死の力で腕を再生させた。再び地面に落ちているムラマサを握りしめる。
「腕が生えた……まさかお前、あの人魚の娘か？」
「待て！　ヤヨイ」
俺はヤヨイを呼び止めた。ムラマサを持っているヤヨイにはトドメを任せることになっていた。
しかし、怒りで自分を見失っているのか、作戦とは違う行動をしている。
「今は退け」

ヤヨイは無言のまま頷き、王から距離を取った。まずはガルド先生達と連携して、王の体力を削らなければならない。
「アイン＝ダハよ。貴様も私に恨みがあるのだな？」
「その名は偽名だ。本当の名はムゲン＝アベイル。これで分かるか？」
「なるほど。貴様、ナハラ＝アベイルの孫だな」
戦闘を始める前にどうしても王に訊いておきたいことがあった。
「王……どうして祖父を殺したんだ？」
「あいつは特別なエキストラユニークスキルを持っていた。それが私の狙いだった」
「エキストラユニークスキル？　モンスターの力をコピーできる能力が狙いだっていうのか？」
確かに便利な能力であるが、そこまでして欲しいものなのだろうか。
「いや、そうじゃない。私の目的は真の不死だ」
「真の不死？」
王はヤヨイの母親の肉を喰らったことで完全な不死になったと思っていたが、違うのか。
「人魚と混血の娘よ。どこかで見たことのある刀だと思ったら、その刀……ムラマサであろう？　人魚の肉を喰らい、不死の力を手にした私でも、ムラマサで首を斬られれば死んでしまう。しかし、モンスターの能力を『昇華』することができるエキストラユニークスキルならムラマサでも殺せぬ身体となるのだ」
知らなかった……だとすれば、俺が王からエキストラユニークスキルを奪われるのはまずい。
「お、俺のエキストラユニークスキルはモンスターの能力をコピーすることじゃなかったのか……」
「どうやら貴様は能力をコピーすることしかできないようだな。貴様が持っていても宝の持ち腐れだ。大人しく渡してくれるなら、命だけは助けてやるぞ」
「断る。さっきも言っただろ。お前を殺すって。お前に注入したのは

王族魔法を封じる薬だ。今のお前なら俺達でも倒せる」
ここから一気に王を袋叩きにする。できればオリモカ先生の到着を待ちたいところであるが、そこまでの時間の猶予はない。王族魔法を封じる薬にも時間制限があるのだ。
「ふ……ふはははは！」
「な、何がおかしい？」
「この程度で私を追い詰めたつもりか？　王族魔法が使えなくとも貴様ら全員葬ることなど容易いことだ！」
「それは聞き捨てならないな。このワシを倒せるというのなら試してみるといい」
「ガルド先生、僕も手伝いますよ」
ガルド先生とウィルが魔法の準備をした。ガルド先生から爆発的にアギが高まってくるのが伝わってくる。

仲間の死

「そこの老人はまぁまぁ楽しめそうだな」
ガルド先生がこの中で一番の手練れだ。俺はシャーリアに目配せした。
「エクスプロード！」
シャーリアの魔法により、王が爆発に飲み込まれる。
「スモーク！」
王の視界を塞ぐべく、俺は手から黒い煙を王に浴びせた。
「ガルド先生、ウィル。頼む！」
「任せろ！　ヘルブースト！」
ガルド先生は最高位魔法に位置する魔法を使用した。身体の筋肉が倍以上に膨れ上がった。
「エレキアクセル」
ウィルの身体からバチバチと電気が迸る。エレキアクセルは身体能力を向上させる魔法で、上位魔法に位置する。
徐々に煙が消え、王の姿が見えてきた。二人は王に突進する。
数秒間という短い時間の中で二人は見えで追うのがやっとな程の素早い攻撃を繰り出すが、王には一発も当たらなかった。
「おのれ……ちょこまかと」
この二人でも王に攻撃を当てることができないのか。
何とか隙を作れないものか……俺も手助けに行きたいがエキストラユニークスキルを奪われる危険性を考慮すると、迂闊には近づけない。
「サンダーバード！」
ウィルは肉弾戦では分が悪いと思ったのか、鳥形の電撃を飛ばした。
「ちゃちな雷だな。せめてこれくらいはないとな……デスライトニング」
王が放つ黒い稲妻にウィルの魔法はあっさりと打ち消された。
「ウィル！」

「あ……！」
ウィルは黒い稲妻をモロに受けてしまい、黒焦げになって倒れた。
「貴様、よくも私の教え子を！」
ガルド先生は魔力を込めた鉄拳を繰り出そうとした。しかし、王は瞬時にバリアを張った。
ダメだ防がれる――そう思ったが、ガルド先生が「スリップパンチ」と呟くと、拳はバリアをすり抜け王の顔面にヒットした。
「な、なんだと？」
初めて王にダメージが通り、さすがの奴も驚きを隠せないようであった。ガルド先生は立て続けにパンチの雨を浴びせる。
「調子に乗るな。スパイラルテンペスト」
螺旋のように吹き出す暴風によって、ガルド先生は十メートル後方まで吹き飛ばされた。
「少しは効いたか？」
「それなりにはな」
「そいつは嬉しいな。ワシの攻撃はバリアもすり抜けるから注意するようにな」
王の傷は不死の力によって治った。ウィルの様子を確認すると、シャーリアが王族魔法を使って、ウィルの傷を治した。
シャーリアの王族魔法は触れたものの時間を巻き戻す能力である。だが、どんなものでも時間を戻せる訳ではない。
「ウィルくん！　しっかりして、大丈夫？」
「ありがとう。シャーリアさん。助かったよ」
「ほう……王族魔法を使えたか。まずはお前から殺した方が良さそうだな」
王が狙いをシャーリアに定めた。シャーリアを守る為、ハチに変身する。
――シャーリア、下がっていてくれ。
俺は無属性魔法の『テレパシー』を使って、シャーリアに語りかけた。
この魔法でハチの姿になってもヤヨイ以外の人間ともコンタクト

を取れる。また、他者が伝えたい言葉もこの魔法で読み取れることができる。
この魔法は上位魔法に位置するが、レッドフレイムドラゴン討伐後に何とか習得することができた。
「わ、分かったわ！」
自分が出せる最高速度で飛行し、王に針を突き刺そうとするも、王には剣で防がれた。
「中々速いが対処できないほどではない」
だが、想定内だ。これで射程圏内。
「エイフォブルグラビティ」
王に重力を掛ける。さらに、ガルド先生が王の身体を掴んだ。
「小癪な！」
王は重力とガルド先生の力に抗い、脱出しようとした。長くは持ちそうにない。
――やれ、ヤヨイ！
「うむ！」
これでヤヨイが王の首を斬れば俺達の勝ちとなる。ヤヨイがムラマサを振り抜こうとした。
「水転ざ……」
「スプリードエクスプロード」
呪文名を聞いて、思わず背筋が凍りついた。前に見た祖父の記憶が脳裏に過る。
この魔法は……
――みんな離れろ！
テレパシーを使って、全員の脳内に語りかけたが、遅かった。
周囲にとんでもない爆発が起こる。身体が引きちぎれるような痛みが走り、気が遠のいていった。
意識が戻り、目を覚ますと、変身が解けてしまっていた。
右腕と左脚が欠損しており、不死の力により、再生し始めていた。
「目を覚ましたか。ムゲン＝アベイル。どうやら終わったみたいだぞ」

「は？」
王の言葉がよく理解できなかった。みんなは……みんなは無事なのか？
「う、うわあああああああ！」

そこには目を逸らしたくなるほどの惨状が広がっていた。俺の少し先には身体がバラバラになっているガルド先生がいた。
絶望に打ちひしがれた俺はその場に倒れこんだ。
「が、ガルド先生……」
「ウィル君！　ウィル君！」
シャーリアの声が聞こえ、彼女の方に目を向けると、下半身を失っているウィルの姿が見えた。

∞の力

「ウィル……お前まで」
　ウィルの背中が焼き焦げており、おそらくシャーリアのことを庇ったのだろう。
「ま、待ってて。すぐに戻してあげるから」
　シャーリアは王族魔法を使って、ウィルを治そうとした。しかし、ウィルには何も変化は起こらない。
　もっとも、シャーリアもそんなことは知っているはずだが、かなり混乱しているようである。
「ど、どうして？　どうして戻らないのよ！」
「死んだ者の時は戻らん。シャーリア＝アルフレッド。そんなことも知らなかったのか？」
　いや、シャーリアは知っていたはずだ。以前、試しにモンスターの死体に王族魔法を掛けてもらったことがある。
　だが、何も変化は起こらなかった。死んだ者の時間は戻せないことをシャーリアは頭では理解していたのだ。
「そ、そんな……ウィル君。ウィルくーん！」
　シャーリアはその場で泣き崩れた。
「お、俺のせいだ……俺が作戦を見誤ったから……」
　不死の力を持つ王が自分ごと攻撃する可能性を考慮すべきであった。
「その通りだ、ムゲン＝アベイル。お前が悪いのだ。この王に勝負を申し込むこと自体が愚かだったのだ」
「ムゲン殿のせいではない。悪いの貴様だ」
　ヤヨイがゆっくりと王に近づいた。右腕がまだ再生しきってないようで、左手でムラマサを握っていた。
「混血の娘にも不死の力が備わっていたか。やはり、あの時殺しておくべきだったな。しかし驚いたぞ、ムゲン＝アベイルよ。貴様にも不死の力が備わっていたとはな。その娘の肉を喰らったのか？」
「そうだ。エキストラユニークスキルを奪わない限り、俺を殺すこと

はできない」
「それは違うな。純粋な人魚の肉で無ければ完全な不死にはなれない。貴様はこのムラマサで死ぬ」
　王は満身創痍のヤヨイを蹴り飛ばし、ムラマサを奪い取った。
「き、貴様！　ハイドロ……」
「黙れ。エクスプロード」
　王が起こした爆発によって、ヤヨイの身体がバラバラになり、肉と血が地面に飛び散った。
「さてと……混血の娘は再生が終わった後にじっくりと殺すとして、まずは貴様からだ。ムゲン＝アベイル。貴様を殺して貰うぞ。エキストラユニークスキルを」
「一つ聞いておきたい。どうしてムラマサを破壊しておかなかったんだ？　その刀はお前にとっても脅威なんだろ？」
「確かにこの刀は今の私を唯一殺せる代物……だが、他に不死の者が現れたら厄介だから取っておいたのだ」
「だが、この刀は普通にお店に置いてあった」
　モリアさんがどういう経緯でムラマサを入手したか不明だが、少なくとも一度はムラマサを手放したことになる。
「なるほど、そうだったのか。弟との戦いでムラマサをどこかに落としてしまったのだが……こうして私の元に戻ってきたのだ。思う存分使うとしよう」
　ガルド先生とウィルは死に、ヤヨイとシャーリアは今戦うことができない。
　オリモカ先生が到着するまで、何とか王を喰い止めなければならない。
「王。俺はお前が憎い。お前は俺から家族と恩師と友人を奪った。お前のことを殺したくて殺したくて仕方がない。もしも一つだけ願いが叶うなら……俺はお前の死を望む」
「そうか。ならどうするつもりだ？」
「こうするんだよ。エキストラユニークスキル『ハチ』」

祖父が授けてこの∞の力で俺は願いを叶える。

「変身したか……お前が持っていても宝の持ち腐れだと言っただろう」

「そうでもないさ」

シャープスネイルベアーの能力を使って爪を鋭く伸ばし、土を掻き分け、地面の中へと戻っていく。

地面から飛び出し、背後から王に針を突き刺さそうと試みた。

案の定、王は反応し、ムラマサで俺の分身を斬り裂いた。次々と分身を生み出し、地上に飛び出させる。

「分身か……」

王は立て続けに分身を斬っていく。分身に襲わせることで奴のフラストレーションを蓄積させる。そろそろか。

「いい加減にしろ。ブラストファイア！」

王は地面に向かって、炎の最高位魔法を放つ。鼓膜を突き破るかのような地鳴りが鼓膜を突く。

爆風により砂埃が舞い、地面にはまるでクレーターのような大きな穴が空いた。

「再生が終わったら斬り殺してやる。覚悟するがいい」

だが、あいにく再生する必要などない。俺は王の背後を取り、奴の首に針を突き刺した。

「い、いつの間に？」

隠し持っていた奥の手を使った。スケルトンカメレオンのモンスターである背景とどうかする能力を使用した。

便利そうな能力であるが、素早く動くと背景から浮き上がってしまうという弱点がある。

しかし分身を使って、上手く陽動したことで気づかれずにすんだ。

さらにシャイニングバッドの超音波で敵の居場所を探る能力により砂埃の中、王の位置を特定し、背後を取ることに成功したのである。

俺は王からムラマサを取り返し、人間の姿へと戻った。

「これは返してもらうぞ」

丁度再生が終わったヤヨイにムラマサを投げ渡す。かなり強い毒を打ったのだが、王はすでに動けるようになっていた。
「少し甘く見ていたようだな……少しイラっとしたぞ」
王から氷のような冷たさを感じるアギに悪寒がした。ヤヨイにムラマサを返したのは正解だった。ムラマサを奪い返した直後に俺が攻撃しても恐らく防がれたことだろう。
「待たせてすまなかったな」
聞き覚えのなる声がした。振り返るとオリモカ先生がいた。
「お、オリモカ先生……」
オリモカ先生が近づくと、ポンポンと俺の頭を軽く叩いた。
「ガルド先生とウィルのことは残念だったな」
「すみません。俺の責任です」
「自分を責めるな。ここは私に任せてくれ」
「オリモカ＝シエンナ。貴様も裏切り者であったか」
オリモカ先生と王が対峙する。まるで二体の獣が殺し合いを繰り広げるかのような恐怖があった。
「まぁな。こいつらは私の教え子だ」
オリモカ先生が本気で戦おうとしている。在学中でもオリモカ先生が本気で戦うところを見たことがない。

第31話

「ウィンドカッター」
　オリモカ先生が放つ風の刃が王の首を斬り裂いた。しかし、すぐに首は体にくっつく。
「いい魔法だな」
「そいつぁどーも」
「今度はこちらからいこうか。ブラストファイア」
「ウィンドバリア」
　オリモカ先生は王の攻撃を風の障壁で防いだ。さらに、オリモカ先生は宙に浮かび、災害級の風の魔法を次々と放っていった。
　俺はオリモカ先生から離れることにした。下手すれば巻き込まれてしまう。
「バラバラにしてやるよ王様。エクストリームハリケーン」
「ボルケーノプロミネンス」
　天変地異のような暴風と灼熱がぶつかり合い、大地が大きく揺れ動く。
　さすがの王も必死にオリモカ先生の魔法に抵抗していた。
　――今の内に王の首を斬り落とせ。
　オリモカ先生がテレパシーを使って、脳内に話しかけてきた。
「ヤヨイ、王の首を取れ！」
「任せれた！」
　ヤヨイがすぐさま王の首を斬りに向かう。
「無駄だ！」
　王の前に赤い魔法陣が発生し、そこから巨大なサラマンダーが現れた。
　サラマンダーの身体全身は赤く、所々発火していた。奴は炎を吹き出し、ヤヨイの行く手を阻んだ。
「おのれ、これでは近づけぬ」
「ヤヨイ、ムラマサをこっちに寄越せ！」
　ヤヨイが俺にムラマサを投げ渡してきた。ハチに変身し、ムラマサ

の柄を口で掴む。
そのまま、王の首を斬るべく飛行した。
何を思ったか、王は放っていた炎の最高位魔法を止め、オリモカ先生の魔法を生身で受けた。
王の身体はグチャグチャに切り裂かれ、無残な肉の塊と化した。
しかし、その肉の塊は意思を持っているかのように動き出し、その場から立ち去ろうとする。
野郎……逃げる気か。
――オリモカ先生、何とか王の動きを止めてください！
テレパシーを使って、ハチの姿のままオリモカ先生に話しかける。
「分かった！　ウィンドリストレント」
風の束縛が肉の塊と化した王の動きを止める。俺は人間の姿に戻り、肉の塊を斬ってみたが、全くもって手応えはなかった。
「ダメだ……やはり、首を斬らなければ」
しかし、そこで，ある作戦を思いついた。シャーリアに視線を送る。
「シャーリア、王族魔法で王を人型に戻せ！」
「分かったわ！」
シャーリアが肉の塊に手を近づける。王の時が巻き戻り、人の姿へと強制的に戻る。
「お、おのれ……スピリードエクスプロ」
「遅い」
俺はハチに変身し、奴の首に噛り付いた。最高位魔法は呪文を唱えなければ発動することができない。王は必死に炎の中位魔法を使って、俺のことを退けようとした。
一瞬でも力を緩めれば、不死の力によって喉を回復してしまうことだろう。
このまま、トドメを刺さす必要がある。テレパシーを使って、ヤヨイの脳内に語りかけた。
――ヤヨイ、俺ごと斬れ。
「む、ムゲン殿……しかし……」

――頼む。やってくれ。俺からの最後の願いだ。王を倒してくれ。
ヤヨイはムラマサを強く握りしめた。どうやら、覚悟は決まったようだ。
「ムゲン殿……小生はお主のこと、絶対に忘れないであるぞ！」
――俺もだヤヨイ。さぁ、思いっきりやれ！
次の瞬間、喉が焼けるような痛みを感じた。
「水転斬！」
王の首が吹っ飛ぶ光景が見えた。そして、視界はどんどんボヤけていく。
やった、やったんだ……俺は願いを叶えることができた。ありがとう最高の友よ。

「な、なんだここは……」
辺り一面に色とりどりの綺麗な花が咲き誇っており、少し先には透き通るような川が流れている。
なぜかは分からないが、川を渡らなければならない気がした。
そして、一度渡れば戻ってこれない、そんな気がした。
「渡るか……」
足を水につけようとした、その時であった。
「ムゲン」
亡くなったはずの祖父の声が聞こえてような気がした。ふと前を向くと、本当に祖父がいた。
「じいさん！　俺、やったよ。今、そっちに行くから……」
俺は再び足を水につけようとした。
「こっちには来るな！」
祖父が叫んだ。祖父ななぜか悲しそうな表情をしている。
「じいさん……どうして泣いているんだ？」
「すまなかったな。お前の行く末を最後まで見てやれなくて……」
「じいさん、俺……」
「ムゲン、お前は……ワシの自慢の孫だ。これからは自分の為に生きろ」

「ムゲン殿！」
「ヤヨイ……」
　ヤヨイの顔が視界に映る。みんなが心配そうに俺のことを取り囲んでいた。
「よかった、ムゲン君……死んじゃったかと思ったよ」
「生きていて本当に良かったぞ、ムゲン」
　オリモカ先生が優しく頭を撫でてきた。みんなに心配を掛けてしまったようだ。
「目を覚ましたばかりでこんなことを言うのも何だが、ムゲン。お前は早くこの街から出て行った方がいい。直にお前には王を拉致した犯人として指名手配されるだろう」
　元よりそのくらいの覚悟は最初からしていた。復讐が終わったら、この街を離れるつもりであった。
「分かりました。どうか、お元気で。ヤヨイとシャーリアも……達者でな」
「待って、ムゲン君」
　シャーリアは俺の肩に手を置くと、王族魔法で体力とアギを回復させてくれた。
「一緒に戦ってくれて、本当にありがとう！」
　シャーリアは憑き物が落ちたかのように明るく振舞った。
　彼女はとても強い女の子だ。心配することは何もないか。
「シャーリア！　こちらこそ一緒に戦ってくれたこと、心から感謝する。いい王様になれよ」
「わ、私が王様に？」
「うん。シャーリアならやれるさ。この国を任せたぞ」
　シャーリアならきっとこの国を良い方法へと導いてくれると信じている。一緒に戦ったからこそ分かる。
　シャーリアはとても強く、優しい人間だ。立派な王様になるだろう。
「私……やってみる！」

シャーリアと握手を交わし、続けてオリモカ先生、最後にヤヨイと握手をした。
「それじゃ、またどこかで！」
軽く手を振り、三人とお別れした。しばらくの間、あてもなく雑木林を彷徨っていた。
「さてと……これからどうするかな」
復讐も終え、特にやることも無くなった。これからは自分の生きる目的を探したい。
「待たれよ」
誰かに呼び止められた。聞き覚えのある声。まさか……
「や、ヤヨイ……どうしてここに？」
なんと、声の主はヤヨイであった。
「ムゲン殿のことを追ってここまで来たのだ。これから一体どこに行くつもりであるか？」
「さぁ、別に決めてないよ」
「そうか。では、一緒にジャポニに向かわぬか？」
「……いいな、それ」
ヤヨイの提案に乗ることにした。一度、ジャポニには行ってみたいと思っていた。
「では、向かうとしよう。後、ムゲン殿……」
俺が「なんだ？」と聞く前にヤヨイが俺の頬に口付けしてきた。
「小生、ムゲン殿のことが好きである」
「奇遇だな、俺もだよ」